

志木市遺跡群 27

中野遺跡第85地点

城山遺跡第102地点

2024

埼玉県志木市教育委員会



中野遺跡第85地点 4号住居跡遺物出土状態



中野遺跡第85地点 4号住居跡遺物出土状態



城山遺跡第102地点 339号住居跡遺物出土状態



城山遺跡第102地点 339号住居跡刀子出土状態

はじめに

志木市教育委員会
教育長 柚木 博

ここに刊行する『志木市遺跡群27』は、平成25年度・令和4年度に国庫補助事業として、教育委員会が発掘調査を実施した成果をまとめたものです。

今回報告する遺跡は、中野遺跡第85地点、城山遺跡第102地点の2地点分です。

中野遺跡第85地点では、縄文時代後期の住居跡、弥生時代後期の住居跡などが発見されました。特に、縄文時代後期の住居跡は、市内初の発見となった柄鏡形敷石住居であり、大変貴重な資料になりました。

城山遺跡第102地点では、縄文時代の掘立柱建築遺構・土坑、古墳時代後期の住居跡、奈良時代の住居跡、平安時代の住居跡・土坑、中世以降の土坑・溝跡など、多くの遺構・遺物が発見されました。

今回の調査においても本市の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な資料を得ることができました。この成果が郷土史研究をはじめ、多くの人々に幅広く活用されることを切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別の御理解と御協力を頂いた事業主体者、そして深い御理解と御協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者に対し、心から感謝申し上げます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市に所在する遺跡群のうち、平成25年度に発掘調査を実施した中野遺跡第85地点、令和4年度に発掘調査を実施した城山遺跡第102地点の2地点分の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘作業・整理作業・報告書刊行作業は、志木市教育委員会が主体となり、国庫及び県費の補助金の交付を受け実施した。また、城山遺跡第102地点については、個人住宅兼事務所建築であったため、土木工事主体者（個人）から発掘調査費用の一部を受け実施した。
3. 本書の作成において、編集は大久保聡が行った。執筆は下記以外を大久保が行った。
 - 第1章、第2章第3節（2）出土遺物、第3章第5節、第5章第1節（2）・第2節（2） 尾形則敏
 - 第4章第1節 黒沼保子（株式会社パレオ・ラボ）
 - 第4章第2節 伊藤 茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・森 将志（株式会社 パレオ・ラボAMS年代測定グループ）
 - 第4章第3節 バンダリ スダルシャン（株式会社パレオ・ラボ）
4. 遺物の実測は星野恵美子・松浦恵子が主に行い、城山遺跡第102地点339号住居跡出土の鉄製品（刀子・鎌）については木村結香が行った。遺構・遺物のデジタルトレースは深井恵子・青木 修・池野谷有紀が行った。遺物の写真撮影は青木が行った。
5. 発掘作業における表土剥ぎ作業及び埋戻し作業については、株式会社大塚屋商店（代表取締役 綱島正人）に委託し、重機オペレータは田中三二が担当した。
6. 本書に掲載した石器については、有限会社アルケーリサーチ（取締役社長 藤波啓容）に実測を委託した。
7. 第4章の自然科学分析については、株式会社パレオ・ラボ（代表取締役 中村賢太郎）に委託した。
8. 本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は、志木市立埋蔵文化財保管センターに一括して保管している。
9. 調査組織（令和5年度）

調査主体者	志木市教育委員会
教 育 長	柚 木 博
教 育 政 策 部 長	今 野 美 香
生 涯 学 習 課 長	土 崎 健 太
生 涯 学 習 課 副 課 長	吉 成 和 重
生 涯 学 習 課 主 査	徳 留 彰 紀
”	大 久 保 聡
生 涯 学 習 課 主 任	尾 形 則 敏
”	吉 田 ひろみ
”	石 川 千 尋
生 涯 学 習 課 主 事	塚 原 会 理（～令和5年6月）
”	木 村 結 香

生涯学習課主事補	吉田優奈(令和5年8月～)
調査担当者	徳留彰紀
〃	大久保 聡
〃	尾形則敏
〃	木村結香
志木市文化財保護審議会	井上國夫(会長)
〃	深瀬 克(委員)
〃	上野守嘉(委員)
〃	新田泰男(委員)
〃	大木雄平(委員)

10. 発掘作業及び整理作業参加者

〈中野遺跡第85地点〉

○発掘調査

調査担当者	大久保 聡・尾形則敏
調査員	深井恵子
調査補助員	星野恵美子・鈴木浩子
作業員	小林 律・林 ゆき子・増田千春・松浦恵子・村田浩美

○整理作業

調査員	深井恵子・青木 修
調査補助員	星野恵美子
作業員	秋山良友・池野谷有紀・片山 望・小林詠美子・高田美智子・ 林 ゆき子・福田浩明・増田千春・松浦恵子・村田浩美・山口優子

〈城山遺跡第102地点〉

○発掘調査

調査担当者	徳留彰紀・大久保 聡・尾形則敏・木村結香
調査補助員	星野恵美子
作業員	秋山良友・池野谷有紀・片山 望・小林詠美子・二階堂美知子・ 福田浩明・松浦恵子・村田浩美・山口優子

○整理作業

調査員	深井恵子・青木 修
調査補助員	星野恵美子
作業員	秋山良友・池野谷有紀・片山 望・小林詠美子・二階堂美知子・ 福田浩明・松浦恵子・村田浩美・山口優子

11. 発掘作業・整理作業・報告書刊行作業には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である(敬称略)。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化資源課・(公財)埼玉埋蔵文化財調査事業団・
朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・
富士見市立水子貝塚資料館・富士見市立難波田城資料館

齊藤 純・都築恵美子・照林 敏郎・宮田 圭祐

12. 本報告に係る文化財保護法に基づく各種届出等及び指示通知については、下記の通りである。

〈中野遺跡第85地点〉

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）

平成25年12月10日付け 教生文第5-1168号

○埋蔵物の文化財認定について（通知）

平成26年3月31日付け 教生文第7-237号

〈城山遺跡第102地点〉

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）

令和4年10月21日付け 教生文第5-1346号

○埋蔵物の文化財認定について（通知）

令和5年1月20日付け 教生文第7-129号

凡 例

1. 本報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第1図 1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製

第2・21図 1：2,500 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成27年4月発行
株式会社ゼンリン

2. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

3. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。また、同一遺構の水系レベルは統一して示した。

4. ビット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるビットでも、おそらく後世のビットと思われるものには、数値を省略した。

5. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

6. 遺構挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内にその内容を示したが、遺物挿図版中のスクリーントーンは、土器の赤彩範囲を示す。

7. 土器一覧表「法量」項中にある表記については、以下のとおりである。また、現存値は〔 〕、推定値は（ ）を付した。

高：器高 口：口径 底：底径 厚：器厚

8. 土器・土製品一覧で使用した色調は、『新版 標準土色帖 1999年版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を参考にした。

9. 遺構の略記号は、以下のとおりである。

J＝縄文時代の住居跡 Y＝弥生時代後期の住居跡 H＝古墳時代後期～平安時代の住居跡

T＝掘立柱建築遺構 D＝土坑 M＝溝跡 P＝ビット

目 次

巻頭図版／はじめに

例 言／凡 例／目 次／挿図目次／表 目 次／図版目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2章 中野遺跡第85地点の調査	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 縄文時代の遺構・遺物	12
第3節 弥生時代後期の遺構・遺物	31
第4節 中世以降の遺構	34
第5節 遺構外出土遺物	36
第3章 城山遺跡第102地点の調査	39
第1節 遺跡の概要	39
第2節 縄文時代の遺構・遺物	43
第3節 古墳時代後期の遺構・遺物	48
第4節 奈良・平安時代の遺構・遺物	52
第5節 中世以降の遺構・遺物	62
第6節 遺構外出土遺物	84
第4章 自然科学分析	96
第1節 城山遺跡第102地点の炭化材の樹種同定	96
第2節 城山遺跡第102地点出土炭化材の放射性炭素年代測定	97
第3節 城山遺跡第102地点から出土した炭化種実	99
第5章 調査のまとめ	102
第1節 中野遺跡第85地点の調査成果	102
第2節 城山遺跡第102地点の調査成果	106

図 版
報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)	2
第2図	中野遺跡の調査地点 (1/3,000)	10
第3図	確認調査時の遺構分布 (1/200)	11
第4図	遺構分布図 (1/200)	11
第5図	4号住居跡 (1/60・1/30)	14・15
第6図	4号住居跡礎出土状態 (1/40)	16
第7図	4号住居跡遺物出土状態 (1/40)	17
第8図	4号住居跡出土接合礫1 (約1/5)	18
第9図	4号住居跡出土接合礫2 (約1/5)	19
第10図	4号住居跡出土遺物1 (1/4・1/3)	23
第11図	4号住居跡出土遺物2 (2/3・1/3・1/4)	24
第12図	4号住居跡出土遺物3 (1/4)	25
第13図	縄文時代の土坑 (1/60)	29
第14図	117号土坑出土遺物 (1/4・1/3)	30
第15図	縄文時代のビット (1/60)	30
第16図	3号住居跡 (1/60)	32
第17図	3号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	33
第18図	中世以降の土坑 (1/60)	35
第19図	中世以降のビット (1/60)	36
第20図	遺構外出土遺物 (2/3・1/3)	37
第21図	城山遺跡の調査地点 (1/3,000)	40
第22図	確認調査時の遺構分布 (1/250)	41
第23図	遺構分布図 (1/250・1/100)	42
第24図	13号掘立柱建築遺構 (1/60)	44
第25図	13号掘立柱建築遺構出土遺物 (1/3・2/3)	44
第26図	1444号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)	46
第27図	縄文時代のビット (1/60)	47
第28図	倒木痕出土遺物 (1/3)	48
第29図	340号住居跡・遺物出土状態 (1/60・1/30)	49
第30図	340号住居跡カマド (1/30)	50
第31図	340号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	51
第32図	338号住居跡・遺物出土状態 (1/60)	53
第33図	338号住居跡カマド (1/30)	54
第34図	338号住居跡出土遺物 (1/4)	55
第35図	339号住居跡・遺物出土状態 (1/40・1/20)	57
第36図	339号住居跡カマド (1/30)	58
第37図	339号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	59
第38図	平安時代の土坑・出土遺物 (1/60・1/3)	61

第39図	平安時代のビット (1/60)	62
第40図	中世以降の土坑1 (1/60)	65
第41図	中世以降の土坑2 (1/60)	67
第42図	中世以降の土坑3 (1/60)	71
第43図	中世以降の土坑4 (1/60)	73
第44図	中世以降の土坑出土遺物 (1/4・1/3・4/5)	76
第45図	76号溝跡 (1/60)	77
第46図	中世以降のビット1 (1/60)	78
第47図	中世以降のビット2 (1/60)	79
第48図	中世以降のビット3 (1/60)	80
第49図	中世以降のビット出土銭貨 (4/5)	83
第50図	遺構外出土遺物1 (2/3・1/3)	85
第51図	遺構外出土遺物2 (1/3)	86
第52図	遺構外出土遺物3 (1/3)	87
第53図	遺構外出土遺物4 (1/4・1/3・4/5)	88
第54図	暦年校正結果	98
第55図	柄鏡形敷石住居の事例 (1/100)	104
第56図	志木市出土の古墳時代～平安時代の刀子 (1/3)	110
第57図	志木市出土の古墳時代～平安時代の鎌 (1/3)	110

目 次

第1表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1
第2表	4号住居跡炉・埋壘出土礫一覧	20
第3表	4号住居跡出土礫一覧 (1)	20
	4号住居跡出土礫一覧 (2)	21
	4号住居跡出土礫一覧 (3)	22
第4表	4号住居跡出土礫接合個体一覧	22
第5表	4号住居跡出土土器一覧	26
第6表	4号住居跡出土石器一覧	27
第7表	縄文時代の土坑一覧	30
第8表	117号土坑出土土器一覧	30
第9表	縄文時代のビット一覧	31
第10表	3号住居跡出土土器一覧 (1)	33
	3号住居跡出土土器一覧 (2)	34
第11表	中世以降の土坑一覧	36
第12表	中世以降のビット一覧	36
第13表	遺構外出土石器一覧	37

第14表	遺構外出土縄文土器一覧	38
第15表	城山遺跡第102地点の発掘調査工程表	41
第16表	13号掘立柱建築遺構ピット一覧	45
第17表	13号掘立柱建築遺構出土土器一覧	45
第18表	13号掘立柱建築遺構出土石器一覧	45
第19表	1444号土坑出土土器一覧	47
第20表	縄文時代のピット一覧	47
第21表	倒木痕出土土器一覧	48
第22表	340号住居跡出土土器一覧表	51
第23表	340号住居跡出土鉄製品・石製品一覧	52
第24表	338号住居跡出土土器一覧	55
第25表	338号住居跡出土石製品一覧	56
第26表	339号住居跡出土土器一覧	60
第27表	339号住居跡出土土製品・鉄製品一覧	60
第28表	1449号土坑出土土器一覧	61
第29表	1450号土坑出土土器一覧	61
第30表	平安時代のピット一覧	62
第31表	中世以降の土坑一覧(1)	74
	中世以降の土坑一覧(2)	75
第32表	中世以降の土坑出土陶器・土器一覧	76
第33表	中世以降の土坑出土石製品・鉄製品一覧	76
第34表	1453号土坑出土銭貨一覧	76
第35表	76号溝跡出土陶器一覧	77
第36表	中世以降のピット一覧(1)	81
	中世以降のピット一覧(2)	82
第37表	中世以降のピット出土銭貨一覧	83
第38表	49号ピット出土鉄滓一覧	83
第39表	遺構外出土石器一覧	89
第40表	遺構外出土縄文土器一覧(1)	90
	遺構外出土縄文土器一覧(2)	91
	遺構外出土縄文土器一覧(3)	92
	遺構外出土縄文土器一覧(4)	93
	遺構外出土縄文土器一覧(5)	94
第41表	遺構外出土縄文時代土製品一覧	94
第42表	遺構外出土弥生時代後期～平安時代土器一覧	95
第43表	遺構外出土陶磁器一覧	95
第44表	遺構外出土土製品・金属製品一覧	95
第45表	遺構外出土銭貨一覧	95
第46表	樹種同定結果	96
第47表	測定試料および処理	97
第48表	放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	97

第49表	城山遺跡第102地点から出土した炭化種実	100
第50表	志木市出土の古墳時代～平安時代の刀子一覧（報告済）	111
第51表	志木市出土の古墳時代～平安時代の鎌一覧（報告済）	111

図版目次

図版1	中野遺跡第85地点 1. 調査前風景 2. 表土剥ぎ風景 3～7. 4号住居跡遺物出土状態
図版2	中野遺跡第85地点 1・2. 4号住居跡大形礫出土状態 3. 4号住居跡 4. 4号住居跡炉 5. 4号住居跡埋糞 6. 4号住居跡P1・10 7. 4号住居跡P2
図版3	中野遺跡第85地点 1. 4号住居跡P3 2. 4号住居跡P4 3. 4号住居跡P5 4. 4号住居跡P6 5. 4号住居跡P7・8 6. 4号住居跡P11 7. 117号土坑 8. 118号土坑
図版4	中野遺跡第85地点 1. 119号土坑 2. 120号土坑 3. 2号ピット 4. 3号ピット 5. 5号ピット 6. 6号ピット 7・8. 3号住居跡
図版5	中野遺跡第85地点 1. 3号住居跡凸堤付近 2. 3号住居跡掘り方 3. 114～116号土坑 4. 1号ピット 5. 4号ピット 6. 7号ピット 7. 調査風景
図版6	中野遺跡第85地点 4号住居跡出土接合礫1
図版7	中野遺跡第85地点 4号住居跡出土接合礫2
図版8	中野遺跡第85地点 4号住居跡出土遺物1
図版9	中野遺跡第85地点 4号住居跡出土遺物2
図版10	中野遺跡第85地点 1. 117号土坑出土遺物 2. 3号住居跡出土遺物 3. 遺構外出土遺物
図版11	城山遺跡第102地点 1. 調査前風景 2. 確認調査風景 3. 表土剥ぎ風景 4. 遺構確認状況 5. 13号掘立柱建築遺構（南から） 6. 13号掘立柱建築遺構（東から） 7. 13号掘立柱建築遺構P1 8. 13号掘立柱建築遺構P2・3
図版12	城山遺跡第102地点 1. 13号掘立柱建築遺構P4 2. 13号掘立柱建築遺構P5 3. 1444号土坑遺物出土状態 4. 1444号土坑 5. 56号ピット 6. 64号ピット 7. 76号ピット 8. 倒木痕
図版13	城山遺跡第102地点 1・2. 340号住居跡遺物出土状態 3. 340号住居跡（東から） 4. 340号住居跡（西から）

5. 340号住居跡カマド
6. 340号住居跡貯蔵穴
7. 340号住居跡P1
8. 340号住居跡掘り方

図版14 城山遺跡第102地点

1. 338号住居跡遺物出土状態(南から)
2. 338号住居跡遺物出土状態
3. 338号住居跡(西から)
4. 338号住居跡カマド
5. 338号住居跡カマド掘り方
- 6～8. 339号住居跡遺物出土状態

図版15 城山遺跡第102地点

1. 339号住居跡刀子出土状態
2. 339号住居跡(南から)
3. 339号住居跡(西から)
4. 339号住居跡カマド
5. 339号住居跡P1
6. 339号住居跡P2
7. 339号住居跡P3
8. 339号住居跡掘り方

図版16 城山遺跡第102地点

1. 1149・1150号土坑遺物出土状態
2. 1149・1150号土坑
3. 33・34号ピット
4. 1437号土坑
5. 1438号土坑
6. 1439号土坑
7. 1440号土坑
8. 1445号土坑

図版17 城山遺跡第102地点

1. 1446号土坑
2. 1148号土坑
3. 1451～1457号土坑(東から)
4. 1451～1457号土坑(南から)
5. 1460号土坑
6. 1461号土坑
7. 1462号土坑
8. 1463～1466号土坑

図版18 城山遺跡第102地点

1. 76号溝跡(東から)
2. 76号溝跡(南から)
3. 1号ピット
4. 11号ピット
5. 38号ピット
6. 61号ピット
7. 63号ピット
8. 77号ピット

図版19 城山遺跡第102地点

1. 調査区全景(東から)
2. 調査区全景(南東から)
3. 調査区全景(北東から)
4. 調査風景
5. 埋戻し風景

図版20 城山遺跡第102地点

1. 13号掘立柱建築遺構出土遺物
2. 1444号土坑出土遺物
3. 倒木痕出土遺物
4. 340号住居跡出土遺物

図版21 城山遺跡第102地点

1. 338号住居跡出土遺物
2. 339号住居跡出土遺物1

図版22 城山遺跡第102地点

1. 339号住居跡出土遺物2
2. 平安時代の土坑出土遺物
3. 中世以降の土坑・溝跡出土遺物
4. 中世以降のピット出土遺物

図版23 城山遺跡第102地点

遺構外出土遺物1

図版24 城山遺跡第102地点

遺構外出土遺物2

図版25 城山遺跡第102地点

遺構外出土遺物3

図版26 城山遺跡第102地点

1. 城山遺跡第102地点339号住居跡出土の炭化材走査型電子顕微鏡写真
2. 城山遺跡第102地点から出土した炭化種実

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 市域の地形と遺跡

(1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.05㎢、人口約7万6千人の自然と文化の調和する都市である。

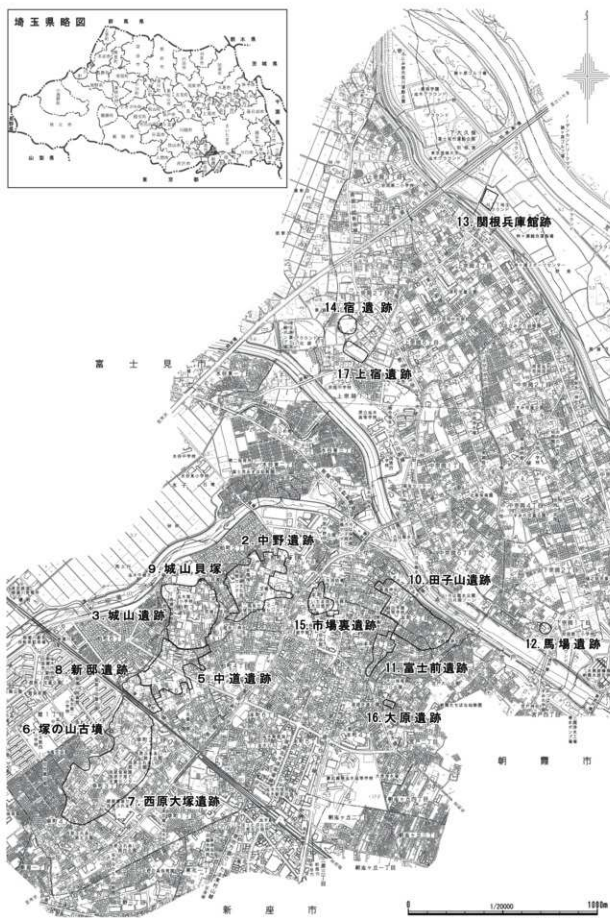
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新邸遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	71,220㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄(早～晩)、弥(後)、古(前～後)、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、地下式坑、井戸跡、溝跡、段切状遺構等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	82,520㎡	畑・宅地	貝塚・城館跡・集落跡・墓跡	旧石器、縄(草創～晩)、弥(中～後)、古(前～後)、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、跡造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、古銭、跡造関連遺物等
5	中道	55,600㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄(早～後)、弥(後)、古(前～後)、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800㎡	林	古墳?	古墳?	古墳?	なし
7	西原大塚	164,960㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄(前～晩)、弥(後)、古(前～後)、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、地下式坑、井戸跡、溝跡、段切状遺構等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	18,900㎡	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄(早～中)、古(前～後)、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900㎡	林	貝塚	縄(前)	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	74,030㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄(草創～晩)、弥(後)、古(後)、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	14,830㎡	宅地	集落跡	縄文、弥(後)～古(前)、平安、近世以降	住居跡、土坑?、溝跡?	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800㎡	畑	集落跡	古(前)	住居跡?	土師器
13	開明兵庫跡	4,900㎡	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700㎡	水田	館跡	中世	溝跡、井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	15,120㎡	宅地	集落跡・墓跡	縄文、弥(後)～古(前)、中世以降	住居跡、方形周溝墓、土坑	弥生土器、土師器、土師質土器
16	大原	1,700㎡	宅地	集落跡	近世以降?	溝跡	なし
17	上宿	8,600㎡	水田・宅地	集落跡・墓跡	平安、中・近世	住居跡、土坑、溝跡、井戸跡	住居跡、須恵器、陶磁器、板碑等
合計		524,580㎡					

令和6年1月31日現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)

令和6年1月31日現在

遺跡(3)、中野遺跡(2)、市場裏遺跡(15)、田子山遺跡(10)、富士前遺跡(11)、大原遺跡(16)と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡(12)、宿遺跡(14)、関根兵庫館跡(13)が認められる。最新では、平成30年12月、新たに新河岸川左岸流域で上宿遺跡(17)が発見され、自然堤防上に位置する遺跡の存在も明らかにされつつある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した13遺跡に塚の山古墳(6)、城山貝塚(9)を加えた15遺跡である(第1図・第1表)。

(2) 歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62(1987)年の富士見・大原線(現ユリノキ通り)の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層の第IV層上部・第VI層・第VII層で、礫群や石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6(1994)年度には2か所、平成7(1995)年度には1か所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。令和元(2019)年には第224地点で立川ローム層の第IV層下部～第V層上部・第VII層から石器集中地点と礫群が検出されている。

平成11～14(1999～2002)年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点では、立川ローム層の第IV層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。平成28(2016)年に発掘調査された中野遺跡第91㊦地点からは、礫群1基が検出された。令和元～2(2019～2020)年にかけて発掘調査された中野遺跡第109地点では、立川ローム層第IV層下部～第V層を中心とする石器集中地点が検出されており、石核調整剥片の良好な接合資料が出土している。

また、城山遺跡では、平成13(2001)年に発掘調査が実施された第42地点から、立川ローム層の第IV層上部と第VII層の2か所で石器集中地点が検出されている。平成20・21(2008・2009)年に調査が実施された第62地点(道路・駐車場部分)でも1か所の石器集中地点が検出され、ナイフ形石器・剥片が出土している。平成23(2011)年に発掘調査が実施された第71地点では、立川ローム層の第IV層下部～第V層上部で石器集中地点2か所、礫群9基が検出された。令和元(2019)年には第96地点で立川ローム層の第IV層下部～第V層上部・第VI層・第VII層で石器集中地点と礫群が検出されている。

2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉(諸磯式期)の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4(1992)年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6(1994)年に発掘調査が実施された城山遺跡第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10(1998)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡としては、令和4(2022)年に田子山遺跡第172

地点で市内初となる燃糸文期の住居跡が1軒検出された。また、平成18(2006)年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点では、早期末葉(条痕文系)の10号住居跡が検出されている。土器としては、田子山遺跡で燃糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。平成23(2011)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第121地点のローム上層の遺物包含層から燃糸文系土器・石器がまとめて出土している。また、城山・中野・田子山遺跡からは、条痕文系土器が炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で前期中葉の黒浜式期の住居跡が検出され、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。令和元(2019)年度に発掘調査が実施された城山第96地点、令和3～4(2021～2022)年に実施された中野遺跡第116①地点では、前期後葉の諸磯a式期の住居跡が検出されている。そのうち、城山遺跡第96地点では貝層を持つ住居跡が3軒検出された。住居内貝層からヤマトシジミ・マガキが検出されている。平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で200軒以上の住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡1軒が確認されているが、平成28(2016)年に発掘調査された中道遺跡第76地点からは、加曾利EⅣ式の両耳壺を出土する住居跡1軒が検出された。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡2軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1か所、平成25(2013)年度に発掘調査が実施された中野遺跡第85地点からは、称名寺式期の市内初の柄鏡形住居(敷石住居)1軒が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6(1994)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、称名寺式期の土器が出土している。その他、平成26(2014)年に発掘調査された西原大塚遺跡第204地点や平成27・28(2015・2016)年に発掘調査された中野遺跡第91地点から、包含層出土遺物として、縄文時代後期(称名寺式～堀之内式期)の遺物が比較的まとめて出土している。最新資料として、平成30(2018)年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第216地点で、堀之内1式期の住居跡が1軒検出されている。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されている。また、令和3(2021)年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第234地点で、遺構外出土ではあるが、縄文時代晩期～弥生時代初頭に位置づけられる土器片が1点発見されている。以降市内では弥生時代中期まで空白の時代となる。

3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、前期の遺跡は検出されていないが、中期については令和元(2019)年に発掘調査された城山遺跡第96地点で市内初となる宮ノ台式期の住居跡1軒、方形周溝墓1基が検出された。住居跡からは甕、甕、高坏、扶人柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石包丁が良好な状態で出土している。なお、これらの資料のうち、土器、石器、土製品計44点は、城山遺跡10号住居跡出土遺物として、考古資料として、市指定文化財(令和3年7月1日付け)に指定されている。

弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる遺跡は数多く検出されている。中でも、平成27・28

(2015・2016)年に発掘調査された中野遺跡第91地点からは、弥生時代後期前葉に比定される久ヶ原式土器を出土する住居跡が発見されている。平成6(1994)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子(イネ・アワ・ダイズなど)、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、竈目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が670軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。平成24(2012)年に発掘調査が実施された第179地点からは、遺存状態は良好ではないが、市内初の銅釧が出土している。

昭和62(1987)年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、平成15(2003)年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18(2006)年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓制が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高環が出土していることに注目される。また、平成11(1999)年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見され、この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土製品をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺土器が出土している。なお、鳥形土製品1と壺形土器4点の計5点は、考古資料として、市指定文化財(平成25年3月1日付け)に指定されている。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15(2003)年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7(1995)年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後葉から7世紀後葉にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後葉以降、周辺地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期(7世紀中葉)の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化

材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後葉から7世紀後葉にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で265軒、次いで中野遺跡で58軒、中道遺跡で20軒、田子山遺跡で17軒、新邸遺跡で1軒を数える。

また住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後葉以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整形形で2か所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられ、今後この一帯での古墳の発見に期待されている。

5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山・富士前遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「富」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例として貴重な資料であろう。この住居跡からはその他、須恵器環や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。平成20・21（2008・2009）年の城山遺跡第62地点の調査では、平安時代の241号住居跡から皇朝十二銭の一つである富壽神寶とくじゆしんぼうが2枚とその近くからは鉄鎌1点と土錘1点が出土しており、祭祀行為が行われたと考えられる貴重な例として、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群と南比企窯跡群の製品という生産地の異なる須恵器環が相伴して出土したことにより、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

最新では、令和元（2019）年と令和3（2021）年に一般国道254号和光富士見バイパス事業に伴い発掘調査が実施された上宿遺跡により、平安時代の住居跡・土壇・溝跡などが検出され、宗岡地区における自然堤防上に立地する遺跡の存在が明らかになりつつある。

なお、以上のうち、城山遺跡128号住居跡出土の銅印ほか9点の遺物と城山遺跡第241号住居跡出土の富壽神寶ほか2点の遺物は、考古資料として、市指定文化財（平成25年3月1日付け）に指定されている。

6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と大塚千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『館村旧記たてくらふるし』（註1）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。近年では、『廻国雑記かいこくざっぎ』（註2）に登場する「大石信濃守館おおいししののかみやうた」が「柏の城」に相当し、『大塚十玉坊おおくらじゆぎやうぼう』についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山 1978・2002）。

また、平成7（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出され

ている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成8（1996）年度に発掘調査が実施された第35地点から、鑄造関連の遺構が検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鑄型、三叉状土製品、砥石などが出土している。最新資料では、平成27・28（2015・2016）年に発掘調査された第89地点の調査により、第35地点の鑄造関連の捨て場が明らかになった。この調査により、鍋本体の大型鑄型、鍋の耳部分の小型鑄型、三叉状・四叉状土製品・トリペ・砥石などの道具類や鉄滓（スラッグ）などの大量の遺物が斜面に流れ込むように出土した。

平成13（2001）年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

戦国期の資料としては、平成6（1994）年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、鎧の札である鉄製品1点と鉄鎌1点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、段切状遺構の坑底面から頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑、その他、ピット列・土坑・井戸跡・溝跡などが検出された。その後、平成27（2015）年度に第49地点の北側に隣接する第95地点の調査が実施され、段切状遺構の坑底面より、新たに土坑45基・井戸跡2基・溝跡1本・ピット231本などが検出された。特に、土坑のうち、市内で初めて「T字形」の火葬土坑5基が検出されたことは特筆すべきである。こうした墓域的な様相が僅かながら判明しつつある中、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」に関連する遺構ではないかとの見方がある。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7（1995）年の第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院」^{しょうりんざんくわんおんじだいじゆういん}に関連遺構と考えられる。その後、平成25（2013）年には、中道遺跡第74地点の発掘調査が実施され、段切状遺構の平場から多数のピットや溝跡などが検出され、上記を裏付ける追加資料となった。

最新資料としては、令和2・3年度に発掘調査を実施した西原大塚遺跡第234地点の地下式坑（912号土坑）から、人骨（女性2体）と完形品の播鉢が共存する良好な資料が発見された。人骨は「通常とは異なる状況」で埋葬されたと考えられ（田中 2022）、播鉢は古瀬戸後期IV古～新段階（藤澤 2008）に比定されることから、時期は中世（15世紀中葉～後葉）のものと考えられる。

また、令和元（2019）年と令和3（2021）年に一般国道254号和光富士見バイパス事業に伴い発掘調査が実施された上宿遺跡により、中・近世の土壇・井戸跡・溝跡などの多くの遺構が検出され、中世における『宗岡宿』の様相や近世における千光寺に関連する墓域群などを知ることができる貴重な成果

につながった。

7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの錆着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

【註】

註1 『館村日記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原仲右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

註2 『廻回雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）年6月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐる、駿河甲斐にも足をのぼし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

【引用文献】

神山健吉 1978「『廻回雑記』に現れる 大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第7号 志木市郷土史研究会

2002「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号 志木市郷土史研究会

田中 信 2022「第4章 調査のまとめ 第3節 中世以降について」『西原大塚遺跡第234地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第86集 埼玉県志木市教育委員会

藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

第2章 中野遺跡第85地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

中野遺跡は、志木市柏町1丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北方約1.2kmに位置している。本遺跡は、北側に柳瀬川を臨む台地上に位置し、標高は北端で約9m、南端で約11mを測り、台地縁辺は緩やかに北側の低地に移行している。遺跡の西側には南北方向に谷が入り込んでおり、その谷の西側には城山遺跡が広がっている。遺跡の現況は、宅地化が急激に進んでおり、現在では畑地はほとんど見られなくなっている。

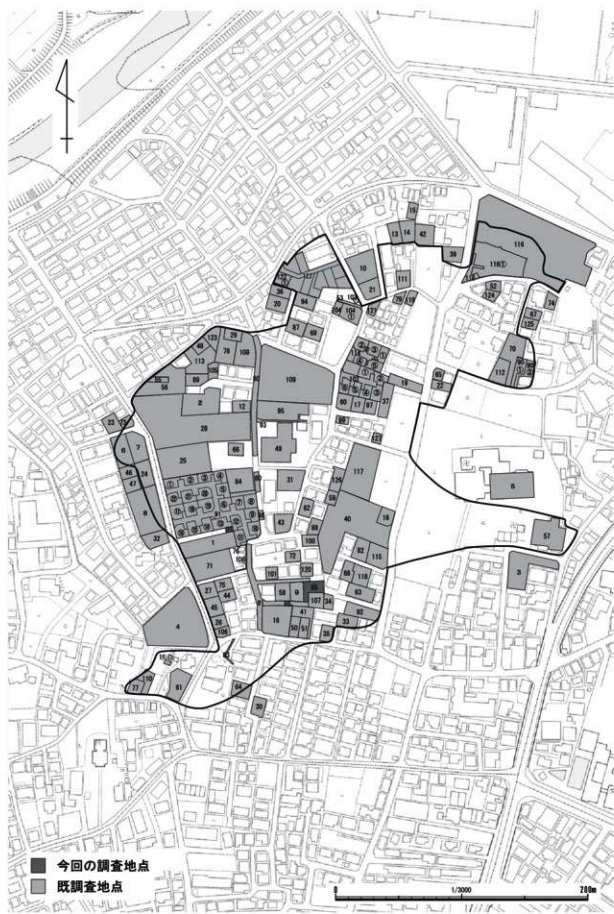
本遺跡の最初の発掘調査は、昭和59(1984)年に実施された第2地点で、これまでに127地点の調査(令和6年1月31日現在)が実施され(第2図)、旧石器時代、縄文時代早～晩期、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良・平安時代、中・近世に至る複合遺跡であることが判明している。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成25年9月26日に実施した。調査区内に3本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、縄文時代の住居跡もしくは遺物包含層、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡1軒を確認した(第3図)。そのため、ただちに依頼者に調査の結果を報告し、保存対策について検討を依頼したが、地盤改良工事を実施するため盛土保存は不可能であるという回答を得た。よって、平成25年10月17日から、発掘調査を実施することに決定した。

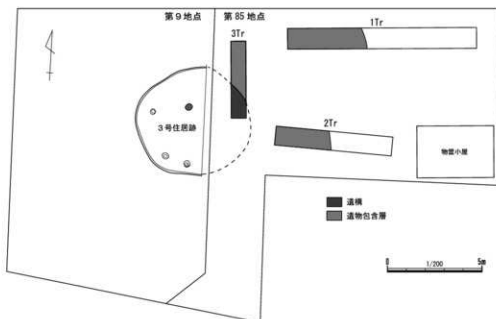
以下、発掘調査の大まかな経過を説明することにする。

- 10月17日 重機による表土剥ぎ作業を開始する。
- 18日 引き続き表土剥ぎ作業を行い、本日中に表土剥ぎ作業を終了する。
- 21～24日 人員導入による発掘作業を開始する。器材を現地に搬入し、調査区の整備と遺構確認作業を行った。縄文時代の土坑(117～119D)、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡(3Y)、中世以降の土坑(114～116D)の精査を開始する。3Yは調査区西側に隣接する第9地点から延びる住居跡である。114～116D、118・119Dの精査を終了する。
- 28～31日 縄文時代の住居跡(4J)・土坑(120D)の精査を開始する。4Jは、調査区南壁での覆土の観察と遺構プランから柄鏡形住居として精査を行った。住居西側の張出部付近で埋甕が検出された。3Y、117・120Dの精査を終了する。3Yは出土遺物の特徴から、弥生時代後期に比定され、古墳時代前期まで下らないものと考えられる。
- 11月1～8日 4Jの精査。遺物・礫出土状況の写真撮影を行い、遺物・礫の取り上げを行う。炉は8日 大形の分割礫が使用された石囲炉であった。炉、ピットの精査を開始する。
- 11～13日 引き続き4Jの精査。完掘全景写真撮影を行う。埋甕・炉の掘り方の精査を終了する。
- 14～16日 埋戻し作業を開始する。16日には埋戻し作業を終了し、すべての調査を完了する。

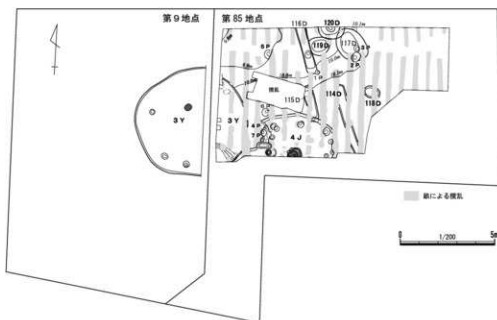


第2図 中野遺跡の調査地点 (1/3,000)

令和6年1月31日現在



第3図 確認調査時の遺構分布 (1 / 200)



第4図 遺構分布図 (1 / 200)

第2節 縄文時代の遺構・遺物

(1) 概要

縄文時代の遺構としては、住居跡1軒(4J)、土坑4基(117~120D)、ピット3本(2・3・5P)が検出された。

住居跡は後期初頭の称名寺式期の柄鏡形住居であり、市内では初の検出例となった。

土坑からは良好な出土遺物は少なく、117Dから中期前葉の五領ヶ台式土器、中期後葉の加曾利E式土器が僅かに出土した。

ピットについては、出土遺物がなかったため、詳細な時期を設定できなかったが、覆土の観察から縄文時代のもつと判断した。

(2) 住居跡

4号住居跡

遺 構 (第5~9図、図版6・7、第2~4表)

【位 置】 調査区南端。

【検出状況】 畝の耕作による攪乱が著しい。3Y、115D、4・7Pに切られる。3Yの精査後、攪乱を除去し、調査区壁の断面と平面プランを確認した結果、柄鏡形住居であることが判明した。

【構 造】 平面形：柄鏡形。東側に円形の主体部、西側に張出部が位置する。主軸方位：N-90°-E。規模：張出部を通る住居長軸の全長4.95m以上/主体部の長軸現況4.07m/短軸現況2.33m/張出部の長軸現況0.88m/幅現況0.40m/確認面からの深さ16~24cm。壁溝：検出されなかった。壁：約40~45°で緩やかに立ち上がる。床面：主体部中央は概ね平坦であるが、主体部の壁際では床面レベルが中央より8cm程度高くなる。埋甕周辺の床面は主体部よりも一段下がる。張出部の西端では床面レベルが高くなる。炉：石囲炉。主体部中央に位置する。掘込規模は長軸72cm/短軸現況48cm/床面からの深さ20cm。掘り込みは円形を呈し、縁辺部に一段の段差を持ち、中央部が深くなる。覆土は4層に分層され、特に4層は段差部分に炉石の直下に認められる。炉の底面には広い範囲で被熱赤化・硬化が認められた。炉石(第2表)は炉の北側から西側にかけて掘り込みの段差部分に配置されていた。東側については炉12の礫以外、畝の攪乱によって消失したと考えられる。炉石の多くは分割された礫や石皿の破片(炉5)で、ブロック状や板状である。石材は炉1・2・7~14が砂岩、炉3~6が閃緑岩である。炉3・炉4・炉6は炉5と同質石材であり、石皿の分割礫と考えられる。また、炉の攪乱内から閃緑岩製の石皿片が出土しており、炉石として転用されたものと思われる。炉石の表面には、炉の内側に面する部分に被熱による赤化や煤けによる黒色化、タール状の付着物が認められた。炉石の接合関係は炉1・炉2・炉7~9・炉14(接合個体1)、炉10・炉11・石124・石144・石149・石163(接合個体2)、炉3・炉4(接合個体4)で認められた(第4表)。接合個体2では、炉石と主体部覆土中の礫とが接合している。埋甕：主体部と張出部の連結付近に1基検出した。深鉢形土器の胴部中位~底部(第10図2)が埋設されていた。東半の胴部中位を畝の攪乱により欠損している。西半には磨石(第12図34)1点、礫5点(第2表)が埋甕に沿うように出土した。掘り込みは径32cmの円形で、床面からの深さ17cm。東側に半円状で浅い段差が認められる。柱穴：11本を検出した。主体部の壁際

にP1～7・10・11が巡る。P1とP10は重複する。主体部と張り出部との連結部には、長楕円形のP8が埋塞に隣接して位置する。P9は南北方向に延びる溝状のピットである。礫：主体部を中心に131点出土した（第3表）。礫の大きさは最小で長さ1.8cm、最大で長さ24.6cmである。礫の重量は最小で2g、最大で4400g。重量別の組成では1～100g未満の礫は93点、100～200g未満の礫は12点、200～300g未満の礫は2点、300～400g未満の礫は7点、400～1000g未満の礫は10点、1000g以上の礫は7点である。400g以上の大形礫は拳大～人頭大程度の大きさである。石材は砂岩106点、チャート17点、頁岩7点、ホルンフェルス1点である。礫形状は亜円礫～円礫である。平面分布は主体部の壁から30～60cm内側に帯状にまとまっている。特に住居東側P3・4・11付近では敲石（第11図31）や石皿片（第11図35）とともに大形礫が列状に並び、その大形礫の上に小礫が積み重なるように出土している。また、P8・10上に礫がまとまって分布する。垂直分布では床面直上から覆土上層にかけて出土している。400g以上の礫は床面直上から覆土下層にかけての出土が多い。礫の接合関係は炉10・炉11・石124・石144・石149・石163（接合個体2）、石129・石138・4J一括（接合個体3）で認められた（第4表）。接合個体2の炉石以外では石124が主体部東側、石144が主体部北側、石149がP10上、石163がP8上に分布する。接合個体4では石129が主体部東側、石138が主体部北側に分布する。

〔覆土〕セクションA-A'～C-C'で18層（2～19層）に分層された。堆積状況から、住居外側から内側へ流れ込むような堆積を示している。

〔遺物〕土器は67点、石器は石礫未製品2点・二次加工のある剥片2点・剥片24点・砕片42点・打製石斧1点・敲石4点（接合後3点）・磨石2点・石皿4点の計81点（接合後80点）が出土した。第10図1は主体部西壁付近の床面～覆土中層からの出土であり、礫集中と一部重なる。第10図2は埋塞である。第10図8はP8の覆土中からの出土である。その他の土器片は覆土中～上層からの出土が多い。石器については、炉付近から住居北側にかけて剥片・砕片が集中して出土した。剥片・砕片の垂直分布は覆土下層から上層にかけて認められる。剥片・砕片の石材別点数は黒曜石60点、チャート5点、凝灰岩1点である。黒曜石製の石礫未製品（第11図18）は剥片・砕片の集中部の周縁で住居壁際から出土している。打製石斧（第11図29）はP5とP10間から礫とまとまって出土した。磨石・敲石・石皿については、床面からの出土が多く、礫とまとまって出土しているもの（第11図30・31、第12図32・35）、炉石に転用されているもの（第12図36）がある。

〔時期〕後期初頭（称名寺1式期）。

〔所見〕礫が壁の内側に帯状に分布し、特に主体部奥壁側に大形礫が列状に並び、その上に小礫が積み重なって出土したことや、炉石と住居壁付近からそれぞれ離れて出土した分割礫と接合するなど、意図的な礫の配置が考えられることから、柄鏡形敷石住居として捉えることができる。

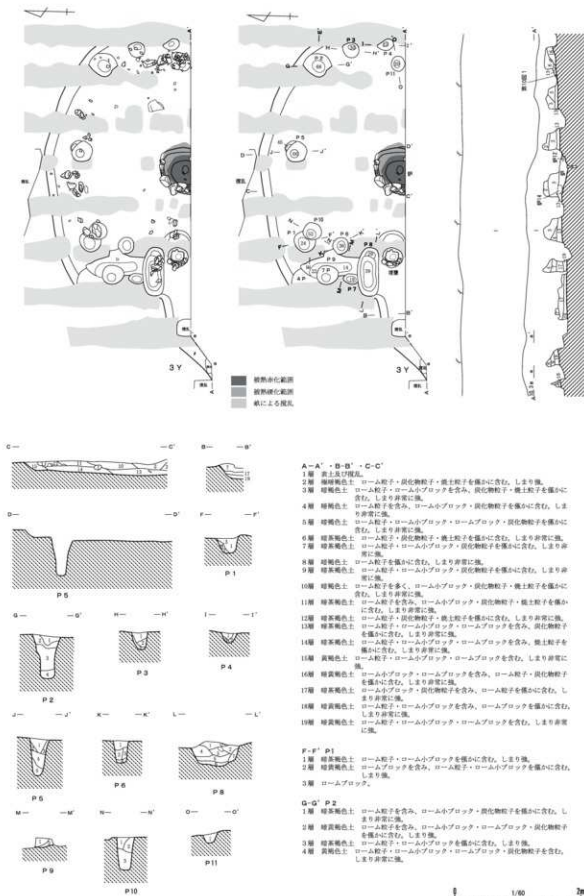
〔遺物〕（第10～12図、図版8・9、第5・6表）

〔土器〕（第10図1～17、図版8-1～17、第5表）

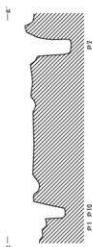
復元個体2点、破片資料15点を図示した。1・9～17は称名寺1式、3～8が加曾利E式の深鉢形土器である。2は後期初頭の深鉢形土器とした。1は口縁部～胴部中位に渦巻文が施される。

〔石器〕（第11・12図18～37、図版8・9-18～37、第6表）

19点を図示した。18・19は石礫未製品、20・21は二次加工のある剥片、22～28は剥片、29は打製石斧、30～32は敲石、33・34は磨石、35～37は石皿である。



第5図 4号住居跡(1/60・1/30)

**H-H' P3**

- 1層 暗褐色土 ローム粒子を含む。ローム小ブロックを塊状に含む。しまり強。
 2層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。ロームブロックを塊状に含む。しまり強。
 3層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。炭化植物粒子を塊状に含む。しまり強。

I-I' P4

- 1層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを塊状に含む。しまり非常に強。
 2層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまり非常に強。
 3層 暗黄褐色土 ローム粒子を含む。ローム粒子を塊状に含む。しまり非常に強。

J-J' P5

- 1層 暗黄褐色土 ローム粒子・炭化植物粒子を含む。ローム小ブロックを塊状に含む。しまり非常に強。
 2層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまり非常に強。
 3層 暗黄褐色土 腐土ブロックを含む。ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを塊状に含む。しまり強。
 4層 暗黄褐色土 ローム小ブロック・ロームブロックを含む。ローム粒子を塊状に含む。しまり非常に強。

K-K' P6

- 1層 暗黄褐色土 ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化植物粒子を塊状に含む。しまり非常に強。
 2層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまり強。
 3層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。ロームブロックを塊状に含む。しまり強。
 4層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまり非常に強。

L-L' P8

- 1層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化植物粒子を含む。しまり非常に強。
 2層 褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。ロームブロックを塊状に含む。しまり強。
 3層 暗褐色土 ローム粒子を多く。ローム小ブロックを含む。炭化植物粒子を塊状に含む。しまり非常に強。
 4層 暗黄褐色土 ローム粒子を多く。ローム小ブロックを含む。炭化植物粒子・焼土粒子を塊状に含む。しまり非常に強。
 5層 暗黄褐色土 ローム小ブロックを多く。ローム粒子・炭化植物粒子を含む。しまり非常に強。
 6層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまり非常に強。
 7層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。ロームブロックを塊状に含む。しまり非常に強。

M-M' P9

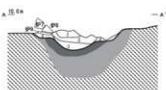
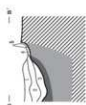
- 1層 暗褐色土 ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化植物粒子を塊状に含む。しまり非常に強。
 2層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまり非常に強。

N-N' P10

- 1層 暗黄褐色土 ローム粒子を含む。ローム小ブロック・ロームブロック・炭化植物粒子・焼土粒子を塊状に含む。しまり強。
 2層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化植物粒子を含む。しまり強。
 3層 黄褐色土 ローム粒子を含む。ローム小ブロックを塊状に含む。しまり強。

O-O' P11

- 1層 暗黄褐色土 ローム粒子を含む。ローム小ブロック・ロームブロック・炭化植物粒子を塊状に含む。しまり非常に強。

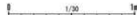


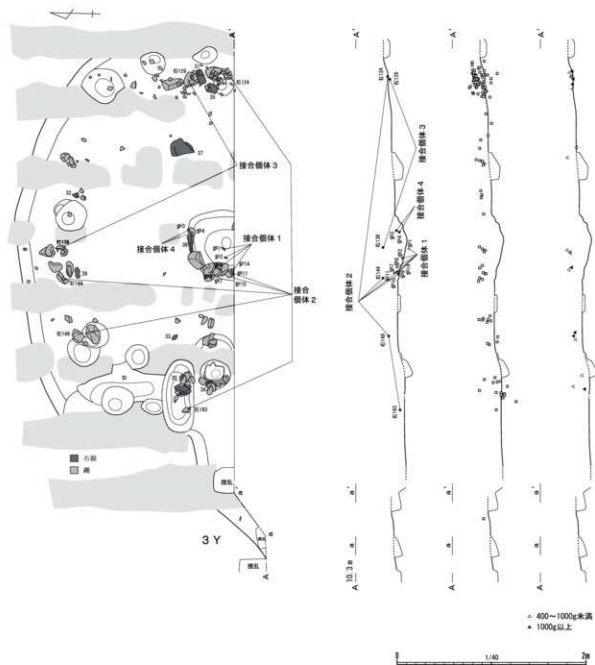
■ 焼土赤化範囲
 ■ 焼土緑化範囲



- 1層 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む。炭化植物粒子を塊状に含む。しまり強。
 2層 暗黄褐色土 焼土粒子・ローム小ブロックを多く。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを塊状に含む。しまり強。
 3層 暗黄褐色土 焼土粒子・ローム小ブロックを多く。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを塊状に含む。しまり強。
 4層 暗褐色土 ローム粒子を多く。ローム小ブロックを含む。焼土粒子・ローム小ブロックを塊状に含む。しまり非常に強。

- 1層 暗褐色土 ローム粒子・炭化植物粒子を塊状に含む。しまり非常に強。
 2層 暗黄褐色土 ローム粒子を多く。ローム小ブロック・炭化植物粒子を含む。しまり非常に強。
 3層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化植物粒子を塊状に含む。しまり非常に強。
 4層 暗黄褐色土 ローム小ブロックを含む。ローム粒子・ローム小ブロックを塊状に含む。しまり非常に強。

埋篋



接合個体1 (SP1+SP2+SP7+SP8+SP9+SP14)



接合個体2
(SP10+SP11+石124+石144+石149+石163)

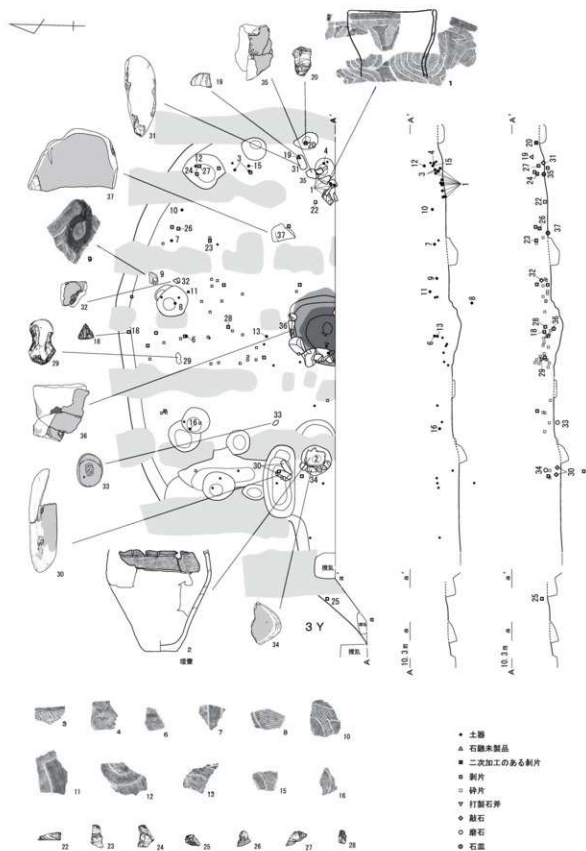


接合個体3 (石129+石138+4J一括)

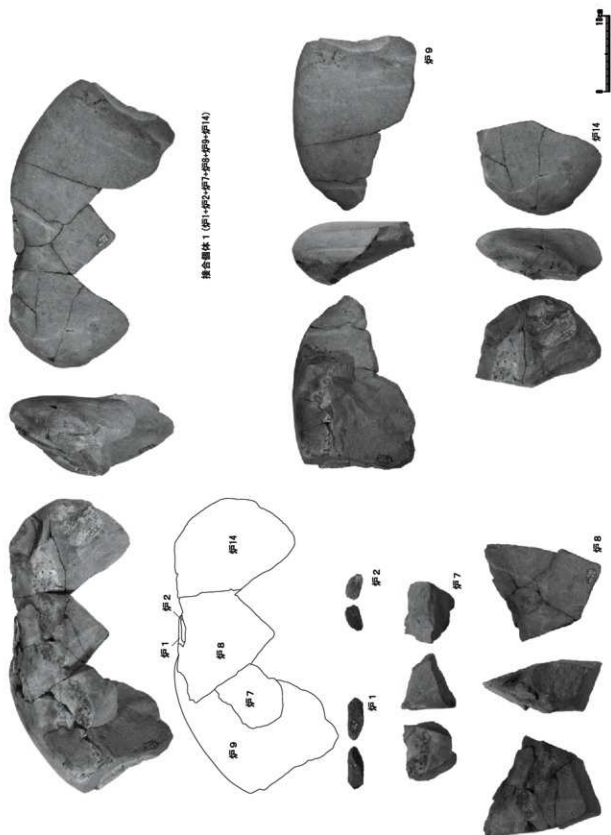


接合個体4
(SP3+SP4)

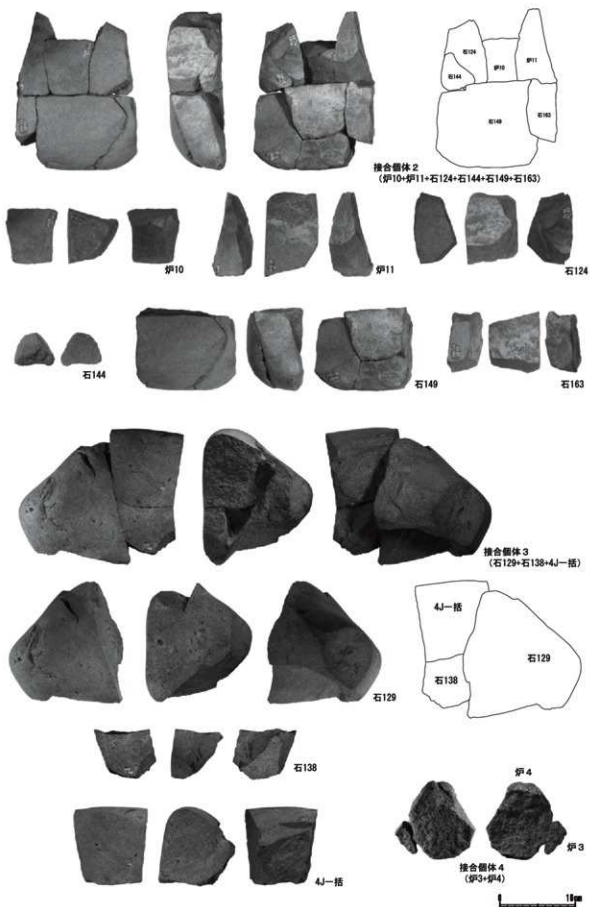
第6図 4号住居跡出土状態 (1/40)



第7図 4号住居跡遺物出土状態(1/40)



第8図 4号住居跡出土接合礫1(約1/5)



第9図 4号住居跡出土接合礫2(約1/5)

第2章 中野遺跡第85地点の調査

遺物番号	検出番号	種別	石材	遺存状況	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	赤化	黒色化	付着物	破断面赤化	破断面黒色化	破断面付着物	出土位置	備考
伊1	第8図伊1 図版6-伊1	礎	砂岩	E	2.2	5.7	1.0	13.0	-	-	-	-	-	-	伊	接合個体1 (+伊2+伊7+伊8+伊9+伊14)
伊2	第8図伊2 図版6-伊2	礎	砂岩	E	2.0	3.5	0.7	5.0	-	-	-	-	-	-	伊	接合個体1 (+伊1+伊7+伊8+伊9+伊14)
伊3	第9図伊3 図版7-伊3	礎	閃緑岩	E	3.1	2.6	1.4	10.0	-	-	-	-	-	-	伊	接合個体4 (+伊4) / 石皿破片の可能性
伊4	第9図伊4 図版7-伊4	礎	閃緑岩	D	10.2	8.0	3.4	272.0	△	-	-	-	-	-	伊	接合個体4 (+伊3) / 石皿破片の可能性
伊5	第12図36 図版9-36	石皿	閃緑岩	D	15.2	14.8	5.2	879.6	-	-	-	-	-	-	伊	石皿破片 / 部分的に使用面あり
伊6	-	礎	閃緑岩	C	19.8	14.8	10.1	4300.0	△	-	-	△	-	-	伊	石皿破片の可能性
伊7	第8図伊7 図版6-伊7	礎	砂岩	D	8.9	8.3	6.7	487.0	-	△	-	-	△	-	伊	接合個体1 (+伊1+伊2+伊7+伊8+伊9+伊14)
伊8	第8図伊8 図版6-伊8	礎	砂岩	D	13.8	12.6	9.8	1327.0	-	△	-	-	△	-	伊	接合個体1 (+伊1+伊2+伊7+伊9+伊14)
伊9	第8図伊9 図版6-伊9	礎	砂岩	C	23.8	12.3	9.2	3010.0	△	△	△	-	△	-	伊	接合個体1 (+伊1+伊2+伊7+伊8+伊14) / タール状付着物
伊10	第9図伊10 図版7-伊10	礎	砂岩	D	7.3	6.8	6.7	403.0	-	△	-	-	-	-	伊	接合個体2 (+伊11+石124+石144+石149+石163)
伊11	第9図伊11 図版7-伊11	礎	砂岩	D	11.5	7.7	4.8	453.0	-	△	-	-	-	-	伊	接合個体2 (+伊10+石124+石144+石149+石163)
伊12	-	礎	砂岩	A	9.6	9.5	3.0	429.0	○	△	-	-	-	-	伊	
伊13	-	礎	砂岩	E	3.4	2.5	1.7	15.0	-	-	-	-	-	-	伊	
伊14	第9図伊14 図版7-伊14	礎	砂岩	D	17.3	11.6	7.7	1680.0	△	△	△	-	△	-	伊	接合個体1 (+伊1+伊2+伊7+伊8+伊9) / タール状付着物
伊カク	-	石皿	閃緑岩	D	14.6	10.9	6.1	954.0	△	-	-	-	-	-	伊	撥乱出土 / 石皿破片 / 部分的に使用面あり
埋1	-	礎	砂岩	C	7.7	5.8	6.8	462.0	-	-	-	-	-	-	埋	埋
埋2	第12図34 図版9-34	磨石	砂岩	C	113.1	78.1	63.3	502.0	-	-	-	-	-	-	埋	埋
埋3	-	礎	砂岩	A	6.6	5.3	2.3	114.0	-	-	-	-	-	-	埋	埋
埋4	-	礎	砂岩	A	7.0	4.2	3.1	137.0	-	-	-	-	-	-	埋	埋
埋5	-	礎	チャート	A	10.1	7.1	4.8	504.0	-	-	-	-	-	-	埋	埋

遺存状況：A (完形) / B (9割以上) / C (5割以上) / D (5割以下) / E (小破片)
赤化・黒色化・付着物：○ (あり) / △ (僅かにあり) / - (なし)

第2表 4号住居跡炉・埋蔵出土礎一覽

遺物番号	検出番号	種別	石材	遺存状況	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	赤化	黒色化	付着物	破断面赤化	破断面黒色化	破断面付着物	備考
石35	-	礎	砂岩	A	4.6	3.4	2.2	47.0	-	-	-	-	-	-	
石36	-	礎	頁岩	D	5.2	5.2	1.9	67.0	-	-	-	-	-	-	
石37	-	礎	チャート	A	3.7	3.2	2.2	34.0	-	-	-	-	-	-	
石38	-	礎	砂岩	A	2.4	2.3	1.2	10.0	-	-	-	-	-	-	
石39	-	礎	砂岩	A	3.1	3.1	1.6	21.0	-	-	-	-	-	-	
石40	-	礎	砂岩	A	3.5	2.8	1.8	25.0	-	-	-	-	-	-	
石41	-	礎	砂岩	A	3.2	3.2	1.7	20.0	-	-	-	-	-	-	
石42	-	礎	砂岩	A	4.3	3.3	2.5	41.0	-	-	-	-	-	-	
石43	-	礎	頁岩	A	3.3	3.1	1.8	23.0	-	-	-	-	-	-	
石45	-	礎	砂岩	A	4.7	3.2	2.0	37.0	-	-	-	-	-	-	
石46	-	礎	砂岩	A	2.9	2.1	0.9	8.0	-	-	-	-	-	-	
石47	-	礎	砂岩	A	4.2	3.4	1.6	26.0	-	-	-	-	-	-	
石48	-	礎	チャート	A	2.7	1.3	1.1	6.0	-	-	-	-	-	-	

遺存状況：A (完形) / B (9割以上) / C (5割以上) / D (5割以下) / E (小破片)
赤化・黒色化・付着物：○ (あり) / △ (僅かにあり) / - (なし)

第3表 4号住居跡出土礎一覽 (1)

遺物 番号	発掘番号 図版番号	種別	石材	遺存 状況	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	赤化	黒色化	付着物	縦断面 赤化	縦断面 黒色化	縦断面 付着物	備 考
石49	-	礎	砂岩	C	4.3	3.0	1.8	34.0	-	-	-	-	-	-	
石50	-	礎	頁岩	A	3.1	2.6	1.5	15.0	-	-	-	-	-	-	
石51	-	礎	チャート	A	4.6	3.6	1.4	25.0	-	-	-	-	-	-	
石52	-	礎	チャート	A	3.1	2.6	1.6	17.0	-	-	-	-	-	-	
石53	-	礎	砂岩	A	3.5	1.5	1.6	14.0	-	-	-	-	-	-	
石55	-	礎	砂岩	D	3.6	2.2	2.0	18.0	-	-	-	-	-	-	
石112	-	礎	砂岩	E	2.2	2.0	1.5	7.0	-	-	-	-	-	-	
石113	-	礎	砂岩	A	4.0	2.7	1.3	21.0	-	-	-	-	-	-	
石115	-	礎	砂岩	A	2.8	2.1	1.3	9.0	-	-	-	-	-	-	
石117	-	礎	頁岩	B	3.9	3.2	2.8	45.0	-	-	-	-	-	-	
石118	-	礎	砂岩	C	5.7	4.0	2.4	49.0	-	-	-	-	-	-	
石121	-	礎	砂岩	C	4.5	3.0	2.4	40.0	-	-	-	-	-	-	
石123	-	礎	砂岩	A	2.7	2.2	1.4	11.0	-	-	-	-	-	-	
石124	第9図石124 図版7-石124	礎	砂岩	D	9.5	7.2	5.8	596.0	-	-	-	-	-	-	組合躯体2(+炉10+炉11+石124 +石149+石163)
石125	-	礎	砂岩	A	7.5	6.1	2.5	152.0	-	-	-	-	-	-	
石126	-	礎	砂岩	B	17.3	16.1	8.7	2920.0	○	-	-	○	-	-	
石129	第9図石129 図版7-石129	礎	砂岩	B	16.2	15.4	15.3	3810.0	△	△	-	-	-	-	組合躯体3(+石138+4J一括)
石130	-	礎	砂岩	A	24.6	10.2	8.3	3110.0	-	-	-	-	-	-	
石131	-	礎	砂岩	A	5.9	5.5	2.1	94.0	-	-	-	-	-	-	
石132	-	礎	砂岩	A	3.2	3.1	0.9	13.0	-	-	-	-	-	-	
石133	-	礎	チャート	A	10.5	7.4	5.3	490.0	-	-	-	-	-	-	
石134	-	礎	砂岩	C	11.4	6.0	4.2	336.0	-	-	-	-	-	-	
石135	-	礎	砂岩	A	5.7	5.0	2.9	91.0	-	-	-	-	-	-	
石136	-	礎	砂岩	C	12.3	8.4	6.4	844.0	-	-	-	-	-	-	
石137	-	礎	砂岩	D	15.9	11.4	4.9	908.0	○	-	△	○	△	-	埋付着
石138	第9図石138 図版7-石138	礎	砂岩	D	9.5	5.6	5.6	393.0	△	-	-	-	-	-	組合躯体3(+石129+4J一括)
石139	-	礎	チャート	A	7.7	7.5	6.7	408.0	-	-	-	-	-	-	
石140	-	礎	チャート	A	14.3	11.0	8.1	1720.0	-	-	-	-	-	-	
石141	-	礎	砂岩	D	10.7	6.8	5.8	409.0	-	-	-	-	-	-	
石142	-	礎	砂岩	A	10.7	7.0	1.6	180.0	○	-	-	-	-	-	
石143	-	礎	砂岩	D	6.7	6.3	4.0	139.0	-	-	-	-	-	-	
石144	第9図石144 図版7-石144	礎	砂岩	E	5.3	4.3	2.0	44.0	-	△	-	-	-	-	組合躯体2(+炉10+炉11+石124 +石149+石163)
石145	-	礎	砂岩	A	12.5	6.1	6.3	512.0	-	-	-	-	-	-	
石146	-	礎	砂岩	C	7.8	6.8	5.0	373.0	△	-	-	△	-	-	
石147	-	礎	砂岩	B	6.3	5.0	2.5	108.0	-	-	-	-	-	-	
石148	-	礎	砂岩	C	19.8	13.3	14.7	4400.0	○	-	-	△	-	-	
石149	第9図石149 図版7-石149	礎	砂岩	C	12.8	11.6	7.6	1860.0	-	△	-	-	-	-	組合躯体2(+炉10+炉11+石124 +石144+石163)一部光沢面あり
石150	-	礎	砂岩	D	7.9	5.8	4.9	245.0	△	△	-	-	△	-	
石151	-	礎	砂岩	D	6.2	4.4	3.2	92.0	-	-	-	-	-	-	
石153	-	礎	砂岩	A	6.8	3.4	2.4	76.0	-	-	-	-	-	-	
石154	-	礎	砂岩	A	10.3	4.3	2.8	148.0	-	-	-	-	-	-	

遺存状況：A（完好）／B（9割以上）／C（5割以上）／D（5割以下）／E（小破片）
赤化・黒色化・付着物：○（あり）／△（僅かにあり）／-（なし）

第3表 4号住居跡出土礎一覽（2）

第2章 中野遺跡第85地点の調査

遺物 番号	発見番号 図版番号	種別	石材	遺存 状況	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	赤化	黒色化	付着物	破断面 赤化	破断面 黒色化	破断面 付着物	備 考
石155	-	礎	砂岩	A	10.5	5.0	2.7	183.0	-	-	-	-	-	-	
石156	-	礎	砂岩	C	20.2	10.6	5.6	728.0	△	-	-	-	-	-	
石157	-	礎	砂岩	A	9.8	6.8	4.5	394.0	-	-	-	-	-	-	
石158	-	礎	砂岩	A	6.2	4.3	2.1	72.0	-	-	-	-	-	-	
石159	-	礎	砂岩	C	14.1	9.2	4.0	628.0	○	-	△	○	-	-	埋付着
石160	-	礎	砂岩	A	7.8	5.5	3.2	166.0	-	-	-	-	-	-	
石163	第9図版163 図版7-石163	礎	砂岩	D	8.3	7.5	3.9	343.0	-	-	-	-	-	-	接合個体2(+炉10+炉11+石124 +石144+石149)
石164	-	礎	砂岩	A	10.4	6.3	2.8	174.0	-	-	-	-	-	-	
石165	-	礎	砂岩	A	10.9	8.3	5.4	678.0	-	-	-	-	-	-	
石170	-	礎	砂岩	E	6.7	4.4	1.2	41.0	-	-	-	-	-	-	
石171	-	礎	砂岩	A	2.4	1.5	1.1	5.0	-	-	-	-	-	-	
石172	-	礎	ホルン フェルス	E	3.7	2.2	1.2	12.0	-	-	-	-	-	-	
石173	-	礎	砂岩	A	2.3	1.8	1.0	4.0	-	-	-	-	-	-	
石174	-	礎	砂岩	E	2.2	1.6	1.4	6.0	-	-	-	-	-	-	
石175	-	礎	砂岩	E	1.8	1.1	1.0	2.0	-	-	-	-	-	-	
石176	-	礎	砂岩	A	2.3	1.6	0.8	3.0	-	-	-	-	-	-	
石177	-	礎	チャート	A	3.3	2.8	2.1	23.0	-	-	-	-	-	-	
石178	-	礎	砂岩	D	2.9	2.3	1.7	12.0	-	-	-	-	-	-	
石179	-	礎	砂岩	D	7.0	5.5	4.0	104.0	-	△	-	-	△	-	
石180	-	礎	砂岩	E	2.4	1.3	0.9	3.0	-	-	-	-	-	-	
石181	-	礎	砂岩	D	3.3	2.9	3.4	14.0	-	-	-	-	-	-	
石182	-	礎	頁岩	B	4.8	3.3	1.1	21.0	-	-	-	-	-	-	
石184	-	礎	砂岩	A	6.2	4.1	3.2	105.0	-	-	-	-	-	-	
石185	-	礎	砂岩	A	3.5	3.2	2.5	36.0	-	-	-	-	-	-	
石187	-	礎	チャート	A	5.6	3.7	2.0	56.0	-	-	-	-	-	-	
石188	-	礎	砂岩	A	5.0	3.0	2.7	47.0	-	-	-	-	-	-	
石189	-	礎	砂岩	C	5.7	3.8	2.5	56.0	-	-	-	-	-	-	
石191	-	礎	砂岩	A	4.3	2.2	0.7	8.0	-	-	-	-	-	-	
石192	-	礎	砂岩	A	12.0	5.3	4.1	261.0	-	-	-	-	-	-	
石193	-	礎	砂岩	A	10.1	8.0	3.4	366.0	-	-	-	-	-	-	
石194	-	礎	砂岩	A	2.6	1.6	1.3	7.0	-	-	-	-	-	-	
石195	-	礎	砂岩	A	4.5	3.4	2.1	37.0	-	-	-	-	-	-	
4J一括	第9図版4J一括 図版7-4J一括	礎	砂岩	D	10.7	9.7	9.5	1420.0	△	-	-	-	-	-	接合個体3(+石129+石138)

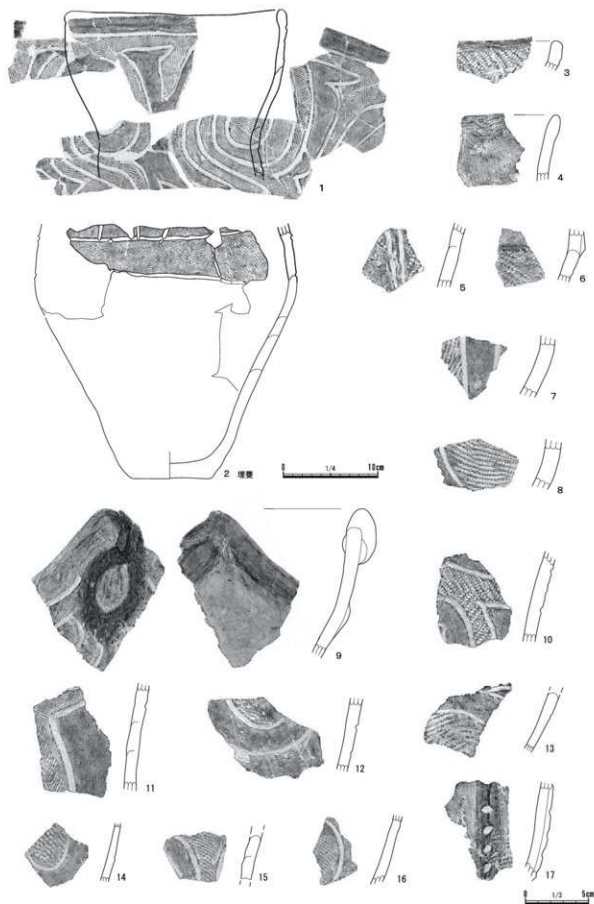
遺存状況：A（完好）／B（9割以上）／C（5割以上）／D（5割以下）／E（小破片）
赤化・黒色化・付着物：○（あり）△（僅かにあり）／-（なし）

第3表 4号住居跡出土礫一覽（3）

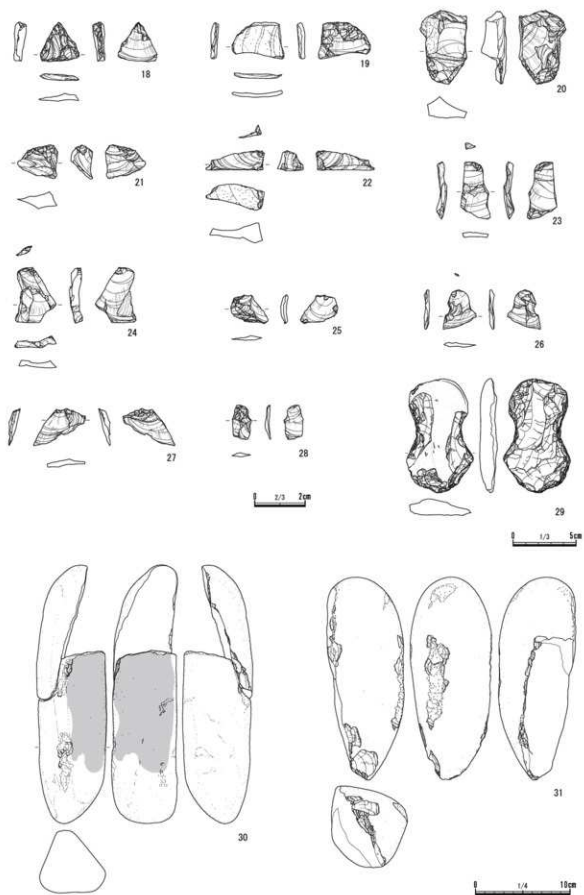
発見番号 図版番号	種別	石材	遺存 状況	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	赤化	黒色化	付着物	破断面 赤化	破断面 黒色化	破断面 付着物	備 考
第8図版接合個体1 図版6-接合個体1	礎	砂岩	C	21.1	38.2	10.7	6522.0	△	△	△	-	△	-	炉1+炉2+炉7+炉8+炉9+炉14
第9図版接合個体2 図版7-接合個体2	礎	砂岩	C	21.5	16.0	7.3	3699.0	-	△	-	-	-	-	炉10+炉11+石124+石144+石149+石163
第9図版接合個体3 図版7-接合個体3	礎	砂岩	C	18.0	22.5	14.2	5623.0	△	△	-	-	-	-	石129+石138+4J一括
第9図版接合個体4 図版7-接合個体4	礎	閃緑岩	D	12.0	13.0	3.2	282.0	△	-	-	-	-	-	炉3+炉4/石皿破片の可能性

遺存状況：A（完好）／B（9割以上）／C（5割以上）／D（5割以下）／E（小破片）
赤化・黒色化・付着物：○（あり）△（僅かにあり）／-（なし）

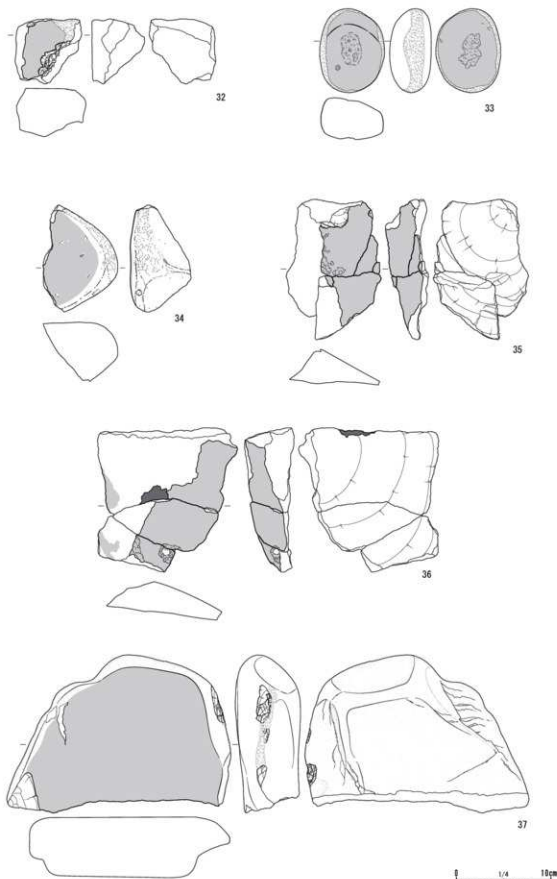
第4表 4号住居跡出土礫接合個体一覽



第10図 4号住居跡出土遺物1 (1/4・1/3)



第11図 4号住居跡出土遺物2 (2/3・1/3・1/4)



第12図 4号住居跡出土遺物3 (1/4)

探検番号 図版番号	部種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時 期 式	出土位置
第10図1 図版8-1	深鉢	口縁部 ～胴部 50%	高 [18.1] 口 [22.8]	平縁/口縁部は直 立し、口唇部の内 側が肥厚する/胴 部中位で括れる	単節LR充填の渦巻文/充填 施文後、無文部を書き調整/上下 二連の文様構成	橙/砂粒・褐色 粒子少量、礫微 量	後期初頭 (称名寺1式)	東端のP11付 近の覆土下層 ～床面直上
第10図2 図版8-2	深鉢	胴部～底部 50%	高 [26.0] 底 R0	平底/底部から僅 かに外反し外縁/ 胴部中位から上位 へ内傾	胴部中位に2本の横位沈線、4 本の縦位沈線で区画/横位沈線 を施文後、縦位沈線が連続/区 画内に無節LRを充填施文/横位 沈線区画内に横文施文後、縦位沈線 を施文/横位沈線施文後、胴部 書き調整	橙/砂粒・礫・ チャートやや多 量、角閃石微量	後期初頭	埋塵
第10図3 図版8-3	深鉢	口縁部 破片	厚 0.8	僅かに内湾して立 ち上がる	地文は単節RL横位施文	淡橙/砂粒・白 色粒子中量、礫 少量	中期後葉 (加曾利E4式)	東端のP11上 の覆土下層 (床土6cm)
第10図4 図版8-4	深鉢	口縁部 破片	厚 0.8	口縁部先端が僅か に肥厚/僅かに外 傾	無文	浅黄橙/砂粒中 量、礫少量	中期後葉 (加曾利E4式)	東端のP11上 の覆土上層 (床土12cm)
第10図5 図版8-5	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	外傾	磨消懸垂文/地文にRL単節 横文を縦位施文	浅黄橙/砂粒少 量	中期後葉 (加曾利E4式)	住居内焼瓦
第10図6 図版8-6	深鉢	胴部 破片	厚 0.8	やや内湾して立ち 上がる	横位の磨除起線文/地文は単節 LR縦位施文/無文部を書き調 整	にぶい・橙/砂粒 やや多量、チャ ート微量	中期後葉 (加曾利E4式)	北端のP5付 近の覆土上層 (床土12cm)
第10図7 図版8-7	深鉢	胴部 破片	厚 1.1	やや内湾してやや 外傾	磨消懸垂文/地文にLR単節 横文を横位施文	暗褐/砂粒・角 閃石中量	中期後葉 (加曾利E4式)	北東端の覆土 中層(床土 7cm)
第10図8 図版8-8	深鉢	胴部 破片	厚 1.1	やや内湾して立ち 上がる	磨消懸垂文/地文にLR単節 横文を縦位施文	灰黄褐/砂粒・ チャートやや多 量	中期後葉 (加曾利E4式)	P5内の覆土中 層(底面直上31 cm)
第10図9 図版8-9	深鉢	口縁部 破片	厚 0.8	皮状口縁/口唇部 の内側が肥厚する /僅かに内湾して 立ち上がる	波頂部にO字状の隆帯文/隆帯 は口縁部から繋がり、O字を描 き、皮頂部に連結する/単節 LR充填の帯縄文が隆帯に連結	にぶい・橙/砂粒 ・礫・チャート 中量、角閃石少 量	後期初頭 (称名寺1式)	北端のP5付 近の覆土中層 (床土8cm)
第10図10 図版8-10	深鉢	胴部 破片	厚 0.8	やや外傾	単節LR充填の帯縄文/充填 施文後、無文部を書き調整	褐灰/砂粒少量、 礫・角閃石微量	後期初頭 (称名寺1式)	北東端の覆土 上層(床土11 cm)
第10図11 図版8-11	深鉢	胴部 破片	厚 0.8	やや外傾	単節LR?充填の帯縄文/無文 部を書き調整	橙/砂粒少量、 礫・チャート微 量	後期初頭 (称名寺1式)	北端のP5付 近の覆土上層 (床土20cm)
第10図12 図版8-12	深鉢	胴部 破片	厚 0.9	僅かに外反して立 ち上がる	単節LR充填の帯縄文/無文部 を書き調整	褐灰/砂粒少量、 礫微量	後期初頭 (称名寺1式)	北東端のP2 近の覆土上層 (床土13cm)
第10図13 図版8-13	深鉢	胴部 破片	厚 0.8	僅かに内湾し、外 傾	単節LR充填の帯縄文/無文部 を書き調整	浅黄橙/砂粒多 量	後期初頭 (称名寺1式)	中央の付付近 の覆土上層 (床土12cm)
第10図14 図版8-14	深鉢	胴部 破片	厚 0.5	やや外傾	単節LR充填の帯縄文/無文部 を書き調整	にぶい・赤褐/砂 粒少量、白色粒 子微量	後期初頭 (称名寺1式)	住居内焼瓦
第10図15 図版8-15	深鉢	胴部 破片	厚 0.8	外傾	単節LR充填の帯縄文/無文部 を書き調整/第10図1と同一個 体か	橙/砂粒少量	後期初頭 (称名寺1式)	北東端のP3 付近の覆土中 層(床土11 cm)
第10図16 図版8-16	深鉢	胴部 破片	厚 0.8	やや外傾	弧状の沈線文/単節LRを施文	にぶい・黄橙/砂 粒中量	後期初頭 (称名寺1式)	北西のP10上 の覆土中層 (床土8cm)
第10図17 図版8-17	深鉢	胴部 破片	厚 0.8	僅かに外傾	斜目のある垂下隆帯/隆帯部 に単節LRを斜位施文	にぶい・橙/砂粒 中量、チャート 少量	後期初頭 (称名寺1式)	住居内焼瓦

第5表 4号住居跡出土土器一覽

標本番号 図版番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第11図18 図版8-18	石鏃未製品	黒曜石	1.5	1.5	0.4	0.8	三角形状に整形／正面のはび全周縁に調整割離／先端から裏側面に調整割離	北壁付近の覆土下層(床土4cm)
第11図19 図版8-19	石鏃未製品	黒曜石	1.4	2.0	0.3	0.8	不定形の削片素材／調整割離は裏面のみ／素材削片の折れ面から押圧割離による調整割離	東端のP4付近の覆土上層(床土16cm)
第11図20 図版8-20	二次加工のある削片	黒曜石	2.8	1.8	1.0	3.8	右側縁の一部を折損／正面の一部に原礫面／正面左側縁に二次加工、裏面の周縁に二次加工／裏面の二次加工は右側縁の折損後に施される	東端のP4上の覆土下層(床土4cm)
第11図21 図版8-21	二次加工のある削片	黒曜石	1.3	1.5	0.8	1.2	上端部の表裏面に二次加工、割離端は裏面→正面／上端部縁辺はやや潰れ状／正面末端部に微細な割離	覆土中
第11図22 図版8-22	削片	黒曜石	0.7	2.3	1.0	1.2	単割離打面／下面は原礫面	東側のP11付近の覆土下層(床土4cm)
第11図23 図版8-23	削片	黒曜石	2.2	1.1	0.4	0.7	左右側縁を折損／単割離打面／裏面末端部に小割離／主要割離面と比べ打面と正面はパティナが異なり、ややくすんだ光沢面	北西側の覆土上層(床土12cm)
第11図24 図版8-24	削片	黒曜石	2.1	1.6	0.5	1.0	末端部を欠損／複割離打面／正面の稜縁の一部が潰れ	北西壁際のP2上の覆土中層(床面6cm)
第11図25 図版8-25	削片	黒曜石	1.1	1.4	0.2	0.3	打面を欠損／正面の末端部に連続する微細割離	突出部中央の覆土中層(床土7cm)
第11図26 図版8-26	削片	黒曜石	1.5	1.3	0.2	0.2	点打面／正面上部の割離面はパティナが他の割離面と異なり、細かな縦打状の傷を有する	北東壁付近の覆土中層(床土7cm)
第11図27 図版8-27	削片	黒曜石	1.4	2.0	0.4	0.4	打面、末端一部を欠損	北西壁際のP2上の覆土中層(床面5cm)
第11図28 図版8-28	削片	チャート	1.3	0.7	0.2	0.1	単割離打面	北側の覆土中層(床土6cm)
第11図29 図版9-29	打製石斧	頁岩	9.0	5.3	1.4	69.9	完形／分個形／原礫面を残す不定形の削片を素材か／正面には挿入部、裏面には全面に大きな割離が施される／周縁に細かな調整割離／刃部は円月	中央北側のP5、P10間の覆土下層(床土4cm)
第11図30 図版9-30	敲石	砂岩	27.3	7.4	6.9	1699.3	上部を一部欠損／上下2点が接合／敲打痕は正面の稜上に2か所、裏面中央石に1か所あり／正面中央、裏面の敲打痕は上部折損後に形成／右側面に磨面あり／表面は被熱赤化	西側P8上で床面と同一レベル
第11図31 図版9-31	敲石	砂岩	16.1	6.1	6.4	794.6	右側面に敲打痕あり／縁辺に小割離や潰れあり	東端のP4付近の床面直上
第12図32 図版9-32	敲石	閃緑岩	6.9	7.0	5.6	267.7	上下面、左右側面、裏面を欠損／正面に磨面と一部に敲打痕、割離面あり／石面を分別し転用か	北端のP5付近の覆土中層(床土8cm)
第12図33 図版9-33	磨石	閃緑岩	8.9	6.8	4.4	400.7	完形／正面、裏面に磨面および凹みあり／周縁に敲打痕／敲打痕のある面も若干磨られている	北西側のP6付近の床面直上
第12図34 図版9-34	磨石	砂岩	113.1	78.1	63.3	502.0	左半を欠損／正面に光沢のある磨面／側縁に敲打痕	埋蔵西側階接の覆土下層(床土3cm)
第12図35 図版9-35	石皿	閃緑岩	14.8	10.1	4.5	456.5	石皿の断片／正面に磨面あり	東端のP11隣の覆土下層(床土3cm)
第12図36 図版9-36	石皿	閃緑岩	15.2	14.8	5.2	879.6	石皿の断片／正面に磨面、凹みあり	伊(砂石に転用)
第12図37 図版9-37	石皿	砂岩	16.7	23.7	6.9	3726.0	下半部を欠損／正面に磨面あり／右側縁に敲打痕あり／正面右側に被熱赤化、煤付着	中央西の床面直上

第6表 4号住居跡出土石器一覧

(3) 土 坑

117号土坑

遺 構 (第13図、第7表)

[位 置] 調査区中央北側。

[検出状況] 2 Pに切られ、120 D、3 Pを切る。敵による攪乱を一部受ける。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸1.92m/短軸1.40m/深さ24cm。壁：皿状に緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-45°-W。

[覆 土] 8層(2~9層)。覆土が外側から斜めに堆積しており、自然堆積と考えられる。

[遺 物] 中期初頭の五領ヶ台式土器1点、中期後葉の加曾利E式土器2点が出土した。

[時 期] 中期後葉(加曾利E 3~4式期)。

遺 物 (第14図1~3、図版10-1-1~3、第8表)

1は中期初頭(五領ヶ台式期)の土器である。2・3は中期後葉(加曾利E式)の土器で、3は加曾利E 3~4式土器の底部片である。

118号土坑

遺 構 (第13図、第7表)

[位 置] 調査区中央東側。

[検出状況] 単独で検出。敵による攪乱を一部受ける。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸0.89m/短軸0.60m/深さ12cm。壁：皿状に緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-76°-W。

[覆 土] 5層に分層された。覆土中にロームブロックが目立って含まれる。

[遺 物] 縄文土器1点が出土したが、小破片のため図示できなかった。

[時 期] 覆土の観察、出土遺物から縄文時代と思われる。

119号土坑

遺 構 (第13図、第7表)

[位 置] 調査区中央北側。

[検出状況] 116 Dに切られ、120 Dと重複する。敵による攪乱を一部受ける。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸現存長1.02m/短軸0.97m/深さ15cm。壁：皿状に緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-70°-E。

[覆 土] 3層に分層された。覆土が外側から斜めに堆積しており、自然堆積と考えられる。

[遺 物] 黒曜石製の剥片1点が出土したが、小片のため図示できなかった。

[時 期] 覆土の観察から縄文時代と思われる。

120号土坑

遺 構 (第13図、第7表)

[位 置] 調査区中央北側。

[検出状況] 117 Dに切られ、119 Dと重複する。

[構 造] 平面形：楕円形か。規模：長軸1.40m/短軸現存長0.64m/深さ41cm。壁：65°前後の角度で緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-87°-E。その他：底面中央にピット状の掘り込みが確認された。

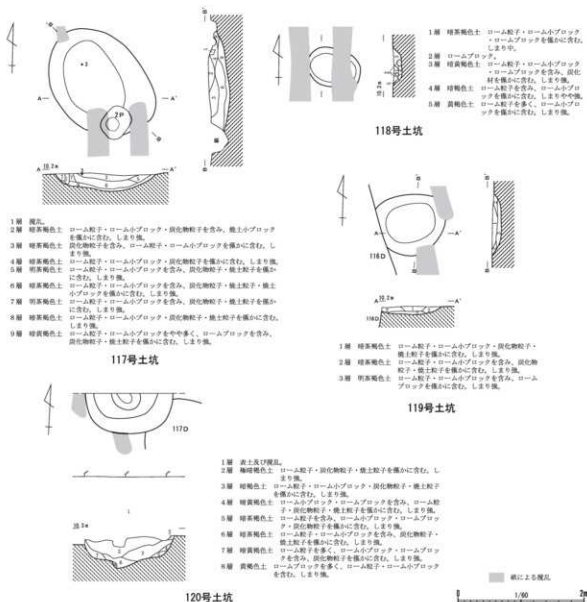
[覆 土] 7層（2～8層）。覆土が外側から斜めに堆積しており、自然堆積と考えられる。

[遺 物] 縄文土器1点が出土したが、小破片のため図示できなかった。

[時 期] 覆土の観察、出土遺物から縄文時代と思われる。

(4) ピット (第15図、第9表)

本地点で検出されたピットは合計7本で、縄文時代のピットは3本（2・3・5P）であった。ピットからの出土遺物はなかった。ピットの基本内容は第9表に示した。



第13図 縄文時代の土坑 (1/60)

遺構名	平面形	規模 (m)			長軸方位	覆土及び特徴	主な遺物	時期
		長軸	短軸	深さ				
117 D	楕円形	1.92	1.40	0.24	N-45°-W	8層(2~9層)/2Pに切られ、120D、3Pを切る/一部竪による覆乱	土器3点(五葉ヶ台式1点、加曾利E式1点、加曾利E3~4式1点)	中期後葉 (加曾利E3~4式)
118 D	楕円形	0.89	0.60	0.12	N-76°-W	5層/一部竪による覆乱	遺物なし	縄文
119 D	楕円形	(1.02)	0.97	0.15	N-70°-E	3層/116Dに切られ、120Dと重複する/一部竪による覆乱	遺物なし	縄文
120 D	楕円形か	1.40	(0.64)	0.41	N-87°-E	7層(2~8層)/117Dに切られ、119Dと重複する/一部竪による覆乱	遺物なし	縄文

規模の()内の数値は推定値

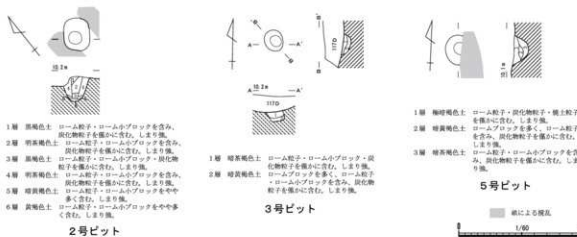
第7表 縄文時代の土坑一覧



第14図 117号土坑出土遺物(1/4・1/3)

探検番号 図版番号	層別 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土位置
第14図1 図版10-1-1	深鉢	胴部 破片	厚0.8	ほぼ垂直に立ち上る	手載竹管工具による横文・斜位の集合沈線文	にぶい赤褐/砂粒やや多量、礫少量	中期初葉 (五葉ヶ台式)	覆土中
第14図2 図版10-1-2	深鉢	胴部 破片	厚0.9	やや外傾	地文に単筋R.Lを斜位施文/沈線による懸垂文か	にぶい黄褐/砂粒中量、礫少量	中期後葉 (加曾利E式)	覆土中
第14図3 図版10-1-3	深鉢	底部 破片	高[3.8] 底(7.8)	底部は上げ底状/底部から胴部は緩やかに立ち上る	深い沈線による懸垂文	にぶい黄褐/砂粒中量、角閃石少量	中期後葉 (加曾利E3~4式)	中央やや北壁寄りの覆土上層(3層内)

第8表 117号土坑出土土器一覧



第15図 縄文時代のピット(1/60)

遺構名	平面形	規模(cm)			覆土及び特徴	主な遺物	時期
		長軸	短軸	深さ			
2P	隅丸長方形	51	42	36	6層/117Dを切る/畝による覆土を一部受ける	遺物なし	縄文
3P	楕円形	35	30	18	2層/117Dに切られる	遺物なし	縄文
5P	楕円形	48	不明	27	3層/畝による覆土を一部受ける	遺物なし	縄文

第9表 縄文時代のピット一覧

第3節 弥生時代後期の遺構・遺物

(1) 概要

本地点からは、弥生時代後期の住居跡1軒(3Y)が検出された。なお、3Yについては、隣接する第9地点において、すでに住居西半部の調査が終了し、報告されている(尾形 1990)。

本稿では、今回の調査分と統合して報告するものとし、遺物等の内容についても再確認し修正を加えている。

(2) 住居跡

3号住居跡

遺 構 (第16図)

[位 置] 調査区西隅。

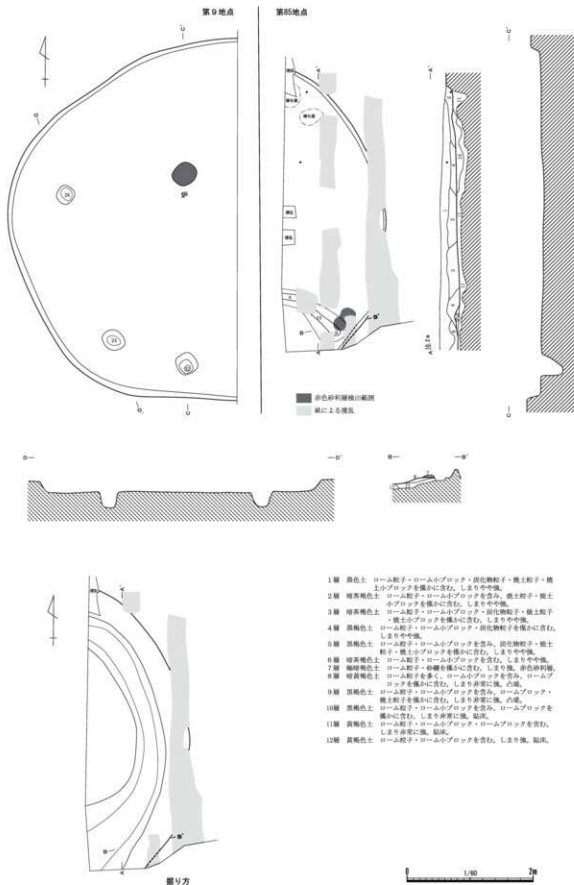
[検出状況] 4Jを切る。西半部は第9地点で調査済みである。

[構 造] 平面形：円形に近い隅丸方形。規模：長軸現存長5.48m/短軸5.80m/確認面から床面までの深さ11～18cm。壁：60°～70°で立ち上がる。長軸方位：N-22°-W。壁溝：確認されなかった。床面：住居中央付近が壁際に比べ若干下がっている。硬化面は北東隅で部分的に確認できた。炉：住居中央からやや北に偏って位置する。楕円形の地床炉である。掘り込みは長軸38cm/短軸24cm/深さ4cm。貯蔵穴：検出されなかった。なお、南東コーナー際に高さ4～10cm、幅26～46cmの凸堤が検出された。柱穴：第9地点側で検出されている。今回の調査範囲では検出されなかった。西側の各コーナー部にある2本が主柱穴と思われる。赤色砂利層：南東コーナー際に検出された。検出範囲は44cm×23cmで、凸堤に一部重なる。砂礫を僅かに含む(B-B'の7層)。入口施設：南壁よりに位置するピットは入口ピットの可能性がある。掘り方：今回の調査範囲では、壁際から概ね40cm内側に、幅41～112cmの溝状に、円形に掘削されている。中央部と壁際では、壁際の方が高くなっている。

[覆 土] 12層に分層される。1～6層が住居覆土で、上下2層に分層される。上層は黒色土、下層はローム粒子、ローム小ブロックを含む黒褐色土・暗茶褐色土で、上下層ともしまりはやや強い。覆土の様子は堆積状況から自然堆積と考えられる。8・9層は凸堤の構築土、10～12層は貼床土である。

[遺 物] 第9地点側では、床面上・覆土中から壺・甕形土器が出土した。今回の調査範囲でも壺・甕形土器が覆土中から出土したが、小破片のため、図示できなかった。

[時 期] 弥生時代後期末葉。

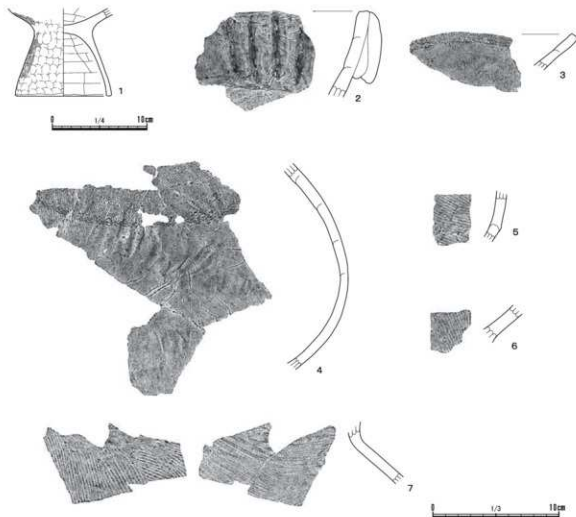


第16図 3号住居跡(1/60)

遺物 (第17図、図版10-2-1~7、第10表)

本住居跡出土の遺物は、すでに第9地点において報告されているが、今回はすべての資料について、見直しを行い、再掲載するものである。なお、本地点からも土器小破片は数点出土したが、図示できるものはなかったため、追加する報告資料はなかった。

2~4は甕形土器、1・5~7は甕形土器である。



第17図 3号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

検出番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (m)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第17図1 図版10-2-1	甕	胴部下半~ 脚台部50%	高19.3 底(10.2)	脚台部は「ハ」の字状	内面：ヘラナデ/外面：全体にハケ目調整が施されるが、脚台部はその後指頭押捺により大部分消されており、不明瞭になっている	黄褐色/砂粒をやや多く、黄褐色粒子・赤褐色粒子を僅かに含む	覆土中
第17図2 図版10-2-2	甕	口縁部 破片	高7.0	大型甕/幅広い複合口縁/口縁部は内湾気味/口縁部は平坦	複合部外面に4本の棒状貼付文が付される/内外面：ヘラ着き調整調整/複合部直下の胴部外面に僅かにハケ目痕が残る/内外面に赤彩	暗黄褐色/黄褐色粒子・棕色粒子を多く、砂粒・小石を含む	覆土中

第10表 3号住居跡出土土器一覽(1)

検出番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第17図3 図版10-2-3	壺	口縁部 破片	厚0.7	単純口縁/口縁部は大きく外傾する/口唇部は平坦	口唇部にRL単純斜線文/内外面:ハケ目調整後へラ磨き調整/内外面に赤彩	暗黄褐色/黄褐色粒子を多く、砂粒を含む	覆土中
第17図4 図版10-2-4	壺	胴部上半~ 下半破片	厚0.7	胴部は球状/最大径は胴部中位にもつと思われ	胴部上半に文様帯をもつ/文様は4段の羽状線文の下端に白濁粘着が施文される/外面:無文はハケ目調整後へラ磨き調整/内面:ヘラナデ後粗いへラ磨き調整/外面無文に赤彩	暗黄褐色/黄褐色粒子を多く、褐色粒子・赤褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第17図5 図版10-2-5	甕	胴部下半 破片	厚0.7	胴部下半は輪積みにより屈曲している	内面:ヘラナデ/外面:粗い目のハケ目調整目	黄褐色/黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第17図6 図版10-2-6	甕	胴部下半 破片	厚1.0	脚台部への移行する部分と思われる	内面:ヘラナデ/外面:粗い目のハケ目調整目	暗黄褐色/黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	覆土中
第17図7 図版10-2-7	甕	頸部~胴部 上半破片	厚0.8	頸部から胴部は屈曲せず比較的緩やかに移行する	内面:ハケ目調整/外面:頸部は横ナデ、胴部は粗い目のハケ目調整	淡黄褐色/砂粒をやや多く、角閃石・小石を僅かに含む	覆土中

第10表 3号住居跡出土土器一覧(2)

第4節 中世以降の遺構

(1) 概要

中世以降の遺構は、土坑3基(114~116D)、ピット4本(1・4・6・7P)が検出された。土坑3基は、幅の狭い溝状もしくは長方形を呈するもので、調査区中央付近に分布し、主軸方位をほぼ同じくする。

(2) 土坑

114号土坑

遺構 (第18図、第11表)

[位置] 調査区中央南側。

[検出状況] 単独で検出された。畝による攪乱を一部受ける。

[構造] 平面形:溝状。規模:長軸現存長3.76m/短軸現存長0.39m/深さ18cm。壁:皿状に立ち上がる。長軸方位:N-18°-W。極僅かに湾曲が認められる。

[覆土] 単層。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

115号土坑

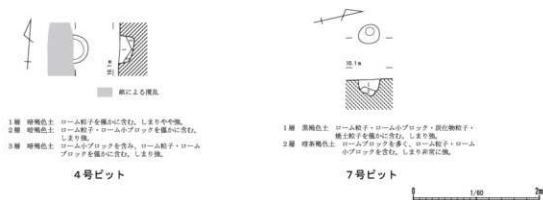
遺構 (第18図、第11表)

[位置] 調査区中央。

遺構名	平面形	規模(m)			長軸方位	覆土及び特徴	主な遺物	時期
		長軸	短軸	深さ				
114 D	溝状	(3.76)	(0.39)	0.18	N-18°-W	単層／一部竪による攪乱	遺物なし	中世以降
115 D	長方形	1.90	0.53	0.10	N-17°-W	単層／4Jを切る／一部竪による攪乱	遺物なし	中世以降
116 D	溝状	(2.50)	0.53	0.36	N-16°-W	5層／1Pに切られ、119Dを切る／一部竪による攪乱／底面にビット状の掘り込みあり	遺物なし	中世以降

規模の()内の数字は現存値

第11表 中世以降の土坑一覧



第19図 中世以降のビット（1/60）

遺構名	平面形	規模(m)			覆土及び特徴等	主な遺物	時期
		長軸	短軸	深さ			
1 P	隅丸方形	22	22	24	1層：ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む黒褐色土	遺物なし	中世以降
4 P	円形か	45	不明	23	3層／4Jを切る／竪による攪乱を一部受ける	遺物なし	中世以降
6 P	隅丸方形	41	不明	15	1層：ローム粒子を僅かに含む、ローム小ブロックを含む、ロームブロックを多く含む暗褐色土	遺物なし	中世以降
7 P	楕円形	34	30	27	2層／4Jを切る／竪による攪乱を一部受ける	遺物なし	中世以降

第12表 中世以降のピット一覧

第5節 遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時代の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

今回、遺構外出土遺物としては、縄文時代の遺物のみである。

(1) 縄文時代の遺物 (第20図、図版10-3、第13・14表)

[石器] (第20図1、図版10-3-1、第13表)

1は黒曜石の石核である。

[土 器] (第20図2～24、図版10-3-2～24、第14表)

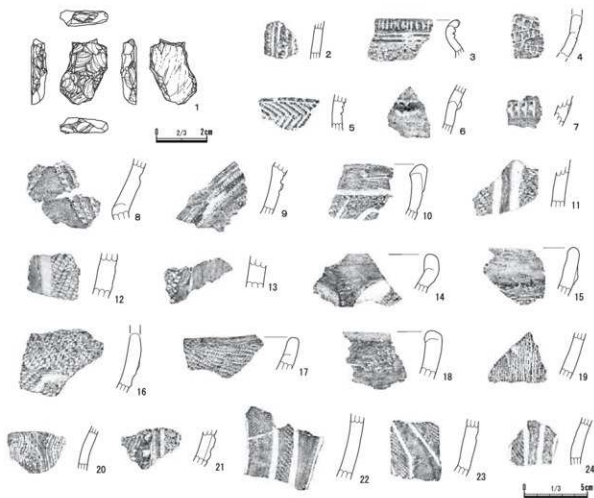
2～5は中期初頭の土器で、五領ヶ台式土器である。

6～9は中期中葉の土器で、阿玉台式土器である。

10～16は中期後葉の加曾利E式土器で、10～13は加曾利E 3式土器、14～16は加曾利E 4式土器である。

17～20は中期後葉～後期初頭の土器である。

21～24は後期初頭の土器で、称名寺I式土器である。



第20図 遺構外出土遺物 (2/3・1/3)

標本番号 図版番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第20図1 図版10-3-1	石核	黒曜石	2.5	1.8	0.6	3.0	正面を作業面とし、左右側面を打面として剥片を剥離。左側面・上面には正面からの剥離あり。裏面は自然面(ズリ面)。裏面と下面の一部は古いソビティナで、くすんだ光沢	3Y

第13表 遺構外出土土器一覧

発掘番号 図版番号	形種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式等	出土遺構 出土位置
第20図2 図版10-3-2	深鉢	胴部 破片	厚0.6	ほぼ直立	縦位沈線文/沈線に沿って三角 形の連続刺突文、交互刺突文	にぶい褐/砂粒 ・塵少量	縄文中期初頭 (五須ヶ台式)	3Y絞縄乱
第20図3 図版10-3-3	深鉢	口縁部 破片	厚0.6	包みのある平縁/内 湾し口唇部で屈曲	半截竹管状工具による横位沈 線文	褐/砂粒中量、 金雲母片極少量	縄文中期初頭 (五須ヶ台式)	3Y
第20図4 図版10-3-4	深鉢	胴部 破片	厚0.7	僅かに内屈	棒子状の沈線文	にぶい褐/砂粒 中量	縄文中期初頭 (五須ヶ台式)	3Y
第20図5 図版10-3-5	深鉢	胴部 破片	厚0.7	僅かに外反し直立	半截竹管状工具による集合沈 線を矢羽状に施文	にぶい赤褐/砂 粒・塵少量	縄文中期初頭 (五須ヶ台式)	3Y絞縄乱
第20図6 図版10-3-6	深鉢	胴部 破片	厚0.7	僅かに屈曲し外傾	貼付文	にぶい褐/砂粒 ・石英や多量	縄文中期中葉 (阿玉台式)	絞縄乱
第20図7 図版10-3-7	深鉢	胴部 破片	厚0.9	やや外傾	幅広い連続凹形文を横位施文	灰褐/金雲母片 多量、砂粒中量	縄文中期中葉 (阿玉台式)	116D
第20図8 図版10-3-8	深鉢	胴部 破片	厚1.0	屈曲し外傾	押引文を斜位施文	にぶい赤褐/砂 粒中量、塵・金 雲母片極少量	縄文中期中葉 (阿玉台式)	3Y絞縄乱
第20図9 図版10-3-9	深鉢	胴部 破片	厚0.8	やや外傾して僅かに 屈曲	隆帯脇に押引文	にぶい褐/金雲 母片多量、砂粒 ・塵中量	縄文中期中葉 (阿玉台式)	確認調査 (2Tr内)
第20図10 図版10-3-10	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	平縁/口唇部が明太 口	地文は単節R Lを縦位施文/浅 い沈線による区画	淡褐/砂粒少量	縄文中期後葉 (加曾利E3式)	114D
第20図11 図版10-3-11	深鉢	胴部 破片	厚1.0	ほぼ直立	地文は単節L Rを縦位施文/沈 線による磨消懸垂文	にぶい褐/砂粒 少量	縄文中期後葉 (加曾利E3式)	遺構外
第20図12 図版10-3-12	深鉢	胴部 破片	厚1.3	ほぼ垂直に立ち上 がる	地文に単節R Lを縦位施文/沈 線による磨消懸垂文	にぶい黄褐/砂 粒中量	縄文中期後葉 (加曾利E3式)	6P
第20図13 図版10-3-13	深鉢	胴部 破片	厚1.2	ほぼ直立	地文は単節R Lを縦位施文/磨 消文	にぶい褐/砂粒 ・白色粒子中量	縄文中期後葉 (加曾利E3式)	116D
第20図14 図版10-3-14	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	平縁/口唇部が僅か に内屈	隆帯および幅広い沈線による区 画	褐/砂粒中量	縄文中期後葉 (加曾利E4式)	3Y絞縄乱
第20図15 図版10-3-15	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	平縁/やや外傾	地文は単節L Rを斜位施文/微 隆起線文	褐/砂粒少量	縄文中期後葉 (加曾利E4式)	114D
第20図16 図版10-3-16	深鉢	胴部 破片	厚0.8	僅かに内湾	地文は単節L Rを引状に施文/ 浅い沈線による渦巻文か	にぶい褐/砂粒 ・チークト少量	縄文中期後葉 (加曾利E4式)	絞縄乱
第20図17 図版10-3-17	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	波状口縁/僅かに外 傾	地文は単節L Rを斜位施文	にぶい赤褐/砂 粒・角閃石少量	縄文中期後葉～ 後期初頭	絞縄乱
第20図18 図版10-3-18	深鉢	口縁部 破片	厚1.1	平縁/僅かに外傾	無文	褐/砂粒少量	縄文中期後葉～ 後期初頭	116D
第20図19 図版10-3-19	深鉢	胴部 破片	厚0.9	やや外傾	地文は縦位の条線	褐/砂粒少量	縄文中期後葉～ 後期初頭	遺構外
第20図20 図版10-3-20	深鉢	胴部 破片	厚0.7	僅かに外反	地文は3本一対の蛇行状の条線 を縦位施文	にぶい黄褐/砂 粒極少量	縄文中期後葉～ 後期初頭	確認調査 (1Tr内)
第20図21 図版10-3-21	深鉢	胴部 破片	厚0.6	やや外傾	包みのある垂下隆帯/単節L R を施文の帯縄文	褐/砂粒少量	縄文後期初頭 (称名寺1式)	遺構外
第20図22 図版10-3-22	深鉢	胴部 破片	厚0.9	僅かに内湾	単節L Rを充填施文の帯縄文	にぶい灰褐/砂 粒中量、角閃石 少量	縄文後期初頭 (称名寺1式)	遺構外
第20図23 図版10-3-23	深鉢	胴部 破片	厚0.9	僅かに外傾	単節L Rを充填施文の帯縄文	にぶい褐/砂粒 ・塵極少量	縄文後期初頭 (称名寺1式)	116D
第20図24 図版10-3-24	深鉢	胴部 破片	厚0.7	僅かに外反	単節L Rを充填施文の帯縄文	褐/砂粒・褐色 粒子少量	縄文後期初頭 (称名寺1式)	確認調査 (2Tr内)

第14表 遺構外出土縄文土器一覧

第3章 城山遺跡第102地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

城山遺跡は、志木市柏町3丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約1.2kmに位置している。柳瀬川右岸の台地上に立地しており、標高は約12m、低地との比高差は約5mである。

本遺跡は、これまでに106地点（令和6年1月31日現在）の調査が実施され（第21図）、旧石器時代から近世の複合遺跡であることが判明している。特に、遺跡全体からは、古墳時代中・後期の住居跡260軒を超え、一大集落が検出されている他、中世の城跡である「柏の城」に関連する堀跡や近世の鑄造関連遺構の検出が注目される。

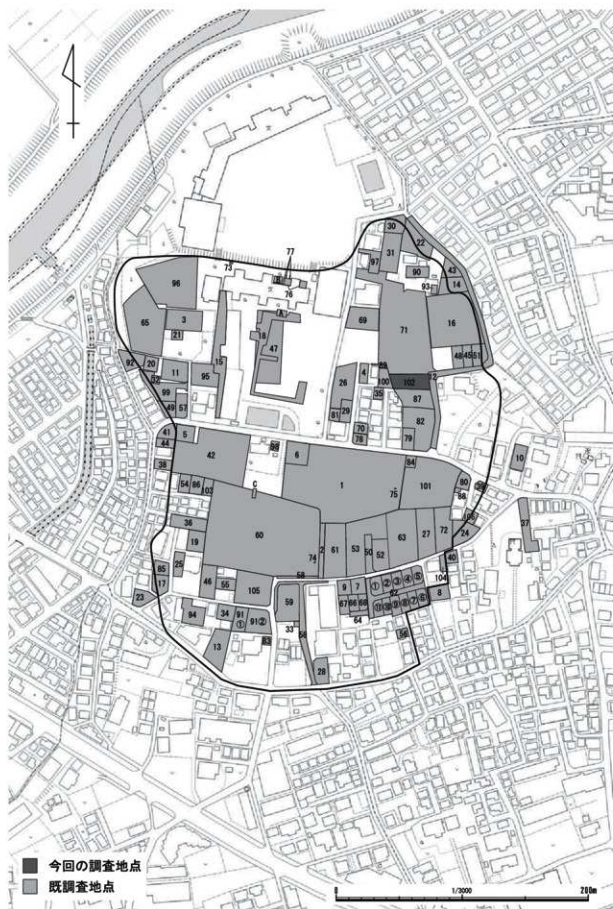
遺跡の周辺を眺めてみると、小学校や神社・墓地などが存在する閑静な住宅地と言えるが、最近では、令和4（2021）年に実施した老人ホーム新築工事に伴う第101地点、令和5（2023）年に実施した分譲住宅建設に伴う第105地点の発掘調査が実施され、僅かに残る緑地や畑地にまで各種開発の波が押し寄せている状況となっている。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、令和4年10月3・4日に実施した。調査区内に3本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、縄文時代の住居跡2軒・土坑1基、古墳時代～平安時代の住居跡6軒・土坑6基、中世以降の土坑5基・溝跡2本・ピット16本を確認した（第22図）。そのため、ただちに依頼者に調査の結果を報告し、保存対策について検討を依頼した。建物部分については、保護層30cm以上を確保することは難しく、盛土保存は不可能であり、建物東側の駐車場部分については掘削を伴わず、現況地盤にアスファルト舗装を行う工事であることから現状保存が可能という回答を得た。よって、令和4年10月31日から、建物部分のみの発掘調査を実施することに決定した。

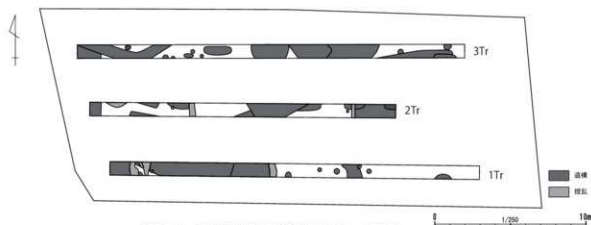
以下、発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第15表の発掘調査工程表に示した。

- 10月31日 重機による表土剥ぎ作業を開始する。奈良時代の住居跡（339H）から鎌が出土。遺物出土状況の写真撮影を行う。
- 11月1日 引き続き表土剥ぎ作業を行い、本日中に表土剥ぎ作業を終了する。
- 2～14日 人員導入による発掘作業を開始する。器材を現地に搬入し、調査区の整備と遺構確認作業を行った。7日には遺構検出状況の写真撮影と基準点測量を実施した。中世以降の土坑（1437～1443D）・溝跡（76M）の精査を開始する。1437～1439・1441・1442D、76Mの精査を終了する。
- 15～25日 縄文時代の土坑（1444D）、平安時代の住居跡（338H）・土坑（1449・1450D）、中世以降の土坑（1445～1448D）の精査を開始する。また、（A-3・4）グリッド



第21図 城山遺跡の調査地点 (1/3,000)

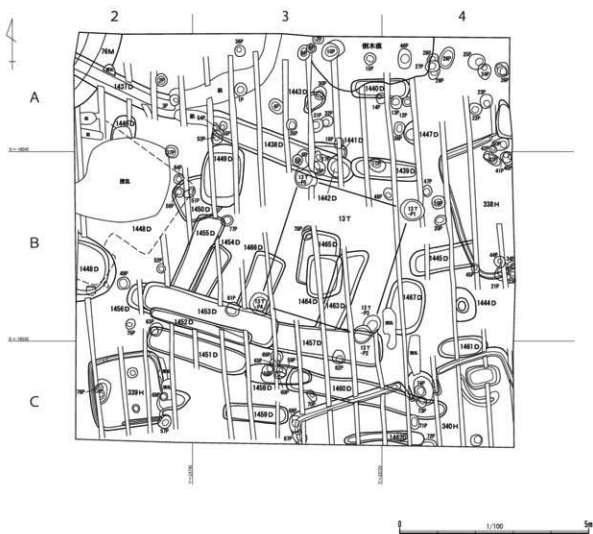
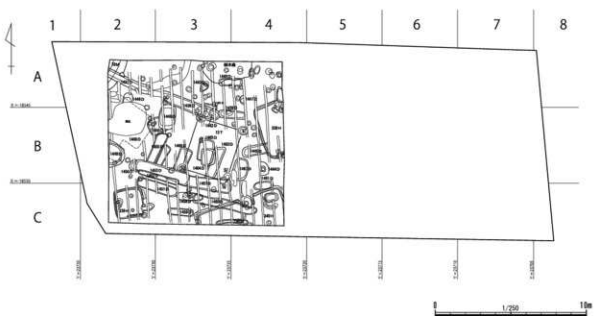
令和6年1月31日現在



第22図 確認調査時の遺構分布（1/250）

	10月	令和4年11月						12月				
	30日	5日	10日	15日	20日	25日	30日	5日	10日	15日	20日	25日
表土削ぎ作業	10.31 ■ 11.1											
(縄文時代)												
13T											12.20 ■ 12.23	
1444D				11.16 ■ 11.17								
(古墳時代)												
340H									12.8 ■ 12.21			
(奈良・平安時代)												
338H				11.17 ■ 12.5								
339H						11.30 ■ 12.15						
1449D				11.22 ■ 11.25								
1450D				11.22 ■ 11.25								
(中世以降)												
1437D		11.8 ■ 11.9										
1438D		11.8 ■ 11.9										
1439D		11.10 ■ 11.14										
1440D		11.10 ■ 11.16										
1441D		11.11 ■ 11.14										
1442D		11.11 ■ 11.14										
1443D		11.14 ■ 11.16										
1445D		11.16 ■ 11.17										
1446D		11.17 ■ 11.25										
1447D		11.17 ■ 11.22										
1448D					11.25 ■ 11.28						12.23 ■ 12.26	
1451D					11.28 ■ 11.30							
1452D					11.28 ■ 11.30							
1453D					11.28 ■ 12.2							
1454D					11.28 ■ 12.2							
1455D					11.28 ■ 12.2							
1456D					11.28 ■ 12.2							
1457D					11.28 ■ 12.8							
1458D					11.30 ■ 12.2							
1459D									12.5 ■ 12.6			
1460D									12.6 ■ 12.9			
1461D									12.8 ■ 12.9			
1462D										12.12 ■ 12.16		
1463D										12.16 ■ 12.20		
1464D										12.16 ■ 12.20		
1465D										12.16 ■ 12.20		
1466D										12.16 ■ 12.20		
1467D										12.21 ■ 12.23		
76M		11.8 ■ 11.9										
埋戻し作業											12.28 ■ 12.27	

第15表 城山遺跡第102地点の発掘調査工程表



第23図 遺構分布図 (1/250・1/100)

では、縄文土坑と想定して調査を進めたが、結果としては縄文時代の倒木痕であることが判明した。1440・1443～1447・1449・1450 Dの精査を終了する。

- 26～30日 奈良時代の住居跡（339 H）、中世以降の土坑（1451～1457 D）の精査を開始する。1448 Dでは、掘削の途中で北方向に空洞部を確認したため、地下式坑と判断した。339 Hでは、覆土中から焼土、炭化材が多く検出されたことから、焼失住居と思われる。1451・1452 Dの精査を終了する。
- 12月 1～ 古墳時代の住居跡（340 H）、中世以降の土坑（1459～1461 D）の精査を開始する。
- 9日 339 Hの床面直上から鉄製品の大形の刀子が出土した。338 H、1453～1461 Dの精査を終了する。
- 10～20日 中世以降の土坑（1462～1466 D）の精査を開始する。また、直径40cm程度の縄文時代のピットが概ね3 m間隔で方形に位置したことから縄文時代の掘立柱建築遺構（13 T）として捉えることとした。339 H、1462～1466 Dの精査を終了する。
- 21～27日 中世以降の土坑（1467 D）の精査を開始する。地下式坑（1448 D）の主体部の精査を行う。13 T、340 H、1448・1467 Dの精査を終了する。26日に埋戻し作業を開始し、翌日には埋戻し作業を終了し、すべての調査を完了する。

第2節 縄文時代の遺構・遺物

（1）概要

縄文時代の遺構としては、掘立柱建築遺構1棟（13 T）、土坑1基（1444 D）、ピット3本（56・64・76 P）が検出された。

13 Tは調査区中央にある5本（P 1～5）の柱穴が該当すると考えられる。時期については、出土土器から判断して、後期前葉堀之内1式期と考えられる。

土坑の1444 Dからは、土器がややまとまって出土しており、その特徴から後期前葉堀之内2式期のものと考えられる。

ピット3本については、出土遺物および覆土の観察から縄文時代の所産と判断した。56 Pからは土器1点、64 Pから土器1点を出土したが、小破片のため時期の特定にはつながらなかった。

なお、（A-3・4）グリッドでは、縄文時代の覆土であると考え、土坑として掘り始めた箇所があったが、掘り進めていくと、ロームが広範囲に大きく天地返しになった状態の覆土が確認でき、さらに坑底面も凸凹であることから、倒木痕として取り扱うこととした。

（2）掘立柱建築遺構

13号掘立柱建築遺構

遺 構（第24図、第16表）

[位 置]（B-3・4、C-3）グリッド。

[検出状況] 畝の耕作による攪乱が著しい。P 2・3は1457 Dに、P 4は1453・1466 Dに、P 5は1438 D、6・18 Pにそれぞれ切られる。

[構 造] 平面形：柱穴が5本確認され、北東にP1、南東にP2・3、南西にP4、北西にP5が該当する。基本的な配列としては、P2・3が重複しているが、四角形4本柱の掘立柱建築遺構と考えられる。**主軸方位**：N-16°-E。**規模**：ピットは直径50～65cm、深さ54～72cmであり、柱穴間の距離（柱穴中心間）はP1-P2間が3.55m、P2-P4間が2.85m、P4-P5間が3.55m、P5-P1間が3.00m。**その他**：P1の底面中央に柱の当たり部分を確認できた。P2・3には新旧関係があり、P2がP3より新しい。

[覆 土] 各柱穴の覆土は、第24図を参照。

[遺 物] P2から前期後葉の諸磯b式土器1点、搔器1点、P4から後期前葉の堀之内1式土器1点が出土した。

[時 期] 後期前葉（堀之内1式期）。

遺 物（第25図、図版20-1、第17表）

[土 器]（第25図1・2、図版20-1-1・2、第17表）

1は前期後葉の諸磯b式土器、2は後期前葉の堀之内1式土器である。

[石 器]（第25図3、図版20-1-3、第18表）

1はチャート製の搔器である。

ピット番号	平面形	規模(cm)			覆土及び特徴等	主な遺物
		長軸	短軸	深さ		
P1	円形	65	58	69	10層(2~11層) / 底面中央に柱の当たりが確認された	出土しなかった
P2	円形	50	41	69	7層(2~8層) / 1457Dに切られ、13T-P3を切る	土器1点(諸磯b式)、石器1点(搔器)
P3	楕円形	不明	44	54	5層(9~13層) / 1457D、13T-P2に切られる	出土しなかった
P4	円形	55以上	54	63	11層 / 1453・1466Dに切られる	土器1点(堀之内1式)
P5	円形	61	59	72	7層 / 1438D、6・18Pに切られる	出土しなかった

第16表 13号掘立柱建築遺構ピット一覧

検出番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	出土位置	時 期 型 式
第25図1 図版20-1-1	深鉢	胴部 破片	厚0.8	やや外傾	扁平で斜位の刻みのある浮線文 / 浮線文に沿って爪形文	焼 / 砂粒中量、 片岩少量	P2覆土中	前期後葉 (諸磯b式)
第25図2 図版20-1-2	深鉢	胴部 破片	厚0.7	やや外傾	浅い懸垂文	にぶい焼 / 砂粒 少量	P4覆土中	後期前葉 (堀之内1式)

第17表 13号掘立柱建築遺構出土土器一覧

検出番号 図版番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特 徴	出土位置
第25図3 図版20-1-3	搔 器	チャート	2.7	3.1	0.8	7.6	完形 / 裏面末端に連続する二次加工を施し刃部とする / 刃部は直線形 / 不定形剥片を素材 / 正面に原礫面	P2覆土中

第18表 13号掘立柱建築遺構出土石器一覧

(3) 土 坑

1444号土坑

遺 構 (第26図)

[位 置] (B-4) グリッド。

[検出状況] 西半部は耕作による攪乱を受ける。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸1.80m／短軸不明／深さ43cm。壁：上端付近は皿状に緩やかに立ち上がるが、中央はピット状に深くなっている。長軸方位：N-S。

[覆 土] 6層 (3～8層)。

[遺 物] 覆土上層から後期前葉の堀之内2式土器が破片でややまとまって出土した。

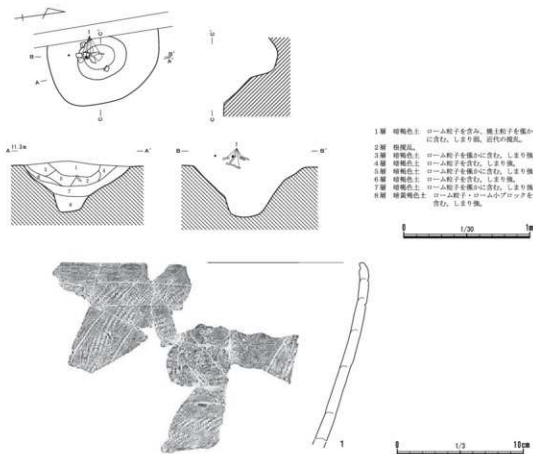
[時 期] 後期前葉 (堀之内2式期)。

遺 物 (第26図1、図版20-2-1、第19表)

1は後期前葉の堀之内2式土器で、深鉢形土器の口縁部～胴部破片である。

(4) ピット (第27図、第20表)

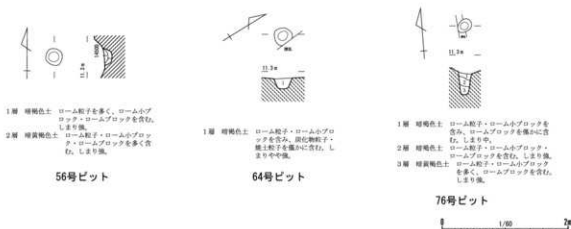
本地点で検出されたピットは合計78本で、そのうち、縄文時代のピットは3本 (56・64・76P) であった。ピットの基本内容は第20表に示した。



第26図 1444号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)

検出番号 図版番号	器種 類別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	出土位置	期 式
第26図1 図版20-2-1	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	平縁/外傾し、口唇 部で僅かに内湾	2本一對の沈線による斜行文/ 沈線間に単筋LRを充填施文	にぶい泥/砂粒・ 角閃石・礫少量	覆土上層	後期前葉 (堀之内2式)

第19表 1444号土坑出土土器一覽



第27図 縄文時代のピット (1/60)

遺構名	位置	平面形	規模 (m)			覆土及び特徴	主な遺物及び備考	時期
			長軸	短軸	深さ			
56 P	(B-2)G	円形	28	27	30	2層/1450D, 51Pに切られる	土器1点(時期不明):小破片のため図示できなかった	縄文時代
64 P	(B-2)G	楕円形	27	不明	16	単層/東端は耕作による擾乱を受ける	土器1点(時期不明):小破片のため図示できなかった	縄文時代
76 P	(C-2)G	楕円形	24	19	53	3層/339Hに切られる(陥床下からの掘出)/西半部は耕作により擾乱を受ける	遺物なし	縄文時代

距離の()内の数値は現存値

第20表 縄文時代のピット一覽

(5) 倒木痕

(A-3・4) グリッドからは、倒木痕1か所が検出された。規模は東西方向に約3.3m、南北方向では北側が調査区外であるが、南北方向は現存長1.9mである。

覆土としては、縄文時代の覆土であると判断でき、当初は土坑としての認識で掘り進めたものであったが、調査を進めると図版12-8で見るように大きなロームの塊が上層に堆積し、天地返しの状態であることが確認でき、さらに坑底面についても平坦ではなく、大きく凸凹状態であることがわかった。そのため、人為的に掘られた遺構ではないと判断し、倒木痕として取り扱うこととした。

倒木痕内からは、前期中葉の黒浜式土器、前期後葉の諸磯式土器と考えられる破片が出土した。覆土の様相を合わせて考えると、この倒木痕の時期は前期中葉～後葉と考えられる。なお、大きさから考えると大規模な倒木の痕跡であると推測できる。



第28図 倒木痕出土遺物 (1/3)

神威番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式
第28図1 図版20-3-1	深鉢	口縁部 破片	厚 0.9	外反	無文	橙/繊維多量、砂粒・角閃石・チャート少量	前期中葉 (黒浜式)
第28図2 図版20-3-2	深鉢	胴部 破片	厚 1.1	外傾し、やや屈曲	地文は単筋LRを横位施文	橙/繊維やや多量、砂粒少量	前期中葉 (黒浜式)
第28図3 図版20-3-3	深鉢	底部~胴部 破片	高 [3.0]	胴部はやや外傾	無文	橙/繊維多量、砂粒・角閃石少量	前期中葉 (黒浜式)
第28図4 図版20-3-4	深鉢	胴部 破片	厚 0.7	内湾し、屈曲	平截竹管状工具による結節沈線文/沈線文下に単筋RLを横位施文	灰褐/砂粒中量、礫少量	前期後葉 (諸磯a式)

第21表 倒木痕出土土器一覧

遺物 (第28図1~4、図版20-3-1~4、第21表)

[土器] (第28図1~4、図版20-3-1~4、第21表)

1~3は前期中葉の黒浜式土器である。4は前期後葉の諸磯式と思われる。

第3節 古墳時代後期の遺構・遺物

(1) 概要

古墳時代後期の遺構としては、住居跡1軒(340H)が検出された。340Hは北壁にカマドが検出されている。時期については、出土土器から判断して6世紀末葉に比定されると考えられる。

(2) 住居跡

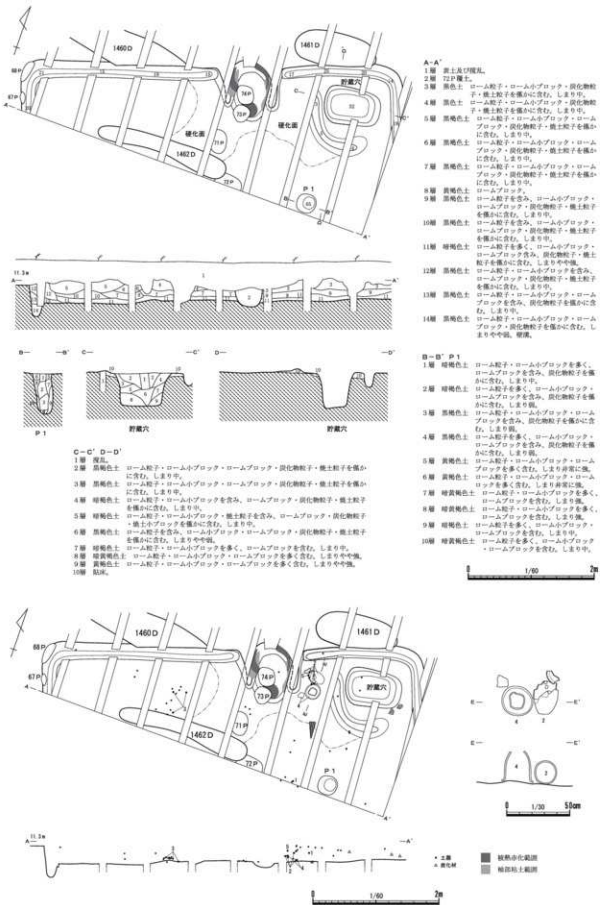
340号住居跡

遺構 (第29・30図)

[位置] (C-3・4) グリッド。

[検出状況] 住居南半部は調査区外にあり、1460~1462D、67・68・71~74Pに切られるように、後世の遺構によりかなりの部分を破壊されている。さらに全体に耕作による攪乱を受けている。

[構造] 平面形：方形か。規模：南北軸不明/東西軸6.05m/遺構確認面からの深さ20cm前後。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-11°-W。壁溝：上幅18~30cm/下幅5~10cm/床面からの深さ14~25cm。床面：カマド前面に硬化面が確認できた。貼床は住居全体ではほとんど確認できなかったが、貯蔵穴周辺に3~8cmの厚さで確認できた。カマド：北壁の中央やや東側寄りに位置す



第29図 340号住居跡・遺物出土状態 (1/60・1/30)

る。主軸方位はN-15°-W。長さ195cm/幅110cm/壁への掘り込み55cm。燃焼部は後世のピットにより破壊を受けているが、50cm程の楕円形で被熱を受け赤化している部分である。袖部はロームを馬蹄形状に掘り残し、その上に粘土を被覆して構築されていた。貯蔵穴：カマド右横の住居北東コーナーに位置する。平面形は隅丸長方形。長軸90cm/短軸60cm/深さ52cm。南縁と南西縁には高さ3~5cm・幅22~28cmの凸根が「L」字状に確認できた。柱穴：支柱穴としては、南側のP1のみが相当する。他の支柱穴は南側の調査区外にあるものと思われる。P1は30×30cmの隅丸方形で、深さ65cm。入口施設：確認できなかった。

〔覆 土〕セクションA-A'で12層(3~14層)に分層された。概ね住居外から内部へ流れ込む堆積を示している。

〔遺 物〕土師器環・甌・甕形土器、鉄製品(釘)が出土し、その他、穿孔貝果穴痕跡軟質泥岩1点が出土した。また、2の甕形土器と4の甌形土器の内部の土壌のサンプリングを行った結果、炭化種実が検出されたため炭化種実の同定を行った。同定結果については第4章第3節(99ページ)を参照。

〔時 期〕古墳時代後期(6世紀末葉)。

〔所 見〕カマド及び貯蔵穴前面の覆土中から炭化材が4点出土したが、炭化材の出土としては、さほど多くないため、焼失住居であるかは不明である。

〔遺 物〕(第31図、図版20-4、第22・23表)

〔土 器〕(第31図1~4、図版20-4-1~4、第22表)

1は土師器環形土器、2・3は土師器甕形土器、4は土師器甌形土器である。

〔鉄 製品〕(第31図5、図版20-4-5、第23表)

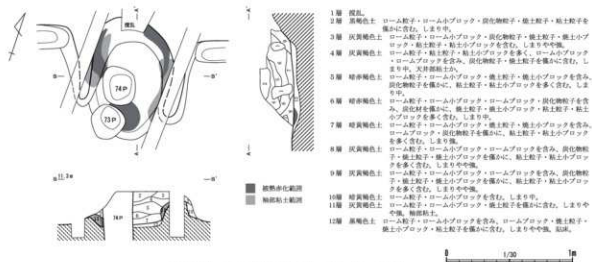
5は釘である。

〔石 製品〕(第31図6、図版20-4-6、第23表)

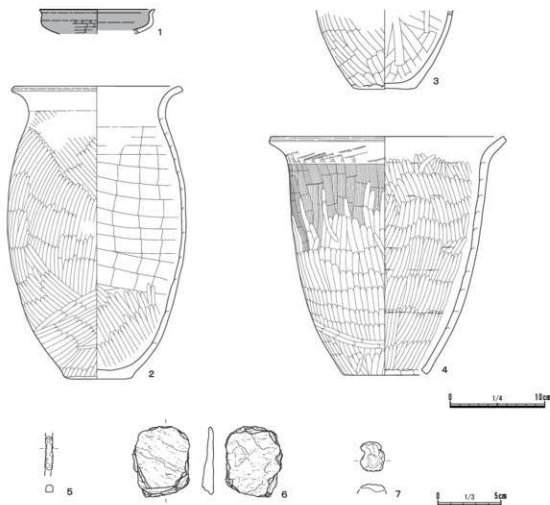
6は不明品である。円盤状に表裏面の縁辺部が縁取られている。

〔そ の 他〕(第31図7、図版20-2-7)

7は穿孔貝果穴痕跡軟質泥岩の小破片である。長さ2.3cm・幅1.9cm・重さ1.6g。果穴痕である小穴は顕著に残っていない。色調は浅黄橙~橙色。覆土中からの出土である。



第30図 340号住居跡カマド(1/30)



第31図 340号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

探検番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第31図1 図版20-4-1	土師器 環	口縁部～ 底部破片	高12.6 口12.2	いわゆる比企型環/口縁部は短く外反する/入間系土師器の胎土とは異なる	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ、底部はヘラ磨き調整/内外面赤彩	淡黄褐色/砂粒を極僅かに含む	中安や東側の覆土中層(床土12cm)
第31図2 図版20-4-2	土師器 甕	70%	高31.0 口18.1 底7.3	口縁部は外反する/最大径は胴部中位に持つ/底部は平底/土器内の覆土から炭化種実(自然科学分析結果あり)	内面：口縁部は横ナデ、胴部上位～中位はヘラナデ、下位はヘラ磨き調整/外面：ヘラ削り後、ヘラ磨き調整	にふい・褐色/砂粒をやや多く含む	カマド右袖脇の床面直上
第31図3 図版20-4-3	土師器 甕	胴部下半 ～底部 20%	高18.4 底6.8	底部は平底/いわゆる在地区土師器	内面：ヘラナデ/外面：ヘラナデ、一部ヘラ磨き調整か	褐色/砂粒・雲母片・赤褐色粒子を僅かに含む	北側中央の覆土下層(床土6～9cm)
第31図4 図版20-4-4	土師器 甕	90%	高25.6 口25.1 底9.0	底部は筒抜け式/口唇部は面取り/口縁部は大きく外反する/胴部は膨らみがなく、底部に向かって湾曲しながら窄まる/土器内の覆土から炭化種実(自然科学分析結果あり)	内面：口縁部は横ナデ、以下は粗い目のハケ目調整後、ヘラ磨き調整/外面：口縁部は横ナデ、粗い目のハケ目調整後、胴部下位～中位をヘラ磨き調整	褐色/砂粒・雲母片・塵を含む	カマド右袖脇の床面直上

第22表 340号住居跡出土土器一覽

検出番号 図版番号	種別	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第31図5 図版20-4-5	鉄製品	釘	2.7	0.6	0.5	2.2	断面は方形／上下両端を欠損	カマド右袖脇の覆土中層(床上14cm)
第31図6 図版20-4-6	石製品	不明品	5.6	4.5	0.9	32.0	隅丸四角形／表裏面の縁辺に刺刺が施される／緑泥片岩製／石鏝か	覆土中

第23表 340号住居跡出土鉄製品・石製品一覧

第4節 奈良・平安時代の遺構・遺物

(1) 概要

奈良時代の遺構は、住居跡1軒(339H)、平安時代の遺構は、住居跡1軒(338H)・土坑2基(1449・1450D)・ピット3本(21・33・34P)が検出された。

奈良時代の住居跡(339H)は一辺2mに満たない小形住居で、古墳時代から平安時代を通して市内最小規模の住居跡である。時期については、出土土器から判断して8世紀後葉に比定される。また、古墳時代後期の様相を示す土師器環・甕形土器と須恵器環形土器(南比企窯産)・武蔵型甕が同一住居跡から相伴する例は市内では初めてであり、古墳時代後期から奈良時代への過渡期の土器様相を示す貴重な資料と考えられる。

平安時代の住居跡(338H)は、北壁からカマドが検出されている。時期については、出土土器から判断して、9世紀後葉に比定されると思われる。土坑(1449・1450D)からは、須恵器甕形土器が1点ずつ出土している。おおそ9世紀代のものと考えられる。ピットについては、3本(21・33・34P)が考えられるが、出土遺物は33Pの土師器甕の小破片のみで時期の詳細は不明である。

(2) 住居跡

338号住居跡

遺構 (第32・33図)

[位置] (A・B-4) グリッド。

[検出状況] 住居東半部は調査区外である。1445D、21・33・34・40～45・50Pに切れ、全体に耕作による攪乱を受けている。

[構造] 平面形：方形と考えられる。規模：南北軸3.61m／東西軸不明／遺構確認面からの深さ33cm。壁：75～85°程度の角度で立ち上がる。主軸方位：N-17°-W。壁溝：確認できた範囲では、カマド付近以外は全周する。上幅15～20cm／下幅8cm前後／床面からの深さ2～7cm。床面：硬化面はカマド前面から住居中央、南西コーナー付近で確認された。貼床はカマド前面に一部確認されたのみで、それ以外は確認されなかった。カマド：北壁の中央に位置すると考えられる。主軸方位はN-9°-W。長さ106cm／幅不明／壁への掘り込み75cm。燃焼部は壁ライン上に位置する。カマド中央の西側壁面に構築粘土が検出されたが、袖部の構築粘土およびロームの掘り残しは確認されなかった。西側側面には一部、被熱赤化範囲が認められた。カマド中央の底面直上から大形の炭化材が面的に出土した。掘り方については、中央付近で底面から5cm程度の掘り込みが、カマド前面では深さ17cm程度の

楕円形の掘り込みが確認された。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：本住居跡に伴う柱穴は検出できなかった。入口施設：確認されなかった。

[覆 土] セクションA-A'・B-B'で9層(3~11層)に分層された。堆積状況から、住居外から内部へ流れ込む堆積を示している。

[遺 物] 須恵器環・高盤・壺・長頸瓶、石器(台石)が出土した。高盤と台石は、自然礫とともに住居中央の床面直上から出土した。

[時 期] 平安時代(9世紀後葉か)。

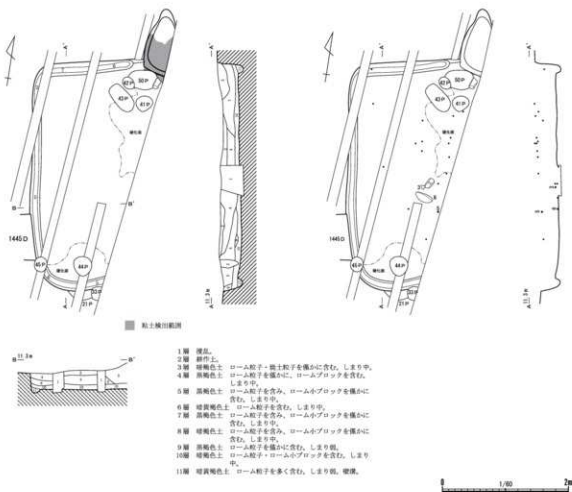
遺 物 (第34図、図版21-1、第24・25表)

[土 器] (第34図1~5、図版21-1-1~5、第24表)

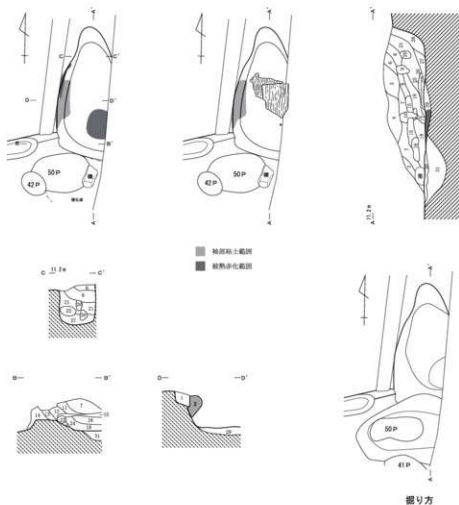
すべて須恵器で、1・2は須恵器環形土器で、3は須恵器高盤と思われる。4は須恵器壺形土器、5は須恵器長頸瓶である。

[石 器] (第34図6、図版21-1-6、第25表)

6は閃緑岩製の台石である。



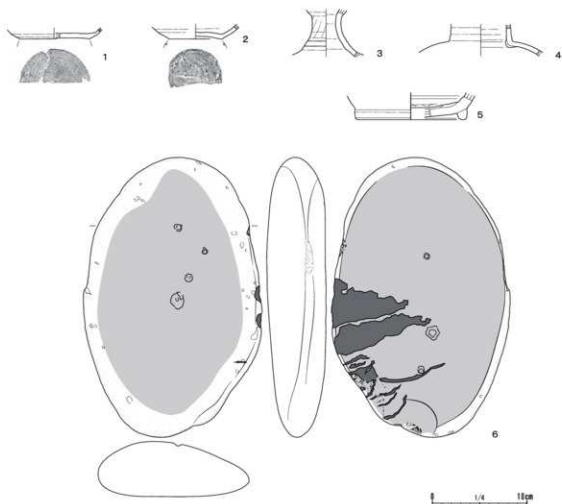
第32図 338号住居跡・遺物出土状態(1/60)



掘り方

- 1層 厚土 焼土粒子を含む。粘土粒子・粘土小ブロックを多く含む。しまり強。カマシ輪。
- 2層 灰白色土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・粘土粒子を含む。しまりや中強。
- 3層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を多く含む。粘土粒子を含む。しまりや中強。
- 4層 黄褐色土 ローム粒子を多く含む。ローム小ブロック・焼土粒子を多く含む。粘土粒子を含む。焼土小ブロック・粘土小ブロックを多く含む。しまりや中強。
- 5層 黄褐色土 ローム粒子・粘土粒子を多く含む。焼土粒子を含む。しまり中。
- 6層 黄褐色土 ローム粒子・粘土粒子・焼土粒子を多く含む。焼土粒子を多く含む。しまり中。
- 7層 黄褐色土 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子を多く含む。しまり中。
- 8層 黄褐色土 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子を多く含む。しまり中。
- 9層 赤褐色土 焼土粒子を多く含む。粘土小ブロックを多く含む。しまり中。
- 10層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・粘土粒子を多く含む。しまり中強。
- 11層 黄褐色土 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子を多く含む。しまり中。
- 12層 黄褐色土 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子を多く含む。しまり中。
- 13層 黄褐色土 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子を多く含む。しまり中。
- 14層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・粘土粒子を多く含む。しまり中。
- 15層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・粘土粒子を多く含む。焼土粒子を多く含む。粘土小ブロックを含む。しまり強。
- 16層 灰白色土 焼土粒子・粘土小ブロックを多く含む。粘土粒子・粘土小ブロックを多く含む。しまり中強。穴片部輪帯土。
- 17層 赤褐色土 焼土粒子・粘土小ブロックを多く含む。しまり強。
- 18層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む。炭化材・焼土粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックを多く含む。しまり中。
- 19層 黄褐色土 焼土粒子・粘土小ブロックを多く含む。しまり中。
- 20層 ロームブロック。
- 21層 黄褐色土 ローム粒子を多く含む。焼土粒子を多く含む。粘土小ブロックを含む。しまりや中強。
- 22層 黄褐色土 ローム粒子を多く含む。しまりや中強。
- 23層 砂赤褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・粘土粒子を多く含む。粘土小ブロックを含む。しまり強。輪帯穴片部の輪帯土。
- 24層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。炭化物粒子を多く含む。しまりや中強。輪帯穴片部の輪帯土。
- 25層 赤土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を多く含む。炭化物粒子を多く含む。炭化材を多く含む。しまり強。
- 26層 赤土 炭化物粒子・炭化材を多く含む。しまり強。
- 27層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。ロームブロック・炭化物粒子・炭化物粒子を多く含む。しまり中。
- 28層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を多く含む。しまり中。
- 29層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。しまり強。輪帯。
- 30層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。しまり強。輪帯。
- 31層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。炭化物粒子・焼土粒子を多く含む。しまりや中強。輪帯。

第33図 338号住居跡カマド(1/30)



第34図 338号住居跡出土遺物(1/4)

図版番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第34図1 図版21-1-1	須恵器 環	底部 50%	高11.2 底7.4	平底/東金子窯産か	ロクロ回転は右回転/底部は全 面回転ヘラ削り	褐色/砂粒・赤褐 色粒子を含む	覆土中
第34図2 図版21-1-2	須恵器 環	体部下半~ 底部60%	高11.6 底5.8	底部は基筒底状/東金子窯産か	ロクロ回転は右回転/底部に回 転系切り痕	浅黄褐色/砂粒・ 礫を含む	覆土中 (確認調査2Tr 内)
第34図3 図版21-1-3	須恵器 高盤か	脚台部 60%	高15.0	長頸瓶の頸部と思われるが、高 盤の脚台部か/基部に向かって 大きく外反する	脚台部上半の裾身の部分には捻 盤の跡が観察できる/ロクロ 成形	灰白色/砂粒をや や多く含む	中央付近のほぼ 床面上
第34図4 図版21-1-4	須恵器 壺	頸部~胴部 上半破片	高13.2	直口壺か/頸部は直立する/外 面胴部上半に自然釉	ロクロ成形	褐色/砂粒を僅 かに含む	住居内蔵
第34図5 図版21-1-5	須恵器 長頸瓶	胴部下半~ 底部破片	高12.9 底12.0	高台/東金子窯産か	ロクロ成形/内面に指頭圧痕が 残る	褐色/砂粒・白 色粒子を含む	中央付近の覆 土上層(床土 24cm)

第24表 338号住居跡出土土器一覽

発掘番号 図版番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第34図6 図版21-1-6	台石	閃緑岩	29.6	18.9	6.3	5345.0	完形/裏面・右側縁に後世の傷(ガブリ痕)あり/ 右裏面に磨り面・窪みあり/右・下側縁の一部に敲 打痕	中央付近の はば床面上

第25表 338号住居跡出土石器一覧

339号住居跡

遺構 (第35・36図)

[位置] (C-2) グリッド。

[検出状況] 57・69・76 Pに切られる。全体に耕作による攪乱を受けている。

[構造] 平面形：方形。規模：南北軸1.96m/東西軸1.98m/遺構確認面からの深さ5~20cm程度。壁：60°前後で立ち上がる。主軸方位：N-87°-E。壁溝：南西コーナー付近で一旦途切れている。上幅10~15cm/下幅3~8cm/床面からの深さ4~10cm。床面：入口ピットからカマドに向かう住居中央に幅50~80cmで硬化面が確認できた。貼床は全体に確認でき、特に北壁と南壁の内側に沿って周りから5cm以上深く、土坑状に掘られていた。貼床の厚さは5~20cm。カマド：南東コーナーの東壁に位置する。主軸方位はN-87°-E。長さ178cm/幅不明/壁への掘り込み120cm。燃烧部は確認できなかったが、中央付近には焼土範囲が確認された。袖部の左袖部分は攪乱により破壊されていたが、右袖部分では馬蹄形状にロームを掘り残し、上部を灰褐色粘土により被覆している状況を確認できた。坑底面は住居内から見て床面レベルより10cm程下がり、奥壁の煙道部分への立ち上がりは約70°の傾斜をもつ。また、坑底下部は9~12層の貼床層を堆積させ住居床面の構築時と同時にカマドの設置を行ったことが理解できる。貯蔵穴：検出できなかった。柱穴：P1・P2の2本が主柱穴と考えられる。P1は21×18cmの隅丸方形で深さ12cm、P2は28×26cmの隅丸方形で深さ14cm。入口施設：西壁中央の内側のP3が入口ピットと考えられる。P3は不明×25cmの楕円形で深さ10cm。さらにP3の周囲には、幅12~28cm・高さ4~7cmの凸堤が巡っていた。

[覆土] セクションA-A'・B-B'で15層に分層された。1~5層が住居の覆土で、黒褐色~赤褐色土を基調とし、焼土粒子を含んでいる。12~15層は貼床である。

[遺物] 須恵器坏形土器、土師器坏・甕形土器、土製品(支脚)、鉄製品(刀子・鎌)が出土した。特に住居南壁中央付近では、床面直上から土師器甕形土器(第37図6・8)、刀子(第37図11)がまとまって出土している。その他として、炭化材が住居南側から東側にかけて多く出土した。炭化材については、1点(炭1)のみであるが樹種同定・放射性炭素年代測定を行った。結果については、第4章第1節(96ページ)・第2節(97ページ)を参照。さらに、8の甕形土器内の土壌のサンプリングを行ったが、炭化種実が検出された。結果については、第4章第3節(99ページ)を参照。

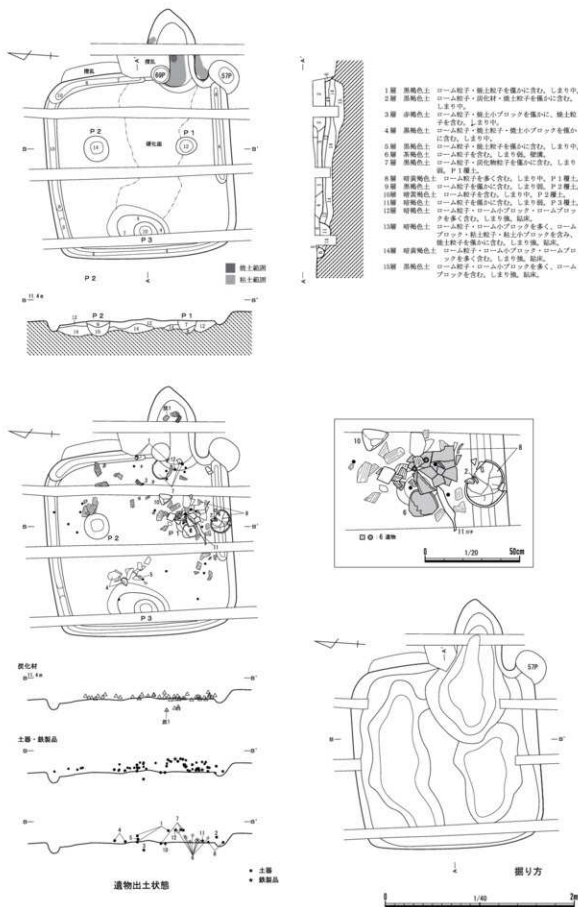
[時期] 奈良時代(鳩山窯跡Ⅲ期後半~Ⅳ期：8世紀後半)。

[所見] カマド前面の住居東半部から炭化材が多く出土したことから、焼失住居と考えられる。また、本住居跡は、規模として古墳時代から平安時代を通して市内最小の小形住居である。

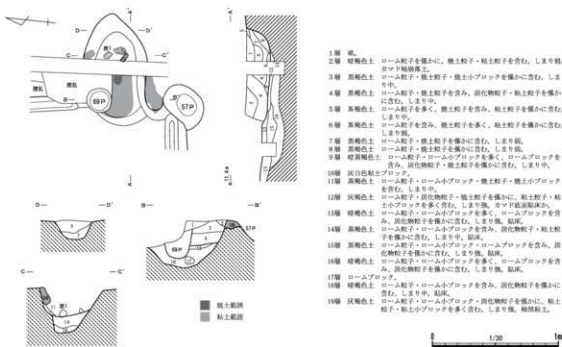
遺物 (第37図、図版21-2、図版22-1、第26・27表)

[土器] (第37図1~9、図版21-2-1~9、第26表)

1は南比企窯産の須恵器坏形土器である。



第35図 339号住居跡・遺物出土状態 (1/40・1/20)



第36図 339号住居跡カマド (1/30)

2・3は土師器环形土器で、4～9は土師器甕形土器である。4・5は丸甕で同一個体と思われるいわゆる在地系土師器である。6～9はいわゆる武蔵型甕である。

[土製品] (第37図10、図版22-1-10、第27表)

10は支脚である。基本的には円筒状の円筒形を呈し、上面は斜行するが平坦状に成形されている。遺存状態が悪いため、溶液(キシレン+パラロイドB72 10%)を含浸させ保存処理を行った。

[鉄製品] (第37図11・12、図版22-1-11・12、第27表)

11は刀子、12は鎌である。特に刀子は長さ22.5cm、幅3.2cmと市内最大のもので、平均的な大きさのものとは異なり注目に値する。

(3) 土坑

1449号土坑

遺構 (第38図)

[位置] (A・B-3) グリッド。

[検出状況] 1450 Dを切る。

[構造] 平面形：隅丸長方形。規模：長軸1.65m/短軸1.10m/深さ22cm。壁：60～70°の角度をもち立ち上がる。長軸方位：N-15°-E。

[覆土] 4層。

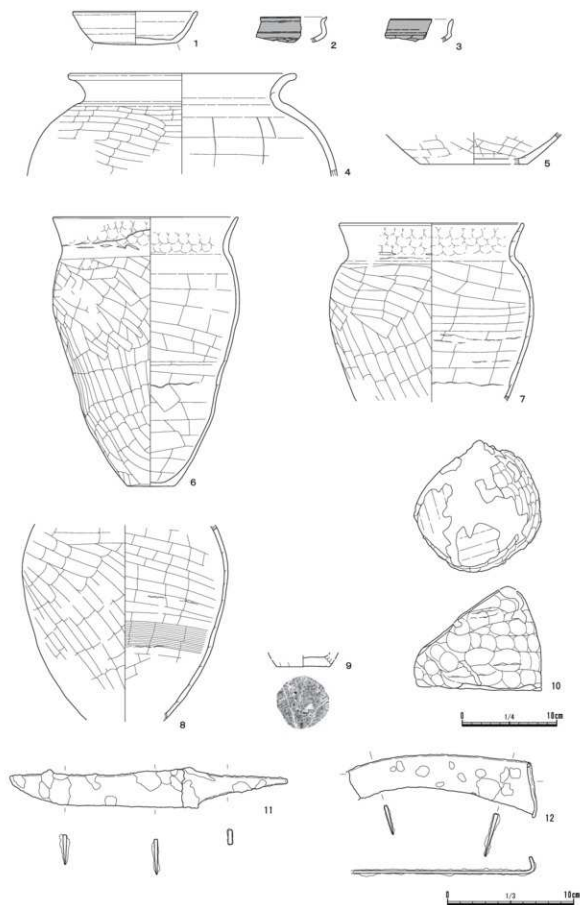
[遺物] 須恵器甕形土器1点が出土した。

[時期] 平安時代(9世紀代)。

遺物 (図版22-2-1、第28表)

[土器] (図版22-2-1、第28表)

1は須恵器甕形土器の口縁部破片である。



第37図 339号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

第3章 城山遺跡第102地点の調査

検出番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第37図1 図版4-1-1	須恵器 環	60%	高4.5 口13.2 底8.8	胴部は僅かに内湾しつつ外積する／平底／還元炎焼成／南北企業産	ロクロ成形／ロクロ回転は右回転／底部は全面ヘラ削り	灰白色／砂粒・白色斜状物質を多く、礫を僅かに含む	カマド前面部の覆土上層（床土14cm）、東壁溝上の覆土下層（床土2cm）
第37図2 図版4-1-2	土師器 環	口縁部～底部破片	高[2.7]	いわゆる比企型環／口縁部は内傾し、口唇部内側には沈線がまわる／入麗系土師器	内面：横ナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り／内外面に赤彩	褐色／砂粒・白色粒子を僅かに含む	南壁溝上の覆土中層（床土8cm）
第37図3 図版4-1-3	土師器 環	口縁部～底部破片	高[2.5]	いわゆる比企型環／有段系／口縁部と底部との間に段を持つ／口縁部は直立／口唇部内面に沈線がまわる／入麗系土師器	内面：横ナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り／内面全面、外面口縁部に赤彩	褐色／砂粒・赤褐色粒子を僅かに含む	中央東側の貼床内
第37図4 図版21-2-4	土師器 甕	口縁部～胴部中位 30%	高[10.5] 口[22.0]	丸甕／口縁部は外反し、「く」字状／口縁部と胴部との間に段を持つ／口縁部は厚味があり、胴部下部に行くにつれ薄くなる／5と同一個体と思われる／在地系土師器	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下は横、斜め方向のヘラ削り	褐色／砂粒、赤褐色粒子を僅かに含む	中央南側の床面直上
第37図5 図版21-2-5	土師器 甕	胴部下半～底部 20%	高[3.4] 底[5.8]	丸甕／底部は平底／4と同一個体と思われる／在地系土師器	内面：ヘラナデ／外面：横、斜め方向のヘラ削り／底部：ヘラ削り	褐色／砂粒・赤褐色粒子を僅かに含む	中央南側の床面直上
第37図6 図版21-2-6	土師器 甕	70%	高28.5 口[19.4] 底5.0	いわゆる武蔵型甕／口縁部は内湾気味に開く／胴部から口縁部の移行は緩やか／胴部最大径は上半部にもつ	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り／口縁部の内外面に指節による押捺痕が残る	赤褐色／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	北壁近くの床面上
第37図7 図版21-2-7	土師器 甕	口縁部～胴部下半 40%	高[18.9] 口[19.6]	いわゆる武蔵型甕／口縁部は「く」字状／口縁部と胴部との間に段を持つ／胴部上位に最大幅	内面：口縁部は横ナデ、以下は横、斜め方向のヘラナデ／外面：口縁部に横ナデ、以下は斜め方向のヘラ削り／内外面の口縁部に指節による押捺痕が残る	赤褐色／砂粒・雲母片を含み、礫を僅かに含む	カマド前の覆土上層（床土15cm）～床面直上
第37図8 図版21-2-8	土師器 甕	胴部上半～下半 50%	高[20.7]	いわゆる武蔵型甕／最大幅は胴部上位／炭化榎実（自然科学分析結果あり）	内面：ヘラナデ、一部ハケ目調整／外面：横、斜め方向のヘラ削り	暗赤色／砂粒・角閃石を含む	南壁溝上の床面レベル
第37図9 図版21-2-9	土師器 甕	底部のみ 100%	高[1.2] 底5.8	平底／在地系土師器	内外面：ヘラナデ／底部に木葉痕あり	にぶい褐色／砂粒・礫・雲母片を含む	覆土中

第26表 339号住居跡出土土器一覽

検出番号 図版番号	種別	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第37図10 図版21-2-10	土製品	支脚	—	13.4	12.0	—	現存高11.3cm／基本的に寸胴状の円筒形を呈する／上面は水平ではなく、約40°で傾斜している／上面はヘラ削りにより平坦に成形されている／側面は成形面として指節による押捺痕が顕著に残る／色調は概一に赤褐色、砂粒を僅かに含む／遺存状態が悪かったため、溶液（キシレン＋パワロイド B 72・10%）を含浸させ保存処理を行った／重さは先行して保存処理を行ったため不明	中央カマド寄りの床面直上
第37図11 図版5-11	鉄製品	刀子	22.5	3.2	0.4	60.1	完形／刃身部：長さ14.9cm、断面形は三角形／基部：長さ7.6cm、平面形は末端部に向かってやや窄まる三角形を呈し、断面形は四角形／基部は直線的だが僅かに湾曲が認められる／遺存状態は良好	南側の床面直上
第37図12 図版5-12	鉄製品	鎌	14.9	4.0	0.3	61.8	刃部先端は欠損／装着部基礎に折り返し部あり／折り返し部の高さは1.2cm／遺存状態は良好	カマド全面の覆土上層（床土16cm）

第27表 339号住居跡出土土製品・鉄製品一覽

1450号土坑

遺 構 (第38図)

[位 置] (B-2・3) グリッド。

[検出状況] 1449・1455 D、51・56・64 Pに切られる。

[構 造] 平面形：隅丸長方形。規模：長軸不明／短軸1.15m／深さ15cm。壁：約55°の角度をもち立ち上がる。長軸方位：N-75°-E。

[覆 土] 3層。

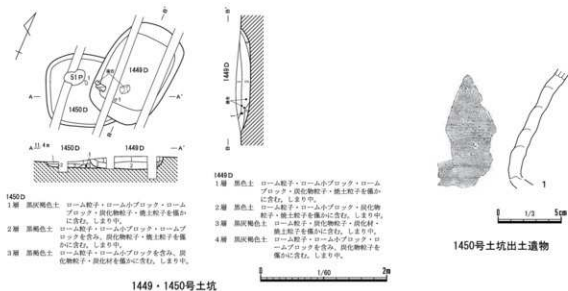
[遺 物] 須恵器甕形土器1点が出土した。

[時 期] 平安時代(9世紀代)。

遺 物 (第38図1、図版22-2-1、第29表)

[土 器] (第38図1、図版22-2-1、第29表)

1は須恵器甕形土器の頸部破片である。



1449・1450号土坑

第38図 平安時代の土坑・出土遺物(1/60・1/3)

図版番号	種別 器種	部 位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎 土	出土位置
図版22-2-1	須恵器 甕	口縁部小 破片	厚0.6	複合口縁／頸部は外反する／東 金子窯産か	口クロ成形	灰色／砂粒・礫を 含む	南壁付近の 覆土中層(床 上8cm)

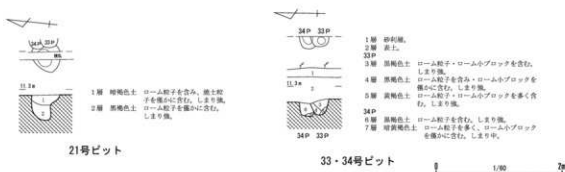
第28表 1449号土坑出土土器一覧

図版番号 図版番号	種別 器種	部 位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎 土	出土位置
第38図1 図版22-2-1	須恵器 甕	頸部破片	厚1.0	頸部は大きく外反する／東金子 窯産か	口クロ回転は右回転	灰色／砂粒・礫を 含む	中央の覆土 下層(床上4 cm)

第29表 1450号土坑出土土器一覧

(4) ビット (第39図、第30表)

本地点で検出されたビットは合計78本で、そのうち、平安時代のビットは3本(21・33・34P)であった。ビットからの出土遺物はなかった。ビットの基本内容は第30表に示した。



第39図 平安時代のビット (1/60)

遺構名	位置	平面形	規模 (m)			層土及び特徴	主な遺物及び備考	時期
			長軸	短軸	深さ			
21 P	(B-4)G	隅丸長方形	56	45	40	2層/33・34・44Pに切られ、338Hを切る	該当遺物なし	平安時代
33 P	(B-4)G	隅丸長方形か	不明	33	27	3層/338H、21・34Pを切る/東半部は調査区外	土師器1点(鏝)；小破片のため図示できなかった	平安時代
34 P	(B-4)G	隅丸長方形か	不明	不明	22	2層/33Pに切られ、338H、21 Pを切る/東半部は調査区外	該当遺物なし	平安時代

第30表 平安時代のビット一覧

第5節 中世以降の遺構・遺物

(1) 概要

中世以降の遺構は、調査区全体に耕作による攪乱を受けているが、土坑28基(1437~1443・1445~1448・1451~1467D)、溝跡1本(76M)、ビット72本(1~20・22~32・35~55・57~63・65~75・77・78P)が検出された。

土坑・ビットについては、調査区全域に密集して広がっている状況である。土坑のうち、1437~1439・1451~1453・1456~1460Dのような幅の狭い溝状もしくは長方形を呈するタイプのは、調査区中央付近に分布し、主軸方位がほぼ同じで、さらに直交するように1454・1455・1463・1466Dなどが分布する状況は、城山遺跡の特徴の一つである。1448Dは地下式坑の形態をもつもので、時期については、出土遺物の土器皿1点(第44図2)から、中世(15世紀後半~16世紀)の所産と考えられる。

溝跡の76Mについては、調査区北西隅からの検出である。確認面からの深さ1.30mで溝底面であるローム面(平坦面)が確認できたため、いわゆる箱堀の構造と考えられる。詳細は不明であるが、かなり規模の大きなものであることが推測できる。さらに出土遺物(図版22-3-1)として、陶器1点(天目茶碗)が中世(16世紀中葉)に比定できることから、「柏の城」関連の堀跡と考えられる。

(2) 土 坑

1437号土坑

遺 構 (第40図、第31表)

[位 置] (A-2) グリッド。

[検出状況] 3 Pに切られ、76 Mを切る。南東端は攪乱を受ける。

[構 造] 平面形：溝状。規模：長軸不明／短軸0.61m／深さ38cm。壁：約65°の角度で立ち上がる。

長軸方位：N-45°-W。

[覆 土] 3層（3～5層）。

[遺 物] 該当遺物は出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

1438号土坑

遺 構 (第40図、第31表)

[位 置] (A・B-3) グリッド。

[検出状況] 1439 Dに切られ、1441・1442 D、13 T-P 5、5・6・17・18・53・54 Pを切り、55 Pと重複する。

[構 造] 平面形：溝状。規模：長軸不明／短軸0.75m／深さ15cm。壁：約55°の角度で緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-60°-W。

[覆 土] 単層。

[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

1439号土坑

遺 構 (第40図、第31表)

[位 置] (B-3・4) グリッド。

[検出状況] 1438 D、11 Pを切る。

[構 造] 平面形：長方形。規模：長軸不明／短軸0.56m／深さ26cm。壁：約75°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-73°-W。

[覆 土] 2層。

[遺 物] 鉄製品1点（釘）が出土した。土器1点（皿）は小破片のため図示できなかった。

[時 期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

遺 物 (第44図1、図版22-3-1、第33表)

[鉄 製 品] (第44図1、図版22-3-1、第33表)

釘の小破片である。両端部を欠損する。

1440号土坑

遺 構 (第40図、第31表)

[位 置] (A-3・4) グリッド。

[検出状況] 14 Pを切り、12・13 Pと重複する。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸1.54 m／短軸0.52 m／深さ12 cm。壁：約60°の角度でやや緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-80°-W。

[覆土] 2層。

[遺物] 陶器1点（播鉢）が出土した。

[時期] 中世（17世紀代）。

[遺物]（図版22-3-1、第32表）

[陶器]（図版22-3-1、第32表）

1は瀬戸・美濃系の播鉢の胴部小破片で、時期は17世紀代である。

1441号土坑

[遺構]（第40図、第31表）

[位置]（A・B-3）グリッド。

[検出状況] 1438 Dに切られ、1442 D、16・17 Pを切る。

[構造] 平面形：長方形か。規模：長軸不明／短軸不明／深さ15 cm。壁：約55°の角度で緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-75°-W。

[覆土] 2層。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

1442号土坑

[遺構]（第40図、第31表）

[位置]（B-3）グリッド。

[検出状況] 1438・1441 Dに切られる。東半部は耕作による攪乱を受ける。

[構造] 平面形：楕円形か。規模：長軸不明／短軸0.55 m／深さ36 cm。壁：約70°の角度で立ち上がる。長軸方位：不明。

[覆土] 2層。

[遺物] 該当遺物は出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

1443号土坑

[遺構]（第40図、第31表）

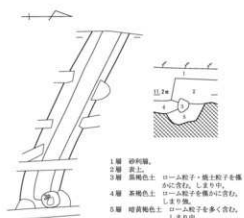
[位置]（A-3）グリッド。

[検出状況] 30 Pを切る。

[構造] 平面形：不整形。規模：長軸0.65 m／短軸0.50 m／深さ16 cm。壁：約55°の角度で緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-60°-E。

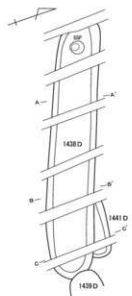
[覆土] 単層。

[遺物] 出土しなかった。

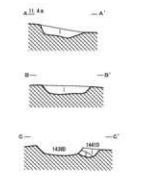


1437号土坑

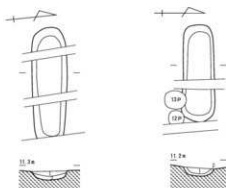
- 1層 砂利層。
- 2層 灰土。
- 3層 黒褐色土 ローム粒子・粘土粒子を多く含む。しまり中。
- 4層 茶褐色土 ローム粒子を多く含む。しまり中。
- 5層 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。しまり中。



1438・1441号土坑



- A-A'・B-B' 1438D
 1層 暗褐色土 ローム粒子を含み、ローム小ブロックを多く含む。しまり中。
- C-C' 1441D
 1層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまり中。
 2層 黒褐色土 ローム粒子を含む。しまり中。

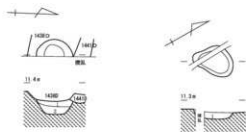


- 1層 暗褐色土 ローム粒子を含む。しまり中。
 2層 暗褐色土 ローム粒子・粘土粒子を多く含む。しまり中。

1439号土坑

- 1層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまり中。
 2層 黒褐色土 ローム粒子を含む。しまり中。

1440号土坑

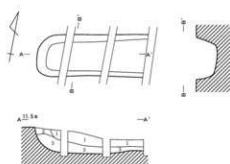


- 1層 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。しまり中。
 2層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまり中。

1442号土坑

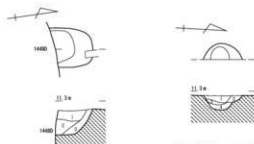
- 1層 暗褐色土 ローム粒子を含み、ローム小ブロックを多く含む。しまり中。

1443号土坑



- 1層 茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子を多く含む。しまり中。
- 2層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまり中。
- 3層 黒褐色土 ローム粒子を含み、ローム小ブロックを多く含む。しまり中。

1445号土坑



- 1層 茶褐色土 ローム粒子を含み、ローム小ブロックを多く含む。しまり中。
- 2層 黒褐色土 ローム粒子を多く含む。しまり中。
- 3層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。しまり中。

1446号土坑

- 1層 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。しまり中。
- 2層 黒褐色土 ローム粒子を含む。しまり中。
- 3層 黒褐色土 ローム粒子を多く含む。しまり中。
- 4層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。しまり中。

1447号土坑



第40図 中世以降の土坑 1 (1/60)

[時 期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

1445号土坑

遺 構 (第40図、第31表)

[位 置] (B-4) グリッド。

[検出状況] 338 H、45 Pを切る。

[構 造] 平面形：長方形。規模：長軸不明／短軸0.68m／深さ40cm。壁：約75°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-80°-E。

[覆 土] 3層。

[遺 物] 該当遺物は出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

1446号土坑

遺 構 (第40図、第31表)

[位 置] (A-2) グリッド。

[検出状況] 南半部は1448Dの主体部の陥落による攪乱のため不明である。

[構 造] 平面形：長方形。規模：長軸不明／短軸0.62m／深さ42cm。壁：約70°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-15°-E。

[覆 土] 3層。

[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

1447号土坑

遺 構 (第40図、第31表)

[位 置] (A-4) グリッド。

[検出状況] 東半部は耕作による攪乱を受けている。

[構 造] 平面形：楕円形か。規模：長軸不明／短軸不明／深さ25cm。壁：約60°の角度で立ち上がる。長軸方位：不明。

[覆 土] 4層。

[遺 物] 石製品1点(おはじき)が出土した。

[時 期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

遺 物 (第44図1、図版22-3-1、第33表)

[石 製 品] (第44図1、図版22-3-1、第33表)

1は石製のおはじきと思われる。石材は砂岩と思われる。

1448号土坑

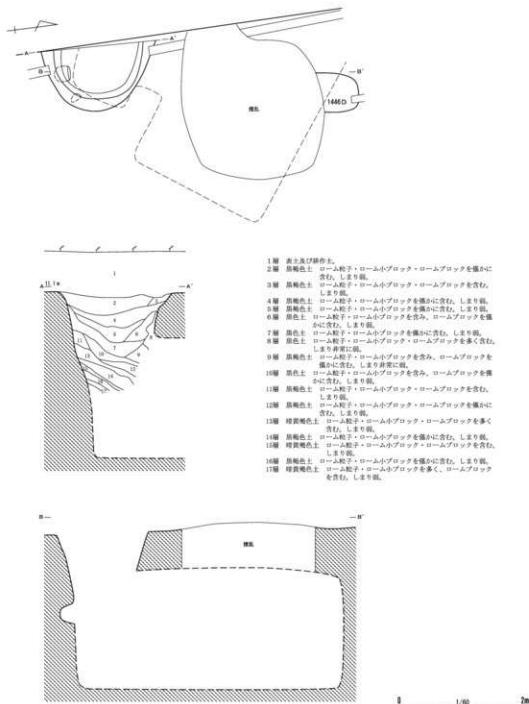
遺 構 (第41図、第31表)

[位 置] (A・B-2) グリッド。

[検出状況] 1446 Dとの切り合いは不明である。入口竪坑部・主体部の西側は調査区外である。

[構造] 地下式坑の構造をもつ。

(入口竪坑部) 平面形：隅丸長方形か。規模：長軸1.65m/短軸不明/深さ260cm。壁：開口部は約80°の勾配をもつが、全体にほぼ垂直に立ち上がる。南東隅の壁には大小2か所に足掛け穴と考えられる掘り込みが確認できた。大きな掘り込みは深さ約150cmの位置で、高さ31cm・幅23cm・奥行22cm、小さな掘り込みは大きな掘り込みより30cmほど東側にあり、深さ約80cmの位置で、高さ15cm・幅12cm・奥行15cmである。坑底面：確認できた範囲では、入口竪坑部と主体部との連絡部分は平坦



1448号土坑

第41図 中世以降の土坑2 (1/60)

で高低差はなかった。長軸方位：N-48°-W。

〔主体部〕平面形：長方形。規模：長軸不明／短軸2.28m／深さ260cm。壁：垂直に立ち上がる。

長軸方位：N-48°-W。

〔覆土〕入口竪坑部は16層（2～17層）まで分層した。

〔遺物〕土器1点（皿）1点、陶器1点（甕）、鉄製品1点（釘）が出土した。

〔時期〕中世（15世紀後半～16世紀）。

〔所見〕本遺構の西側が調査区外であり、崩落の危険を伴うため、精査は入口竪坑部・主体部の坑底面を確認した時点で断念した。そのため、主体部の構造などの詳細は不明となってしまった。

〔遺物〕（第44図2・3、図版22-3-1～3、第32・33表）

〔陶器・土器〕（第44図2、図版22-3-1・2、第32表）

1は陶器甕であるが、小破片のため産地・時期は不明である。

2は土器皿（かわらけ）である。時期は中世（15世紀後半～16世紀）である。

〔鉄製品〕（第44図3、図版22-3-3、第33表）

3は釘である。先端部を欠損する。

1451号土坑

〔遺構〕（第42図、第31表）

〔位置〕（B・C-2・3）グリッド。

〔検出状況〕63Pを切る。

〔構造〕平面形：溝状。規模：長軸不明／短軸0.70m／深さ10cm。壁：約40°の角度で緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-65°-W。

〔覆土〕2層。

〔遺物〕土器1点（皿）が出土したが、小破片のため図示できなかった。

〔時期〕覆土の観察から、中世以降と思われる。

1452号土坑

〔遺構〕（第42図、第31表）

〔位置〕（B・C-2・3）グリッド。

〔検出状況〕1453・1456Dを切る。

〔構造〕平面形：溝状。規模：長軸2.75m／短軸0.38m／深さ24cm。壁：80～85°の角度で急斜である。長軸方位：N-67°-W。

〔覆土〕2層。

〔遺物〕土器1点（皿）が出土したが、小破片のため図示できなかった。

〔時期〕覆土の観察から、中世以降と思われる。

1453号土坑

〔遺構〕（第42図、第31表）

〔位置〕（B・C-2・3）グリッド。

[検出状況] 1452 Dに切られ、13 T-P 4、1454～1457 D、61 Pを切る。

[構造] 平面形：溝状。規模：長軸3.68m／短軸0.86m／深さ32cm。壁：約80°の角度で急斜である。長軸方位：N-66°-W。

[覆土] 2層。

[遺物] 土器1点（甕か）、銭貨1点（熙寧元寶）が出土した。陶器1点（天目茶碗）、鉄製品2点（火打金・釘）は小破片のため図示できなかった。

[時期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

[遺物] (図44図2、図版22-3-1・2、第32・34表)

[土器] (図版22-3-1、第32表)

1は土器で甕と思われる。小破片のため時期は不明である。

[銭貨] (第44図2、図版22-3-2、第34表)

2は銭貨で、熙寧元寶と思われる。遺存度は50%で「熙寧〇〇」と確認できる。

1454号土坑

[遺構] (第42図、第31表)

[位置] (B-2・3) グリッド。

[検出状況] 1453 Dに切られ、1455 Dを切る。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸不明／短軸0.60m／深さ22cm。壁：80～85°の角度で急斜である。長軸方位：N-35°-E。

[覆土] 2層。

[遺物] 土器1点（皿）が出土したが、小破片のため図示できなかった。

[時期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

1455号土坑

[遺構] (第42図、第31表)

[位置] (B-2・3) グリッド。

[検出状況] 1453・1454 Dに切られ、1450 Dを切り、77 Pと重複する。

[構造] 平面形：溝状。規模：長軸不明／短軸0.73m／深さ33cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-30°-E。

[覆土] 2層。

[遺物] 該当遺物は出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

1456号土坑

[遺構] (第42図、第31表)

[位置] (B-2) グリッド。

[検出状況] 1452・1453 Dに切られる。

[構造] 平面形：溝状か。規模：長軸不明／短軸0.70m／深さ17cm。壁：約40°の角度で緩やかに

立ち上がる。長軸方位：N-67°-E。

[覆 土] 単層。

[遺 物] 該当遺物は出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

1457号土坑

遺 構 (第42図、第31表)

[位 置] (B・C-3) グリッド。

[検出状況] 1453 Dに切られ、13 T-P 2・3、1463 D、62 Pを切る。

[構 造] 平面形：溝状。規模：長軸不明/短軸0.9m/深さ20cm。壁：約80°の角度で急斜である。

長軸方位：N-75°-W。

[覆 土] 単層。

[遺 物] 該当遺物は出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

1458号土坑

遺 構 (第42図、第31表)

[位 置] (C-3) グリッド。

[検出状況] 58・59 Pに切られ、1460 D、60・65 Pを切る。

[構 造] 平面形：長方形。規模：長軸1.74m/短軸0.50m/深さ10cm。壁：約70°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-80°-W。

[覆 土] 単層。

[遺 物] 該当遺物は出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

1459号土坑

遺 構 (第42図、第31表)

[位 置] (C-3) グリッド。

[検出状況] 他の遺構との重複なし。

[構 造] 平面形：長方形。規模：長軸1.71m/短軸0.47m/深さ8cm。壁：掘り込みが浅いため、立ち上がりは緩やかである。長軸方位：N-75°-W。

[覆 土] 2層。

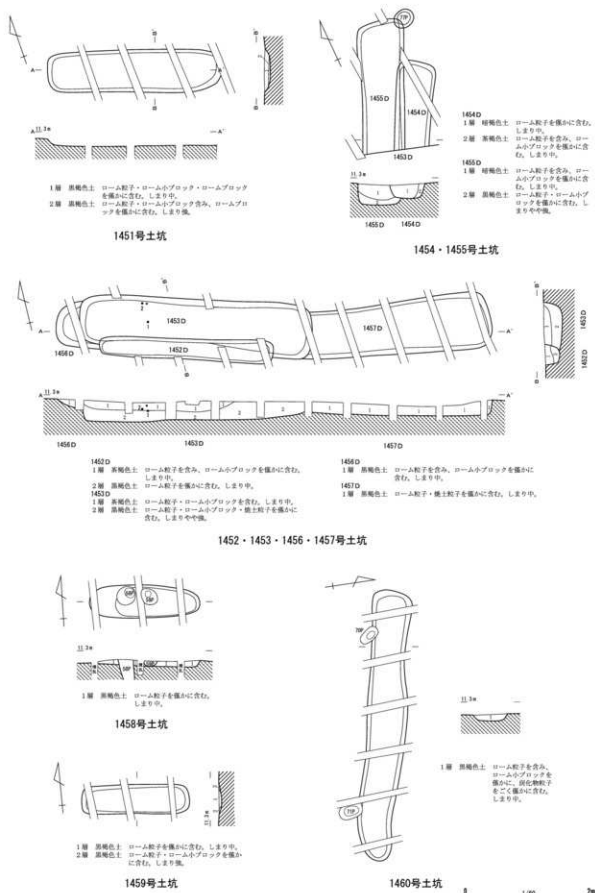
[遺 物] 該当遺物は出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

1460号土坑

遺 構 (第42図、第31表)

[位 置] (C-3・4) グリッド。



第42図 中世以降の土坑3 (1/60)

[検出状況] 70・71 Pに切られ、340 H、1458 D、73 Pを切る。

[構造] 平面形：溝状。規模：長軸4.30 m／短軸0.65 m／深さ11 cm。壁：60～65°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-70°-W。

[覆土] 単層。

[遺物] 土器1点(皿)、板碑1点、瓦1点が出土したが、小破片のため図示できなかった。

[時期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

1461号土坑

[遺構] (第43図、第31表)

[位置] (B・C-4) グリッド。

[検出状況] 340 Hを切る。

[構造] 平面形：楕円形。規模：長軸1.17 m／短軸0.55 m／深さ17 cm。壁：約75°の角度で急斜である。長軸方位：N-85°-W。

[覆土] 単層。

[遺物] 該当遺物は出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

1462号土坑

[遺構] (第43図、第31表)

[位置] (C-3・4) グリッド。

[検出状況] 340 H、72 Pを切る。

[構造] 平面形：細長い溝状。規模：長軸2.10 m／短軸0.35 m／深さ26 cm。壁：約80°の角度で急斜である。長軸方位：N-85°-W。

[覆土] 単層。

[遺物] 土器1点(皿)が出土した。

[時期] 中世(16世紀)。

[遺物] (図版22-3-1、第32表)

[土器] (図版22-3-1、第32表)

1は土器皿(かわらけ)の底部小破片である。

1463号土坑

[遺構] (第43図、第31表)

[位置] (B-3) グリッド。

[検出状況] 1457 Dに切られ、1464 Dを切る。

[構造] 平面形：溝状。規模：長軸不明／短軸0.72 m／深さ18 cm。壁：約70°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-30°-E。

[覆土] 2層。

[遺物] 磁器1点(碗)、土器2点(皿)が出土したが、小破片のため図示できなかった。



- 1層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまり中。

1461号土坑



- 1層 黒褐色土 ローム粒子・粘土粒子を塊かに含む。しまり中。

1462号土坑



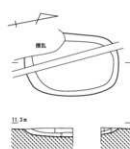
- 1層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロック・炭化物粒子を塊かに含む。しまり中。
2層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり中。
3層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を塊かに含む。しまり中。

1466号土坑



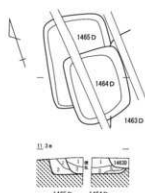
- 1層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を塊かに含む。しまり中。
2層 黒褐色土 ローム粒子を塊かに含む。ローム小ブロック・ロームブロック・炭化物粒子を塊かに含む。しまり中。

1463号土坑



- 1層 黒褐色土 ローム粒子を中々多く。ローム小ブロックを含む。ロームブロック・炭化物粒子を塊かに含む。しまり中。
2層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。ロームブロック・炭化物粒子を塊かに含む。しまり中。

1467号土坑



- 1464D
1層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。ロームブロック・炭化物粒子・粘土粒子を塊かに含む。しまり中。
2層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロック・炭化物粒子・粘土粒子を塊かに含む。しまり中。
3層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。ローム小ブロックを含む。しまり中。

- 1465D
1層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロック・炭化物粒子・粘土粒子を塊かに含む。しまり中。
2層 黒褐色土 ローム粒子を多く。ローム小ブロック・ロームブロックを含む。炭化物粒子・粘土粒子・粘土粒子を塊かに含む。しまり中。

1464・1465号土坑



第43図 中世以降の土坑4 (1/60)

〔時期〕 覆土の観察から、中世以降と思われる。

1464号土坑

〔遺構〕 (第43図、第31表)

〔位置〕 (B-3) グリッド。

〔検出状況〕 1463 Dに切られ、1465 Dを切る。

〔構造〕 平面形：長方形。規模：長軸1.12m/短軸0.93m/深さ26cm。壁：約80°の角度で急斜である。長軸方位：N-25°-E。

〔覆土〕 3層。

〔遺物〕 該当遺物は出土しなかった。

〔時期〕 覆土の観察から、中世以降と思われる。

遺構名	位置	平面形	規模 (m)			長軸方位	覆土及び特徴等	主な遺物	時期
			長軸	短軸	深さ				
1437 D	(A-2)G	溝状	不明	0.61	0.38	N-45°-W	3層(3~5層)／3Pに切られ、76Mを切る／南東端は覆乱を受ける	該当遺物なし	中世以降
1438 D	(A・B-3)G	溝状	不明	0.75	0.15	N-60°-W	単層／1439Dに切られ、1441・1442D、13T-P5、5・6・17・18・53・54Pを切り、55Pと重複	遺物なし	中世以降
1439 D	(B-3・4)G	長方形	不明	0.56	0.26	N-73°-W	2層／1438D、11Pを切る	鉄製品1点(釘)／土器1点(皿)：小破片のため図示できなかった	中世以降
1440 D	(A-3・4)G	長方形	1.54	0.52	0.12	N-80°-W	2層／14Pを切り、12・13Pと重複	陶器1点(雑鉢)	近世 (17c代)
1441 D	(A・B-3)G	長方形か	不明	不明	0.15	N-75°-W	2層／1438Dに切られ、1442D、16・17Pを切る	遺物なし	中世以降
1442 D	(B-3)G	楕円形か	不明	0.55	0.36	不明	2層／1438・1441Dに切られる／東半部は耕作による覆乱を受ける	該当遺物なし	中世以降
1443 D	(A-3)G	不整形	0.65	0.50	0.16	N-60°-E	単層／30Pを切る	遺物なし	中世以降
1445 D	(B-4)G	長方形	不明	0.68	0.40	N-80°-E	3層／338H、45Pを切る	該当遺物なし	中世以降
1446 D	(A-2)G	長方形	不明	0.62	0.42	N-15°-E	3層／南半部は1448Dの主体部の陥落による覆乱のため不明	遺物なし	中世以降
1447 D	(A-4)G	楕円形か	不明	不明	0.25	不明	4層／東半部は耕作により覆乱を受けている	石製品1点(おはじき)	中世以降
1448 D	(A・B-2)G	入口竪坑部 隅丸長方形か	1.65	不明	2.60	N-48°-W	主軸方向：N-48°-E／入口竪坑部は16層に分層／1446Dとの切り合いは不明／入口竪坑部・主体部の西側は調査区外／危険を伴うため調査は途中で断念した	土器1点(皿)、陶器1点(甕)、鉄製品1点(釘)	中世 (15c後半~16c)
		主体部 長方形か	不明	2.28		N-48°-W			
1451 D	(B・C-2・3)G	溝状	不明	0.70	0.10	N-65°-W	2層／63Pを切る	土器1点(皿)：小破片のため図示できなかった	中世以降
1452 D	(B・C-2・3)G	溝状	2.75	0.38	0.24	N-67°-W	2層／1453・1456Dを切る	土器1点(皿)：小破片のため図示できなかった	中世以降
1453 D	(B・C-2・3)G	溝状	3.68	0.86	0.32	N-66°-W	2層／1452Dに切られ、13T-P4、1454~1457D、61Pを切る	土器1点(湯か)、鉄貨1点(熊鷹元寶)／陶器1点(天目茶碗)、鉄製品2点(火打金・釘)：小破片のため図示できなかった	中世以降
1454 D	(B-2・3)G	長方形	不明	0.60	0.22	N-35°-E	2層／1453Dに切られ、1455Dを切る	土器1点(皿)：小破片のため図示できなかった	中世以降
1455 D	(B-2・3)G	溝状	不明	0.73	0.33	N-30°-E	2層／1453・1454Dに切られ、1450Dを切り、77Pと重複する	該当遺物なし	中世以降
1456 D	(B-2)G	溝状か	不明	0.70	0.17	N-67°-W	単層／1452・1453Dに切られる	該当遺物なし	中世以降
1457 D	(B・C-3)G	溝状	不明	0.90	0.20	N-75°-W	単層／1453Dに切られ、13T-P2・3、1463D、62Pを切る	該当遺物なし	中世以降
1458 D	(C-3)G	長方形	1.74	0.50	0.10	N-80°-W	単層／58・59Pに切られ、1460D、60・65Pを切る	該当遺物なし	中世以降
1459 D	(C-3)G	長方形	1.71	0.47	0.08	N-75°-W	2層／重複なし	該当遺物なし	中世以降
1460 D	(C-3・4)G	溝状	4.30	0.65	0.11	N-70°-W	単層／70・71Pに切られ、340H、1458D、73Pを切る	土器1点(皿)、板碑1点、瓦1点：小破片のため図示できなかった	中世以降

第31表 中世以降の土坑一覧(1)

遺構名	位置	平面形	規模 (m)			長軸方位	覆土及び特徴等	主な遺物	時期
			長軸	短軸	深さ				
1461 D	(B・C・4)G	楕円形	1.17	0.55	0.17	N-85°-W	単層/340Hを切る	該当遺物なし	中世以降
1462 D	(C・3・4)G	細長い溝状	2.10	0.35	0.26	N-85°-W	単層/340H、72Pを切る	土器1点(皿)	中世(16c代)
1463 D	(B・3)G	溝状	不明	0.72	0.18	N-30°-E	2層/1457Dに切られ、1464Dを切る	土器1点(碗)、土器2点(皿)；小破片のため図示できなかった	中世以降
1464 D	(B・3)G	長方形	1.12	0.93	0.26	N-25°-E	3層/1463Dに切られ、1465Dを切る	該当遺物なし	中世以降
1465 D	(B・3)G	長方形	1.43	1.05	0.26	N-20°-E	2層/1464Dに切られ、78Pを切る	土器1点(皿)；小破片のため図示できなかった	中世以降
1466 D	(B・3)G	長方形	不明	0.83	0.17	N-30°-E	3層/1453Dに切られ、3T-P4を切り、61Pと重複	該当遺物なし	中世以降
1467 D	(B・4)G	隅丸長方形	1.49	0.98	0.14	N-20°-E	2層/南西端は覆土を受ける	該当遺物なし	中世以降

第31表 中世以降の土坑一覧(2)

1465号土坑

遺 構 (第43図、第31表)

[位 置] (B-3)グリッド。

[検出状況] 1464 Dに切られ、78 Pを切る。

[構 造] 平面形：長方形。規模：長軸1.43m/短軸1.05m/深さ26cm。壁：約80°の角度で急斜である。長軸方位：N-20°-E。

[覆 土] 2層。

[遺 物] 土器1点(皿)が出土したが、小破片のため図示できなかった。

[時 期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

1466号土坑

遺 構 (第43図、第31表)

[位 置] (B-3)グリッド。

[検出状況] 1453 Dに切られ、3 T-P4を切り、61 Pと重複する。

[構 造] 平面形：長方形。規模：長軸不明/短軸0.83m/深さ17cm。壁：40~60°の角度でやや緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-30°-E。

[覆 土] 3層。

[遺 物] 該当遺物は出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

1467号土坑

遺 構 (第43図、第31表)

[位 置] (B-4)グリッド。

[検出状況] 南西端は攪乱を受ける。

[構造] 平面形：隅丸長方形。規模：長軸1.49m/短軸0.98m/深さ14cm。壁：掘り込みが浅いため、立ち上がりは緩やかである。長軸方位：N-20°-E。

[覆土] 2層。

[遺物] 該当遺物は出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。



第44図 中世以降の土坑出土遺物 (1/4・1/3・4/5)

図版番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)	製作の特徴等	推定産地	時期
図版 22-3-1	1440 D	陶器	鉢 鉢	厚 0.7	内外面に鉄軸/胎土：色調は黄白色、白色粒、石英を含む/胴部小破片	瀬戸・美濃系	近世 (17c)
図版 22-3-1	1448 D	陶器	甕	厚 0.8	内外面に鉄軸?/胎土：色調はぶい橙色、砂粒、白色粒、小礫を含む/胴部小破片	不明	不明
第44図2 図版 22-3-2	1448 D	土器	皿	高 12.91 (口 11.6) 底 (5.4)	かわらけ/ロクロ成形/平底/底部に回転糸切痕/口頸部に部分的に線が付着、石明礫として利用/胎土：色調は橙色、砂粒、赤褐色粒を僅かに含む/遺存度は15%	在地系	中世 (15c後半~16c)
図版 22-3-1	1453 D	土器	壺?	厚 1.1	胎土：色調はぶい橙色、砂粒、石英を含む/胴部小破片	在地系	不明
図版 22-3-1	1462 D	土器	皿	高 11.61 底 (5.8)	かわらけ/ロクロ成形/平底/底部に回転糸切痕/胎土：色調は淡橙色、砂粒、雲母片、赤褐色粒を僅かに含む/底部小破片	在地系	中世 (16c)

第32表 中世以降の土坑出土陶器・土器一覽

碑図番号 図版番号	出土位置	種別	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
第44図1 図版 22-3-1	1430 D	鉄製品	釘	1.8	0.5	0.4	0.7	先端部を欠損
第44図1 図版 22-3-1	1447 D	石製品	おはじき	1.8	1.7	0.4	2.2	上面は僅かに膨らみをもち、下端は平坦/石材は砂岩/完形品
第44図3 図版 22-3-3	1448 D	鉄製品	釘	8.0	0.5	0.5	5.8	頭部の幅は0.9cm/断面形は方形/先端部を欠損

第33表 中世以降の土坑出土石製品・鉄製品一覽

碑図番号 図版番号	銭貨名	外径 (cm)	方孔一辺 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	初鑄年	遺存状態	備考
第44図2 図版 22-3-2	熙寧元寶	2.5	0.6	0.1	1.3	北宋 (1068)	50%	欠損のため「熙寧〇〇」のみ確認でき、「元寶」の文字は不明

第34表 1453号土坑出土銭貨一覽

(3) 溝跡

76号溝跡

遺構 (第45図)

〔位置〕(A-2)グリッド。

〔検出状況〕北西隅から一部が検出された。大部分は調査区西側にあると思われる。走向角度はほぼ南北方向に曲線的に延びるものと考えられる。1437 Dに切られる。

〔構造〕規模：現存長2.30m/現存幅1.20m/深さ130cm。壁：約40°の角度で立ち上がる。セクションB-B'では中腹が弓状に少し張り出している。断面形：逆台形。溝底に平坦面が認められることから、いわゆる箱堀であろう。走向方位：N-32°-E。直線ではなく、南端は南北軸から見ると西方向にカーブしているものと思われる。

〔覆土〕26層(8~33層)に分層することができた。

〔遺物〕陶器1点(碗)が出土した。

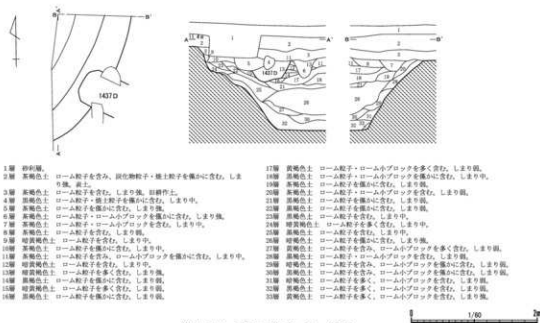
〔時期〕中世(16世紀中葉)。

〔所見〕陶器1点(天目茶碗)の時期が中世(16世紀中葉)に比定できることと、かなり規模の大きなものであると推測できることから、「柏の城」関連の堀跡と考えられる。

遺物 (図版22-3-1、第35表)

〔陶器〕(図版22-3-1、第35表)

1は瀬戸・美濃系の天目茶碗の口縁部小破片である。時期は16世紀中葉である。



- 1層 砂向風。
- 2層 赤褐色土 ローム粒子を含ま、褐色細砂・粘土粒子を多く含む。しまり強、黄土。
- 3層 赤褐色土 ローム粒子を含ま、しまり強、粘粉作土。
- 4層 赤褐色土 ローム粒子・粘土粒子を多く含む。しまり中。
- 5層 赤褐色土 ローム粒子を多く含む。しまり強。
- 6層 赤褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。しまり強。
- 7層 赤褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含ま、しまり中。
- 8層 赤褐色土 ローム粒子を含ま、しまり強。
- 9層 暗褐色土 ローム粒子を含ま、しまり中。
- 10層 赤褐色土 ローム粒子を多く含む。しまり中。
- 11層 赤褐色土 ローム粒子を含ま、ローム小ブロックを多く含む。しまり中。
- 12層 暗褐色土 ローム粒子を含ま、しまり中。
- 13層 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。しまり強。
- 14層 赤褐色土 ローム粒子を多く含む。しまり強。
- 15層 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。しまり強。
- 16層 赤褐色土 ローム粒子を多く含む。しまり強。

- 17層 赤褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。しまり強。
- 18層 赤褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。しまり中。
- 19層 赤褐色土 ローム粒子を多く含む。しまり強。
- 20層 赤褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含ま、しまり強。
- 21層 赤褐色土 ローム粒子を多く含む。しまり強。
- 22層 赤褐色土 ローム粒子を多く含む。しまり強。
- 23層 赤褐色土 ローム粒子を含ま、しまり中。
- 24層 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。しまり中。
- 25層 赤褐色土 ローム粒子を含ま、しまり中。
- 26層 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。しまり強。
- 27層 赤褐色土 ローム粒子を含ま、ローム小ブロックを多く含む。しまり強。
- 28層 暗褐色土 ローム粒子を含ま、ローム小ブロックを多く含む。しまり強。
- 29層 赤褐色土 ローム粒子を含ま、ローム小ブロックを多く含む。しまり強。
- 30層 赤褐色土 ローム粒子を含ま、ローム小ブロックを多く含む。しまり強。
- 31層 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含ま、しまり強。
- 32層 赤褐色土 ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含ま、しまり強。
- 33層 赤褐色土 ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含ま、しまり強。

第45図 76号溝跡 (1/50)

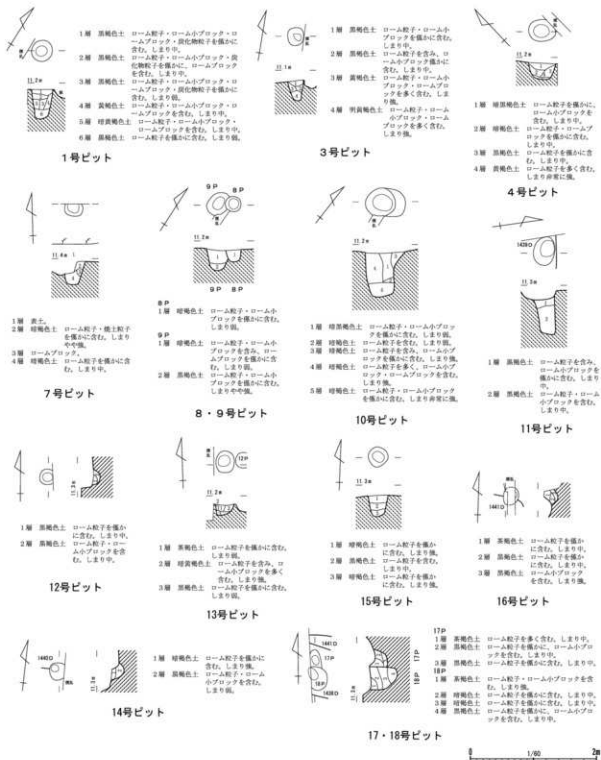
図版番号	種別	器種	法量 (cm)	製作の特徴等	推定産地	時期
図版22-3-1	陶器	碗	厚0.6	天目茶碗/口縁部はやや長く外反する/内外面に鉄粉/胎土：色調は黄白色、白色粒子を含む/口縁部小破片	瀬戸・美濃系	中世 (16c中葉)

第35表 76号溝跡出土陶器一覧

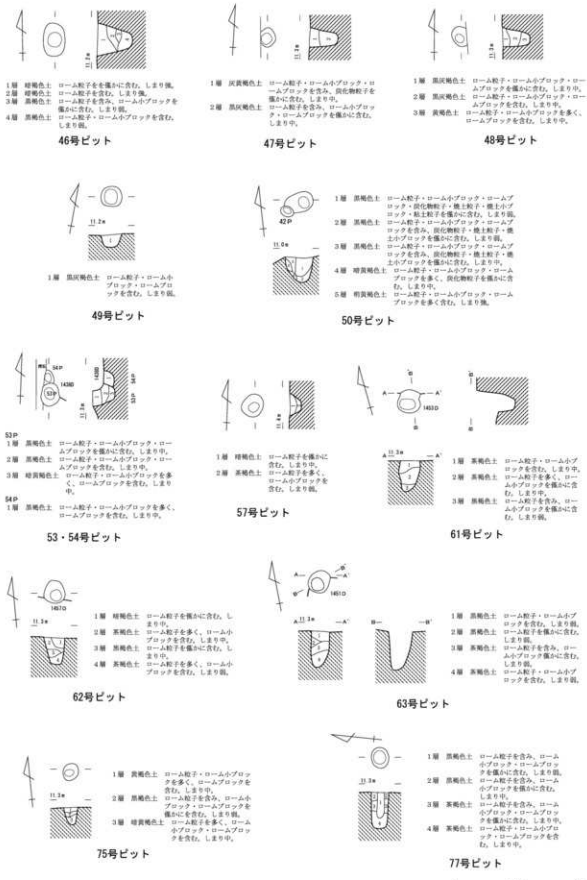
(4) ビット (第46~49図、図版22-4、第36~38表)

本地点で検出されたビットは合計78本で、そのうち、中世以降のビットは72本(1~20・21~32・35~55・57~63・65~78P)であった。

ビットの分布については、おおそ調査区全域に分布している。また、中世以降とするビットが同時



第46図 中世以降のビット1 (1/60)



第48図 中世以降のピット3 (1/60)

遺構名	位置	平面形	規模(cm)			覆土及び特徴	主な遺物及び備考	時期
			長軸	短軸	深さ			
1 P	(A-3)G	隅丸方形	34	32	46	6層/全体に耕作による覆土を受ける	該当遺物なし	中世以降
2 P	(A-2)G	隅丸方形	33	30	24	単層/ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含み、炭化物粒子を僅かに含む黒褐色土/西端は耕作による覆土を受ける	該当遺物なし	中世以降
3 P	(A-2)G	隅丸長方形	28	19	32	4層/1437Dを切る/全体に耕作による覆土を受ける	遺物なし	中世以降
4 P	(A-3)G	隅丸長方形	42	35	27	4層/東端は耕作による覆土を若干受ける	遺物なし	中世以降
5 P	(B-3)G	隅丸長方形	30	26	19	単層/ローム粒子・粘土粒子を僅かに含む暗褐色土/1438Dに切れられ、6Pを切る	遺物なし	中世以降
6 P	(A・B-3)G	隅丸長方形	50	不明	37	2層/1層:ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土、2層:ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土/1438D、5Pに切れられる	遺物なし	中世以降
7 P	(A-3)G	隅丸方形か	29	不明	38	3層/北端は調査区外	遺物なし	中世以降
8 P	(A-3)G	隅丸方形	25	23	20	単層/9Pを切る	遺物なし	中世以降
9 P	(A-3)G	隅丸長方形	41	32	36	2層/8Pに切れられる	遺物なし	中世以降
10 P	(A-3)G	隅丸長方形	63	44	70	5層/南端は耕作による覆土を受ける/東壁の立ち上がりは垂直ではなく、土端近くで緩やかに開く	遺物なし	中世以降
11 P	(B-3・4)G	隅丸長方形	45	34	68	2層/1439Dに切れられる	遺物なし	中世以降
12 P	(A-4)G	隅丸方形	不明	24	29	2層/1440Dと重複	遺物なし	中世以降
13 P	(A-4)G	隅丸長方形	35	29	34	3層/1440Dと重複	該当遺物なし	中世以降
14 P	(A-3・4)G	隅丸方形	28	不明	37	2層/1440Dに切れられる	該当遺物なし	中世以降
15 P	(A-3)G	隅丸方形	30	30	33	3層/重複なし	該当遺物なし	中世以降
16 P	(A-3)G	隅丸長方形	不明	22	21	3層/1441Dに切れられる/中央は耕作による覆土を受ける	遺物なし	中世以降
17 P	(A・B-3)G	隅丸長方形か	不明	不明	36	3層/1438・1441D、18Pに切れられる/西端は耕作による覆土を受ける	遺物なし	中世以降
18 P	(B-3)G	隅丸方形か	不明	35	55	4層/1438Dに切れられ、18Pを切る/西端は耕作による覆土を受ける	遺物なし	中世以降
19 P	(B-4)G	隅丸長方形	36	33	17	2層/東端は耕作による覆土を若干受ける	遺物なし	中世以降
20 P	(B-4)G	隅丸長方形	32	26	12	2層/東端は耕作による覆土を若干受ける	該当遺物なし	中世以降
22 P	(A-4)G	隅丸方形	35	30	25	2層/西端は耕作による覆土を受ける	遺物なし	中世以降
23 P	(A-4)G	隅丸方形	37	32	18	2層/重複なし	遺物なし	中世以降
24 P	(A-4)G	隅丸長方形	42	34	31	5層/25Pと重複	陶器1点(甕);小破片のため図示できなかった	中世以降
25 P	(A-4)G	隅丸長方形	45	40	70	5層/24Pと重複	該当遺物なし	中世以降
26 P	(A-4)G	隅丸長方形	59	37	25	4層/重複なし	該当遺物なし	中世以降
27 P	(A-4)G	隅丸長方形	37	28	19	3層/28・29Pを切る	遺物なし	中世以降
28 P	(A-4)G	隅丸長方形か	不明	26	8	単層/27Pに切れられる	遺物なし	中世以降
29 P	(A-4)G	隅丸長方形か	不明	26	15	単層/27Pに切れられる	該当遺物なし	中世以降
30 P	(A-3)G	隅丸長方形か	不明	37	43	2層/1443Dに切れられる	該当遺物なし	中世以降
31 P	(A-3)G	隅丸長方形か	不明	32	14	2層/32Pを切る/西端は耕作による覆土を受ける	該当遺物なし	中世以降
32 P	(A-3)G	隅丸長方形か	不明	28	36	3層/31Pに切れられる	該当遺物なし	中世以降
35 P	(A-3)G	隅丸方形	28	28	32	2層/西端は耕作による覆土を受ける	該当遺物なし	中世以降
36 P	(A-3)G	隅丸方形	30	28	42	2層/重複なし	該当遺物なし	中世以降
37 P	(A・B-2)G	隅丸方形	34	33	62	4層/西端の一部は1448Dの主体部の陥落により不明	該当遺物なし	中世以降
38 P	(A-4)G	隅丸長方形	37	27	58	2層/重複なし	該当遺物なし	中世以降
39 P	(A-4)G	隅丸方形	37	35	55	5層/重複なし	該当遺物なし	中世以降
40 P	(B-4)G	隅丸方形か	35	不明	30	単層/338H、41Pを切る/東端は調査区外	銭貨1点(元豊通寶)	中世以降
41 P	(B-4)G	隅丸方形	30	27	100	2層/41Pに切れられ、338Hを切る	銭貨1点(祥符元寶)	中世以降
42 P	(A・B-4)G	隅丸長方形	21	16	32	単層/ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロック・炭化物粒子を僅かに含む黒褐色土/338H、50Pを切る	遺物なし	中世以降
43 P	(B-4)G	隅丸長方形	49	25	65	3層/1層:ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む黒褐色土、2層:ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む黒褐色土、3層:ローム粒子を含み、ローム小ブロック・ロームブロックを僅かに含む黒褐色土/338Hを切る	該当遺物なし	中世以降
44 P	(B-4)G	隅丸方形	31	29	60	単層/ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む黒褐色土/338H、21Pを切る	遺物なし	中世以降
45 P	(B-4)G	隅丸方形	23	20	74	単層/ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む黒褐色土/338Hを切る	遺物なし	中世以降

第36表 中世以降のピット一覧(1)

遺構名	位置	平面形	規模(cm)			覆土及び特徴	主な遺物及び備考	時期
			長軸	短軸	深さ			
46 P	(A-4)G	隅丸長方形	50	34	55	4層/重複なし	遺物なし	中世以降
47 P	(B-4)G	隅丸方形	27	26	46	2層/西端は新作による覆土を受ける	該当遺物なし	中世以降
48 P	(B-4)G	隅丸方形か	32	不明	44	3層/西端は新作による覆土を受ける	該当遺物なし	中世以降
49 P	(B-2)G	隅丸方形	33	32	20	単層/重複なし	鉄滓1点	中世以降
50 P	(A・B-4)G	隅丸長方形	不明	30	44	5層/42Pに切られ、338Hを切る	遺物なし	中世以降
51 P	(B-2・3)G	隅丸長方形か	35	不明	29	2層/1層:ローム粒子を含む黒褐色土、2層:ローム粒子を含み、ローム小ブロックを僅かに含む暗黄褐色土/1450Dを切る	該当遺物なし	中世以降
52 P	(B-2)G	隅丸方形か	不明	不明	46	単層:ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土/東端は新作による覆土を受ける	遺物なし	中世以降
53 P	(A-3)G	隅丸長方形	36	30	35	3層/1438Dに切られ、54Pを切る/西端は新作による覆土を受ける	該当遺物なし	中世以降
54 P	(A-3)G	隅丸長方形か	不明	不明	34	単層/1438D、53Pに切られる/西端は新作による覆土を受ける	遺物なし	中世以降
55 P	(A-3)G	隅丸方形	23	20	24	単層:ローム粒子・ローム小ブロックを多く含み、ロームブロックを含む暗黄褐色土/1438Dと重複	遺物なし	中世以降
57 P	(C-2)G	隅丸長方形	38	32	19	2層/339Hを切る	該当遺物なし	中世以降
58 P	(C-3)G	隅丸方形	30	28	78	単層:ローム粒子を僅かに含み、ローム小ブロックを含む茶褐色土/1458D、65Pを切る	遺物なし	中世以降
59 P	(C-3)G	隅丸長方形	27	22	10	単層:ローム粒子を僅かに含み、ローム小ブロックを含む茶褐色土/1458D、60・65Pを切る	該当遺物なし	中世以降
60 P	(C-3)G	隅丸長方形	27	20	36	2層/1層:ローム粒子を含み、ローム小ブロックを僅かに含む暗褐色土、2層:ローム粒子を含み、ローム小ブロックを僅かに含む黒褐色土/1458D、59Pに切られ、65Pを切る	遺物なし	中世以降
61 P	(B-3)G	隅丸長方形か	不明	36	62	3層/1453Dに切られ、1466Dと重複	遺物なし	中世以降
62 P	(C-3)G	隅丸長方形か	36	32	42	4層/1457Dに切られる	遺物なし	中世以降
63 P	(B-2)G	隅丸長方形か	不明	不明	57	4層/1451Dに切られる	遺物なし	中世以降
65 P	(C-3)G	隅丸長方形か	不明	24	44	3層/1層:ローム粒子を僅かに含む黒灰褐色土、2層:ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを僅かに含む黒褐色土、3層:ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む暗黄褐色土/1458D、58・59Pに切られ、66Pを切る	該当遺物なし	中世以降
66 P	(C-3)G	隅丸方形か	不明	32	34	2層/1層:ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む黒褐色土、2層:ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗黄褐色土/65Pに切られる	該当遺物なし	中世以降
67 P	(C-3)G	隅丸方形か	不明	30	49	単層:ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土、しまり岩/340Hを切る/東端は新作による覆土を受ける	該当遺物なし	中世以降
68 P	(C-3)G	隅丸長方形	43	不明	47	3層/1層:ローム粒子を僅かに含む黒褐色土、2層:粘土粒子を含み、ローム粒子を僅かに含む黒褐色土、3層:ローム粒子を含み、ローム小ブロックを僅かに含む黒褐色土/340Hを切る/西端は新作による覆土を受ける	該当遺物なし	中世以降
69 P	(C-2)G	隅丸長方形	43	40	58	単層:ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗褐色土/339Hを切る/上層は覆土を受ける	遺物なし	中世以降
70 P	(C-3)G	隅丸長方形	32	17	36	単層:ローム粒子を含み、ローム小ブロックを僅かに含む黒灰褐色土/1460Dを切る	遺物なし	中世以降
71 P	(C-4)G	隅丸長方形	39	不明	28	2層/1層:ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子を僅かに含む黒褐色土、2層:ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子を多く含む暗褐色土/1460Dを切る	遺物なし	中世以降
72 P	(C-4)G	隅丸長方形か	不明	不明	33	単層:ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む暗褐色土/1462Dに切られる/南半部は調査区外にある	遺物なし	中世以降
73 P	(C-4)G	隅丸方形	26	26	53	単層:ローム粒子を多く含み、ローム小ブロック・ロームブロックを含む黒褐色土/340Hを切る	遺物なし	中世以降
74 P	(C-4)G	隅丸長方形	32	26	67	5層(2-6層)/2層:ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む黒褐色土、3層:ローム粒子を含み、ローム小ブロック・ロームブロックを僅かに含む黒灰褐色土、4層:ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土、5層:ローム粒子・ローム小ブロックを含み、ロームブロックを僅かに含む黒灰褐色土、6層:ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土/340Hを切る	該当遺物なし	中世以降
75 P	(B-2)G	隅丸方形	28	25	28	3層/重複なし	遺物なし	中世以降
77 P	(B-3)G	隅丸長方形	33	28	56	4層/1455Dと重複する	遺物なし	中世以降
78 P	(B-3)G	隅丸長方形か	35	不明	45	単層:ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土/1465Dに切られる	遺物なし	中世以降

第36表 中世以降のピット一覧(2)

期であるということ裏付けることは難しいが、(A-3・4)グリッドのおおよそ東西方向に延びる7・10・15・24・29・39・46Pがピット列状になり、その付近では長方形の配列が存在しそうである。多分に建物跡となる可能性がある。

今回は、第46～48図に主なピットを掲載し、ピットの基本内容を第36表に示した。また、ピットから出土した遺物は少なかったが、図示できたものは、40・41Pから出土したそれぞれ銭貨1点と49Pから出土した鉄滓1点であった。

銭貨については、第49図、図版22-4-1に掲載し、第37表に内容を示したが、40Pからは元豊通寶か、41Pからは祥符元寶が出土した。

49Pから出土した鉄滓は、図版22-4-1に掲載し、第38表に内容を示した。この鉄滓は、本地点の西側の第35・89地点の調査により、この一帯付近が鑄造関連施設であることが判明していることから、本資料及び本ピットにおいても鑄造関連資料の可能性がある。



第49図 中世以降のピット出土銭貨(4/5)

挿図番号 図版番号	出土遺物	銭貨名	外径 (cm)	方孔一辺 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	初鑄年	遺存状態	備考
第49図1 図版22-4-1	40P	元豊通寶か	2.6	0.6	0.1	1.3	北宋 (1078)	50%	不鮮明であるが「元豊〇寶」と確認できるか
第49図1 図版22-4-1	41P	祥符元寶	2.5	0.6	0.2	2.2	北宋 (1008)	60%	欠損のため「祥符〇寶」は確認できるが、「元」の文字は不明

第37表 中世以降のピット出土銭貨一覧

挿図番号 図版番号	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
図版22-4-1	鉄滓	2.6	1.8	1.0	4.4	ガラス状の slags の小破片／色調は黒色で光沢あり

第38表 49号ピット出土鉄滓一覧

第6節 遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時代の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

今回、遺構外出土遺物としては、縄文時代の遺物、弥生時代後期～古墳時代前期の土器、平安時代の土器、中世以降の遺物に分類する。

なお、中世以降の遺物では、陶磁器、土製品・金属製品、銭貨の他に鑄造関連遺物が出土している。鑄造関連遺物は、すべて遺構に伴わない出土であったが、第5節(4)のピットでも前述したが、本地点の西側の第35・89地点の調査により、この一帯付近が鑄造関連施設であることが判明しているため、その関連資料と考えられる。

(1) 縄文時代の遺物 (第50～53図1～112、図版23～25-1～112、第39～41表)

[石 器] (第50図1～7、図版23-1～7、第39表)

1・2は石鏃で、ともに先端部に衝撃剥離痕と思われる縦方向の剥離面が観察される。3は楔形石器、4・5は二次加工のある剥片、6は石核である。7は石皿の破片を転用したと考えられる敲石で、破断面に僅かに磨り面が観察される。

[土 器] (第50～53図8～109、図版23～25-8～109、第40表)

8は早期後葉の条痕文系土器である。

9～26は前期の土器で、9は前期初頭の花積下層式土器、10～14は前期中葉の黒浜式土器、15～22は前期後葉の諸磯b式土器、23・24は前期後葉の諸磯c式土器、25・26は前期後葉の浮島・興津式土器である。

27～51は中期の土器で、27・28は中期初頭の五領ヶ台式土器、29は中期中葉の勝坂式土器、30～46は中期後葉の加曾利E式土器で、30～34は加曾利E3式、35は加曾利E3～4式、36～42は加曾利E4式である。47・48は中期後葉の連弧文系土器である。

52～109は後期の土器で、52～54は後期初頭の称名寺1式土器である。55～85は後期前葉の堀之内式土器で、55～63は堀之内1式、64～85は堀之内2式である。86～94は後期中葉の加曾利B式土器である。95～104は後期の粗製土器と考えられる。105は後期の注口土器の注口部である。107～109は後期の底部片で、底面に網代痕が観察される。

[土 製品] (第53図110～112、図版25-110～112、第41表)

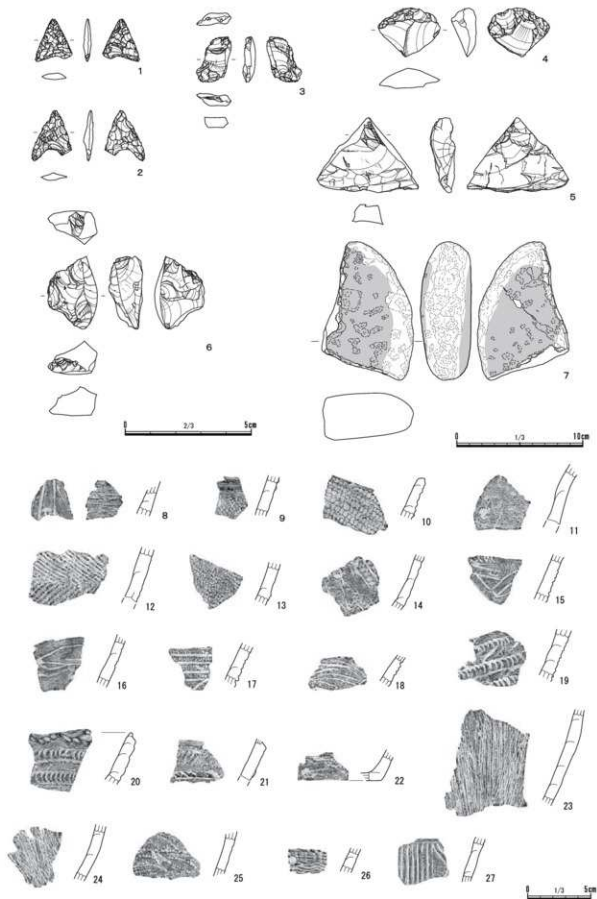
110～112は土器片鏃である。110は後期前葉の堀之内1式、111・112は中期で、111は中期後葉の加曾利E式と考えられる。

(2) 弥生時代後期～古墳時代前期の土器 (第53図113・114、図版25-113・114、第42表)

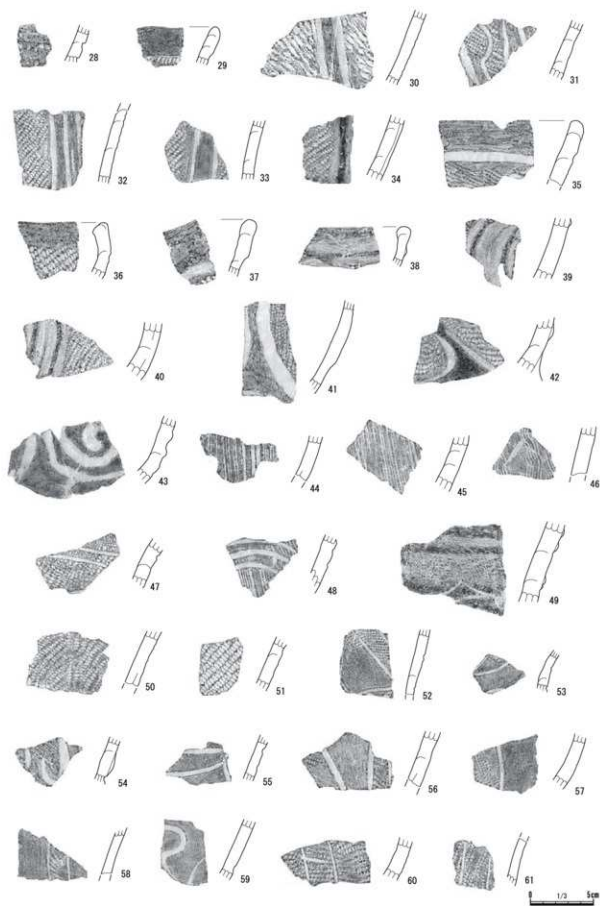
113・114は弥生時代後期～古墳時代前期の土器で、いずれも壺形土器の口縁部破片である。

(3) 平安時代の土器 (図版25-115～118、第42表)

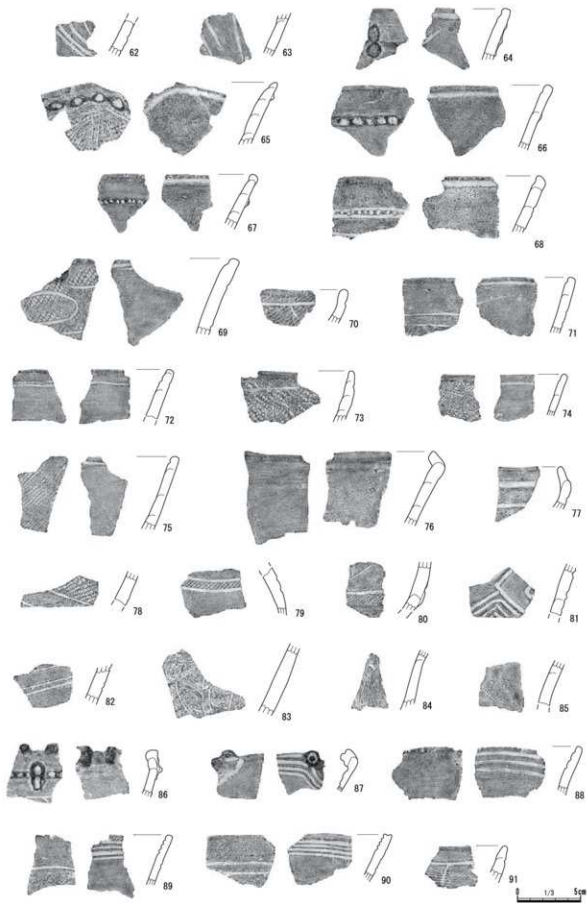
115は須恵器坏形土器、116～118は須恵器甕形土器である。



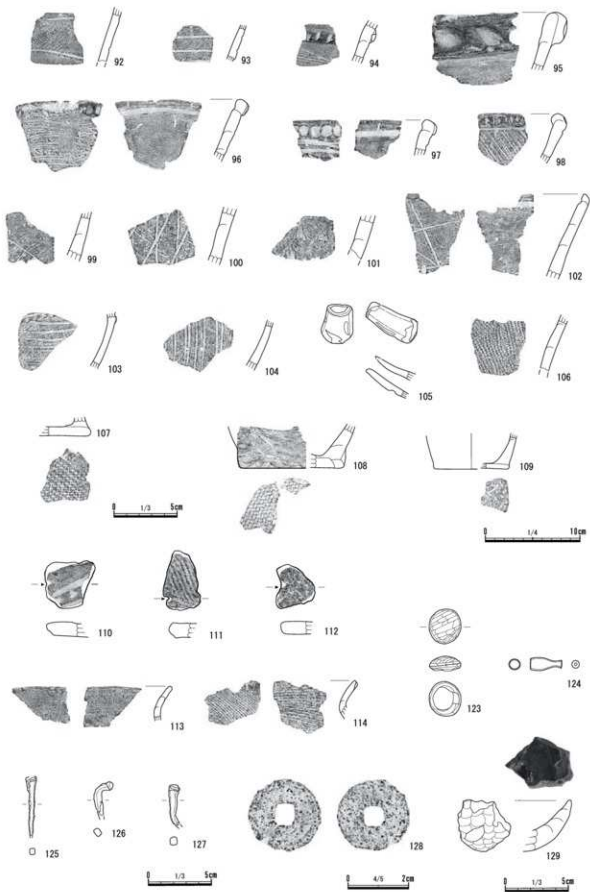
第50図 遺構外出土遺物 1 (2/3・1/3)



第51図 遺構外出土遺物2 (1/3)



第52図 遺構外出土遺物3 (1/3)



第53図 遺構外出土遺物4 (1/4・1/3・4/5)

(4) 中世以降の遺物 (第53図123～129、図版25－119～132、第43～46表)

[陶磁器] (図版25－119～122、第43表)

119・120は磁器、121・122は陶器である。

[土製品・金属製品] (第53図123～127、図版25－123～127、第44表)

123は箱庭道具と思われる。キノコ形で笠の部分を残存し、柄・石突きの部分は欠損する。

124は銅製品で、煙管の吸口である。125～127は鉄製品で、釘である。

[銭貨] (第53図128、図版25－128、第45表)

128は銭貨で、ほぼ完形であるが、文字については残りが悪く確認できなかった。

[鑄造関連遺物] (第53図129、図版25－129～132)

129は土製品でトリベである。厚さ1.5cm、重さ27.6g。円形の碗形を呈する。底部では厚みがあり、口唇部にかけて薄くなる。指頭押捺による成形後、内面にナデ調整を施す。胎土は橙色で、砂粒、雲母片、赤褐色粒子を含む。内面は灰色に還元している。遺存度は15%程度。確認調査時の3トレンチ内からの出土。

130・131は溶解炉の炉壁である。130は現存高5.5cm、幅6.5cm、厚さ3.0cm、重さ78.5g。131よりも厚みがある。(C-2)グリッドからの出土である。131は現在高6.0cm、幅6.2cm、厚さ2.6cm、重さ81.0g。炉壁内にスラグが付着している。炉壁の基本の厚さは1.0cmである。確認調査時の3トレンチ内からの出土。

132は鉄滓(スラグ)である。長さ5.5cm、幅3.1cm、厚さ2.5cm、重さ35.8g。塊状で、表面に発泡したような気孔が生成されている。色調は黒褐色である。確認調査時の3トレンチ内からの出土。

検出番号 図版番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第50図1 図版23-1	石 鏡	黒曜石	1.7	1.4	0.3	0.4	凹基無茎／右部部を欠損／割縁外形は直線的／表裏面に調整剥離が施される／裏面先端に縦方向の小剥離面あり、衝撃剥離面か	遺構外 (B-4)G
第50図2 図版23-2	石 鏡	チャート	2.0	1.6	0.4	0.7	凹基無茎／右部部を欠損／割縁外形は概ね直線的／表裏面に調整剥離が施される／裏面先端に縦方向の小剥離面あり、衝撃剥離面か	338 H
第50図3 図版23-3	楔形石器	黒曜石	1.8	1.3	0.5	1.0	完形／上下両端に潰れ状の剥離面／素材は不定形の剥片と思われる	1452 D
第50図4 図版23-4	二次加工のある剥片	黒曜石	1.9	2.4	1.0	3.2	完形／裏面左側縁から上端にかけて二次加工剥離	338 H
第50図5 図版23-5	二次加工のある剥片	チャート	3.0	4.0	1.0	9.0	裏面左側縁から二次加工剥離	遺構外 (B-3)G
第50図6 図版23-6	石 核	黒曜石	2.9	2.0	1.3	6.4	正面、右側面を作業面とし、上下両端から縦長状の剥片を剥離／上下両端に潰れ状の剥離面あり	1445 D
第50図7 図版23-7	敲 石	閃緑岩	10.9	7.2	4.0	443.6	左平、下半部を欠損するが、破断面はやや磨かれている／側縁に敲打痕／石皿を転用した敲石・磨石	遺構外 (B-3)G

第39表 遺構外出土石器一覧

発掘番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 形式	出土遺構 出土位置
第50図8 図版23-8	深鉢	胴部 破片	厚0.9	やや外傾	外面に3本の縦位沈線文/内面に横位の条痕文	にぶい橙/砂粒・礫・角閃石少量	縄文早期後葉 (条痕文系)	1453 D
第50図9 図版23-9	深鉢	胴部 破片	厚0.8	やや外傾	平行する2本の微隆起線文/地文は単節R Lを横位施文	橙/礫多量、砂粒少量	縄文前期初葉 (五領下層式)	遺構外
第50図10 図版23-10	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	波状口縁か/外傾	地文は単節R Lを縦位施文	にぶい橙/礫多量、砂粒少量	縄文前期中葉 (黒肌式)	遺構外
第50図11 図版23-11	深鉢	胴部 破片	厚1.0	やや外反し、外傾	無節Lを斜位施文か	にぶい赤褐/礫多量・砂粒・雲母片中量・チャート少量	縄文前期中葉 (黒肌式)	遺構外 (C-3)G
第50図12 図版23-12	深鉢	胴部 破片	厚1.0	外傾	上段に無節R、下段に無節Lを横位施文による羽状縄文	にぶい黄橙/礫多量、砂粒・白色粒子中量	縄文前期中葉 (黒肌式)	確認調査 (5Tr内)
第50図13 図版23-13	深鉢	胴部 破片	厚0.8	外傾	地文は上から単節R L横位施文、単節L R斜位施文、単節R L横位施文	にぶい橙/礫多量、砂粒・白色粒子少量	縄文前期中葉 (黒肌式)	遺構外
第50図14 図版23-14	深鉢	胴部 破片	厚0.7	外傾	単節L Rに無節Lを付加した縄文を縦位施文	にぶい黄橙/礫多量、砂粒少量	縄文前期中葉 (黒肌式)	67 P
第50図15 図版23-15	深鉢	胴部 破片	厚0.8	外傾	半截竹管状工具による並行沈線による木葉文/並行沈線間に爪形文	灰褐/砂粒・雲母片中量	縄文前期後葉 (諸磯式)	遺構外 (A-3)G
第50図16 図版23-16	深鉢	胴部 破片	厚0.7	外傾	半截竹管状工具による横位沈線文	にぶい橙/砂粒・橙色粒子中量	縄文前期後葉 (諸磯式)	遺構外
第50図17 図版23-17	深鉢	胴部 破片	厚0.9	外傾	地文はR L単節を横位施文/半截竹管状工具による横位・斜位沈線文/沈線文間に爪形文	にぶい橙/砂粒中量、雲母片・チャート少量	縄文前期後葉 (諸磯式)	32 P
第50図18 図版23-18	深鉢	胴部 破片	厚0.6	外傾	半截竹管状工具による弧状の横位沈線文	灰褐/砂粒・角閃石やや多量	縄文前期後葉 (諸磯式)	遺構外 (A-4)G
第50図19 図版23-19	深鉢	胴部 破片	厚1.1	外傾	幅広い爪形文/爪形文間に斜位の沈線文	にぶい橙/砂粒・片岩・礫中量	縄文前期後葉 (諸磯式)	遺構外
第50図20 図版23-20	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	平縁/口唇部に刻みのある隆帯を蛇行して貼り付け/外傾	地文にL R単節を横位施文/幅広い爪形文	灰褐/砂粒中量	縄文前期後葉 (諸磯式)	遺構外 (A-4)G
第50図21 図版23-21	深鉢	胴部 破片	厚0.9	外傾	地文は無節Lを横位施文/扁平な浮線文	にぶい黄橙/砂粒・角閃石やや多量	縄文前期後葉 (諸磯式)	338 H
第50図22 図版23-22	深鉢	底部~胴部 破片	高さ[2.6]	平底/胴部はやや外傾	半截竹管状工具による縦位沈線文	橙/砂粒・角閃石・白色針状物質中量	縄文前期後葉 (諸磯式)	遺構外
第50図23 図版23-23	深鉢	胴部 破片	厚0.8	僅かに内湾し、やや外傾	半截竹管状工具による縦位・斜位の集合沈線文	にぶい赤褐/砂粒・赤褐色粒子中量	縄文前期後葉 (諸磯式)	339 H
第50図24 図版23-24	深鉢	胴部 破片	厚0.8	僅かに内湾し、やや外傾	半截竹管状工具による縦位・斜位の集合沈線文	にぶい橙/砂粒・橙色粒子少量	縄文前期後葉 (諸磯式)	1 P
第50図25 図版23-25	深鉢	胴部 破片	厚0.7	やや外傾	波状貝殻文	にぶい褐/砂粒・角閃石中量	縄文前期後葉 (浮島・興津式)	338 H
第50図26 図版23-26	深鉢	胴部 破片	厚0.7	外傾	貝殻線縞引文/波状の貝殻条痕文	にぶい黄褐/片岩多量、砂粒少量	縄文前期後葉 (浮島・興津式)	遺構外
第50図27 図版23-27	深鉢	胴部 破片	厚0.6	やや外傾	半截竹管状工具による集合沈線文	灰黄褐/砂粒・角閃石・石英中量	縄文中期初葉 (五領ヶ台式)	遺構外
第51図28 図版23-28	深鉢	胴部 破片	厚0.8	外傾	細い棒状工具による連続刺突文	橙/砂粒・石英多量	縄文中期初葉 (五領ヶ台式)	遺構外
第51図29 図版23-29	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	平縁/やや外傾	口縁部は無文/口縁部直下に横位の爪形文	にぶい橙/砂粒・石英中量	縄文中期中葉 (膳式)	遺構外

第40表 遺構外出土縄文土器一覧(1)

発掘番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土遺構 出土位置
第51図30 図版23-30	深鉢	胴部 破片	厚0.8	やや外傾	地文は無彫しを縦位施文/2本 一対の沈線による懸垂文/沈線 間を塗り消し	にぶい、橙/砂粒、 褐色粒子少量	縄文中期後葉 (加曾利E 3式)	遺構外
第51図31 図版23-31	深鉢	胴部 破片	厚1.0	外傾	地文は単節L Rを縦位施文/横 行懸垂文/2本一対懸垂文で、 沈線間は塗り消し	黄褐色/白色粒子 やや多量、砂粒 少量	縄文中期後葉 (加曾利E 3式)	1452 D
第51図32 図版23-32	深鉢	胴部 破片	厚0.8	僅かに外傾	地文は単節R Lを縦位施文/懸 垂文/懸垂文の沈線間を塗り消 し	橙/砂粒・礫少 量	縄文中期後葉 (加曾利E 3式)	340 H
第51図33 図版23-33	深鉢	胴部 破片	厚0.9	僅かに外反	地文は単節R Lを縦位施文/2 本一対の懸垂文/沈線間を塗り 消し	にぶい、橙/砂粒、 角閃石中量	縄文中期後葉 (加曾利E 3式)	遺構外
第51図34 図版23-34	深鉢	胴部 破片	厚0.9	やや外傾	地文は単節R Lを縦位施文/微 隆起線による懸垂文/微隆起線 脇を塗り消し	明赤褐色/白色粒 子多量、砂粒少 量	縄文中期後葉 (加曾利E 3式)	339 H
第51図35 図版23-35	深鉢	口縁部 破片	厚1.1	平縁/外傾	横位沈線を施文後、無彫Lを縦 位施文	灰褐色/砂粒・赤 褐色粒子・礫少 量	縄文中期後葉 (加曾利E3~4式)	1457 D
第51図36 図版23-36	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	波状口縁/内湾	地文は単節L Rを横位施文	浅黄褐色/砂粒・ 雲母片少量	縄文中期後葉 (加曾利E 4式)	1466 D
第51図37 図版23-37	深鉢	口縁部 破片	厚0.7	波状口縁/僅かに外 傾	地文は単節R Lを横位施文か/ 低い隆帯で区画後、隆帯脇を塗 り消し	浅黄褐色/砂粒少 量	縄文中期後葉 (加曾利E 4式)	1453 D
第51図38 図版23-38	深鉢	口縁部 破片	厚0.6	平縁/口唇部が膨大 /僅かに外傾	口縁部に微隆起線による区画/ 区画内に単節R Lを縦位施文	橙/砂粒・赤褐 色粒子少量	縄文中期後葉 (加曾利E 4式)	遺構外
第51図39 図版23-39	深鉢	胴部 破片	厚1.3	僅かに内湾し、やや 外傾	地文は単節R Lか/微隆起線文 /微隆起線間および脇を塗り消し	黒褐色/砂粒やや 多量、角閃石中 量	縄文中期後葉 (加曾利E 4式)	遺構外
第51図40 図版23-40	深鉢	胴部 破片	厚1.5	内湾	地文は単節R Lを縦位施文/微 隆起線か/微隆起線間および脇 を塗り消し	浅黄褐色/砂粒・ 褐色粒子・角閃 石・礫少量	縄文中期後葉 (加曾利E 4式)	338 H
第51図41 図版23-41	深鉢	胴部 破片	厚0.8	僅かに内湾し、やや 外傾	地文は単節L Rを斜位施文/幅 広の沈線による横円文	にぶい、橙/砂粒 ・チャート中量	縄文中期後葉 (加曾利E 4式)	1461 D
第51図42 図版23-42	深鉢	胴部 破片	厚1.2	僅かに内湾し、やや 外傾	隆帯による楕円形の区画/区画 内に単節L Rを充填/縄文施文 後、隆帯脇を塗り消し	にぶい、橙/砂粒 ・白色粒子少量	縄文中期後葉 (加曾利E 4式)	38 P
第51図43 図版23-43	深鉢	胴部 破片	厚1.1	やや内湾し、外傾	沈線による渦巻文	にぶい、黄褐色/砂 粒・チャート中 量	縄文中期後葉 (加曾利E 5式)	338 H
第51図44 図版23-44	深鉢	胴部 破片	厚0.9	やや外傾	地文は条線文/沈線による懸垂 文を3本	にぶい、橙/赤褐 色粒子中量、砂 粒・礫中量	縄文中期後葉 (加曾利E 5式)	1448 D
第51図45 図版23-45	深鉢	胴部 破片	厚1.3	やや外傾	地文は縦位の条線文	灰褐色/褐色粒 子中量、砂粒・ 角閃石少量	縄文中期後葉 (加曾利E 5式)	遺構外
第51図46 図版23-46	深鉢	胴部 破片	厚1.1	僅かに外傾	地文は縦位の蛇行条線文	にぶい、橙/砂粒 ・白色粒子少量	縄文中期後葉 (加曾利E 5式)	340 H
第51図47 図版23-47	深鉢	胴部 破片	厚1.1	僅かに外反し、外傾	地文は単節L Rを斜位施文/横 位沈線文	灰褐色/砂粒多 量、角閃石中量	縄文中期後葉 (連弧文系)	340 H
第51図48 図版23-48	深鉢	胴部 破片	厚1.0	やや外傾	地文は条線文/弧状の沈線文	橙/砂粒・赤褐 色粒子少量	縄文中期後葉 (連弧文系)	1448 D
第51図49 図版23-49	深鉢	胴部 破片	厚1.4	やや外傾	上部に2本平行の隆帯、下部に 幅広い隆帯/沈線による三角文	橙/砂粒やや多 量、角閃石少 量	縄文中期	確認調査 (3Tr内)
第51図50 図版23-50	深鉢	胴部 破片	厚1.0	外傾	地文は単節R Lを縦位/斜位 施文	灰褐色/砂粒・ 褐色粒子少量	縄文中期	遺構外 (A-4)G
第51図51 図版23-51	深鉢	胴部 破片	厚0.9	外傾	地文は単節R Lを縦位施文	黄褐色/砂粒やや 多量	縄文中期	340 H

第40表 遺構外出土縄文土器一覽(2)

探検番号 図版番号	部種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	型 式	出土遺構 出土位置
第51図52 図版23-52	深鉢	胴部 破片	厚0.6	やや外傾	沈線を施文後、単筋LRを充填 施文/無文部を書き調整	にぶい泥/砂粒 ・赤褐色粒子・ 礫少量	縄文後期前葉 (称名寺1式)	遺構外
第51図53 図版24-53	深鉢	胴部 破片	厚0.7	外反	沈線区画による帯縄文/単筋LR を施文/沈線施文後、無文部 を書き調整	にぶい黄粒/砂 粒少量	縄文後期前葉 (称名寺1式)	338H
第51図54 図版24-54	深鉢	胴部 破片	厚0.8	やや外傾	沈線を施文後、単筋RLを充填 施文/無文部を書き調整	にぶい黄粒/砂 粒・書母少量	縄文後期前葉 (称名寺1式)	340H
第51図55 図版24-55	深鉢	胴部 破片	厚0.7	外傾	縦位沈線を施文後、横位沈線を 施文	泥/砂粒・角閃 石少量	縄文後期前葉 (堀之内1式)	1453D
第51図56 図版24-56	深鉢	胴部 破片	厚1.2	外傾	縦位・斜位の沈線文/沈線間に 単筋LRを充填無文/無文部を 書き調整	灰濁/砂粒・チ ャート中量	縄文後期前葉 (堀之内1式)	遺構外 (A-4)G
第51図57 図版24-57	深鉢	胴部 破片	厚0.9	僅かに内湾し、やや 外傾	沈線を施文後、単筋RLを充填 施文/無文部を書き調整	にぶい泥/砂粒 ・棕色粒子中量	縄文後期前葉 (堀之内1式)	340H
第51図58 図版24-58	深鉢	胴部 破片	厚0.8	やや外傾	縦位沈線を施文後、単筋LRを 充填施文/無文部を書き調整	にぶい泥/砂粒 少量	縄文後期前葉 (堀之内1式)	338H
第51図59 図版24-59	深鉢	胴部 破片	厚0.8	外傾	蛇行懸垂文	橙/砂粒少量	縄文後期前葉 (堀之内1式)	遺構外
第51図60 図版24-60	深鉢	胴部 破片	厚1.1	やや外傾	地文は単筋LRを斜位施文/懸 垂文	にぶい泥/砂粒 中量、チャート 少量	縄文後期前葉 (堀之内1式)	338H
第51図61 図版24-61	深鉢	胴部 破片	厚0.7	僅かに外反し、外傾	地文は単筋LRを斜位施文/懸 垂文	にぶい泥/砂粒 やや多量、礫中 量	縄文後期前葉 (堀之内1式)	1445D
第52図62 図版24-62	深鉢	胴部 破片	厚0.8	外傾	沈線文	にぶい泥/砂粒 中量、チャート ・角閃石・書母 片少量	縄文後期前葉 (堀之内1式)	338H
第52図63 図版24-63	深鉢	胴部 破片	厚0.8	やや外傾	懸垂文	浅黄粒/砂粒少 量	縄文後期前葉 (堀之内1式)	遺構外 (C-2)G
第52図64 図版24-64	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	平縁/外傾	横位の隆線文/隆線上に8の字 状の陥付文/口唇部内面に沈線 文	にぶい赤濁/砂 粒中量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	338H
第52図65 図版24-65	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	波状口縁/外傾	口縁直下に舌頭状意を伴う隆帯/ 地文は単筋LRを横位施文/ 細沈線による「木」字文/内面 に口縁に沿って沈線施文	にぶい泥/砂粒 ・赤褐色粒子・ 角閃石中量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	340H
第52図66 図版24-66	深鉢	口縁部 破片	厚0.7	平縁/外傾	削みのある隆帯文/内面に口縁 に沿って沈線施文	にぶい赤濁/砂 粒中量、角閃石 少量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	340H
第52図67 図版24-67	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	平縁/外傾	削みのある隆帯文/内面に口縁 に沿って沈線施文	赤濁/砂粒中量、 石英・角閃石少 量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	338H
第52図68 図版24-68	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	平縁/外傾	2本の横位沈線間に連絡する刺 突/内面に口縁に沿って沈線施 文	橙/砂粒・礫多 量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	340H
第52図69 図版24-69	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	平縁/外傾	地文は単筋LRを横位施文/横 位沈線文および横円文/内面に 口縁に沿って沈線施文	にぶい泥/砂粒 ・角閃石中量、 礫少量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	遺構外 (C-4)G
第52図70 図版24-70	深鉢	口縁部 破片	厚0.6	平縁/やや内湾	地文は単筋LRを横位施文/横 位沈線文	橙/砂粒やや多 量、角閃石・石 英中量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	確認調査 (1Tr内)
第52図71 図版24-71	深鉢	口縁部 破片	厚0.7	平縁/やや外傾	細沈線による三角文か/2本の 横位沈線文	橙/砂粒中量、 書母片少量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	340H
第52図72 図版24-72	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	平縁/外傾	内外面に横位沈線文	赤濁/砂粒中量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	340H

第40表 遺構外出土縄文土器一覧(3)

標頭番号 図版番号	部種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	形 式	出土遺構 出土位置
第52図73 図版24-73	深鉢	口縁部 破片	厚0.7	平縁/外傾	地文は単節L Rを縦位施文/口縁部直下に2本の横位沈線文	橙/砂粒・角閃石少量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	遺構外 (C-4)G
第52図74 図版24-74	深鉢	口縁部 破片	厚0.5	平縁/外傾	地文は単節L Rを横位施文/内面に口縁に沿って沈線施文	褐灰/砂粒中量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	遺構外 (B-3)G
第52図75 図版24-75	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	平縁/外傾	単節L Rを2段に横位施文/内面に口縁に沿って沈線施文	橙/砂粒・角閃石中量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	340H
第52図76 図版24-76	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	平縁/外傾し、口唇部で内側に屈曲	無文	にぶい橙/砂粒・角閃石中量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	1440D
第52図77 図版24-77	浅鉢	口縁部 破片	厚0.6	平縁/内湾	2本の横位沈線文/沈線文直下に単節L R?を施文	にぶい橙/砂粒中量、礫少量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	340H
第52図78 図版24-78	深鉢	胴部 破片	厚0.9	僅かに外傾	地文は単節L Rを横位施文/横位沈線文	にぶい橙/砂粒・角閃石少量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	1461D
第52図79 図版24-79	深鉢	胴部 破片	厚1.0	内傾	帯縄文/単節L Rを横位施文後、沈線施文	にぶい橙/砂粒・礫少量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	338H
第52図80 図版24-80	深鉢	胴部 破片	厚0.9	僅かに屈曲し立ち上る	低い隆帯/単節L Rを横位施文後、横位沈線施文	橙/砂粒・角閃石中量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	338H
第52図81 図版24-81	深鉢	胴部 破片	厚0.8	外傾	重四角文	にぶい橙/砂粒・角閃石中量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	338H
第52図82 図版24-82	深鉢	胴部 破片	厚1.0	外傾	斜位沈線文	にぶい黄橙/砂粒中量、角閃石・礫少量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	21P
第52図83 図版24-83	深鉢	胴部 破片	厚1.1	外傾	蛇行懸垂文	浅黄橙/砂粒中量・角閃石少量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	1457D
第52図84 図版24-84	深鉢	胴部 破片	厚0.9	外傾し、僅かに外反	細沈線文	明赤褐色/砂粒中量、角閃石少量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	48P
第52図85 図版24-85	深鉢	胴部 破片	厚0.9	僅かに外反	細沈線による斜格子目文	明赤褐色/砂粒中量、角閃石少量	縄文後期前葉 (堀之内2式)	1465D
第52図86 図版24-86	深鉢	口縁部 破片	厚0.6	平縁に双頭状の小突起/やや屈曲し、口唇部は直立	刻みのある横位の隆線文/隆線の上に突起のある横形の貼付文/横位・斜位の沈線文	黒濁/砂粒少量	縄文後期中葉 (加曾利B式)	遺構外 (B-3)G
第52図87 図版24-87	浅鉢	口縁部 破片	厚0.4	平縁に円形の小さな突起/外傾	内面に沈線文/沈線間に連続する浅い刻み	橙/砂粒・角閃石少量	縄文後期中葉 (加曾利B式)	340H
第52図88 図版24-88	深鉢	口縁部 破片	厚0.7	平縁/僅かに外反	外面は無文/内面に3本単位の横位沈線文	浅黄橙/砂粒・礫やや多量、角閃石少量	縄文後期中葉 (加曾利B式)	確認調査 (1Tr内)
第52図89 図版24-89	深鉢	口縁部 破片	厚0.5	平縁/外傾	沈線による区画文/区画内に単節L Rを横位施文/口唇部内面に斜位の刻み/内面に4本単位の横位沈線文	にぶい橙/砂粒中量、チャート少量	縄文後期中葉 (加曾利B式)	338H
第52図90 図版24-90	深鉢	口縁部 破片	厚0.6	平縁/外傾	外面に2本の沈線による横帯文/内面に4本単位の横位沈線文	灰濁/砂粒・角閃石少量	縄文後期中葉 (加曾利B式)	338H
第52図91 図版24-91	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	平縁/内傾	横帯文か/沈線後に単節L Rを斜位施文	橙/砂粒・礫を少量	縄文後期中葉 (加曾利B式)	38P
第53図92 図版24-92	深鉢	胴部 破片	厚0.5	やや外傾	横帯文/沈線区画内に単節L Rを充填施文	濁/砂粒中量、角閃石少量	縄文後期中葉 (加曾利B式)	338H
第53図93 図版24-93	深鉢	胴部 破片	厚0.5	外傾	3段の横帯文/単節L Rを横位施文	にぶい濁/砂粒・角閃石少量	縄文後期中葉 (加曾利B式)	遺構外
第53図94 図版24-94	深鉢	胴部 破片	厚0.7	外傾	刻みのある隆帯文/4本単位の平行沈線文	褐灰/褐色粒子上量、砂粒少量	縄文後期中葉 (加曾利B式)	遺構外
第53図95 図版25-95	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	平縁/僅かに外傾	口縁直下に数回E痕を伴う隆帯が巡る	灰黄濁/砂粒やや多量、角閃石・金雲母片中量	縄文後期 (新製土器)	遺構外

第40表 遺構外出土縄文土器一覧(4)

検出番号 図版番号	形種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土遺構 出土位置
第53図96 図版25-96	深鉢	口縁部 破片	厚 0.7	平縁/外積	口縁直下に指頭圧痕を作る隆帯が広がる/条線文/内面に口縁に沿って比線施文	にふいぬ/砂粒・角閃石・金雲母片・石英少量	縄文後期 (粗製土器)	遺構外
第53図97 図版25-97	深鉢	口縁部 破片	厚 0.7	平縁/外積	口縁直下に指頭圧痕を作る隆帯が広がる/条線文/内面に口縁に沿って比線施文	にふいぬ/砂粒・角閃石中量	縄文後期 (粗製土器)	338 H
第53図98 図版25-98	深鉢	口縁部 破片	厚 0.6	平縁/口唇部が内側に肥大	斜位の条線文/口縁に沿って連続爪形文、横位比線文	にふいぬ/砂粒・角閃石中量、礫少量	縄文後期 (粗製土器)	確認調査 (3Tr内)
第53図99 図版25-99	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	やや外積	斜格子目文	にふいぬ/砂粒中量	縄文後期 (粗製土器)	遺構外
第53図100 図版25-100	深鉢	胴部 破片	厚 0.8	やや外積	斜格子目文	にふいぬ/砂粒中量、角閃石・礫少量	縄文後期 (粗製土器)	遺構外
第53図101 図版25-101	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	やや外積	地文は単節LRか/斜格子目文	灰濁/砂粒中量	縄文後期 (粗製土器)	遺構外 (B-3)G
第53図102 図版25-102	深鉢	口縁部 破片	厚 0.9	外積	斜格子目文/内面に口縁に沿って比線施文	明赤褐色/砂粒・褐色粒子中量	縄文後期 (粗製土器)	遺構外
第53図103 図版25-103	深鉢	胴部 破片	厚 0.5	僅かに内湾	組線文/横位の条線文	黄褐色/砂粒・角閃石中量	縄文後期 (粗製土器)	340 H
第53図104 図版25-104	深鉢	胴部 破片	厚 0.6	僅かに内湾	縦位の条線文	にふいぬ/砂粒・角閃石中量	縄文後期 (粗製土器)	遺構外
第53図105 図版25-105	注口土器	注口部	長 4.3 幅 2.0 厚 0.6	筒状の注口/僅かに反る	無文	にふいぬ/砂粒やや多量、角閃石少量	縄文後期	1465 D
第53図106 図版25-106	深鉢	胴部 破片	厚 0.7	外積	地文は単節RLをやや斜位施文	にふいぬ/砂粒中量、礫少量	縄文後期	確認調査 (3Tr内)
第53図107 図版25-107	深鉢	底部～ 胴部破片	高 11.5	平底/胴部は直立	底面に網代痕	にふいぬ/砂粒中量	縄文後期	48 P
第53図108 図版25-108	深鉢	底部～ 胴部破片	高 4.7 底 11.2	平底/胴部は外積	底面に網代痕	にふいぬ/砂粒・角閃石中量	縄文後期	340 H
第53図109 図版25-109	深鉢	底部～ 胴部破片	高 3.8 底 7.8	平底/胴部は外積	底面に網代痕	浅黄褐色/砂粒・角閃石少量	縄文後期	340 H

第40表 遺構外出土縄文土器一覧(5)

検出番号 図版番号	種別	遺存状態	長さ/幅/厚み (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	時期 型式	出土遺構 出土位置
第53図110 図版25-110	土器片鏝	60%	4.0/3.7/1.0	18.8	不整の方形/抉部1か所/縦線やや摩耗/比線文が施され、比線間に刺突文	浅黄褐色/砂粒・角閃石少量	縄文後期前葉 (堀之内1式)	34 P
第53図111 図版25-111	土器片鏝	60%	4.7/3.0/1.1	14.5	不整の方形/抉部1か所/縦線やや摩耗/口縁部片を使用/地文は無節Lを横位施文	明赤濁/砂粒中量、角閃石少量	縄文中期後葉 (加曾利E式)	遺構外
第53図112 図版25-112	土器片鏝	80%	3.6/3.0/0.9	10.1	左側縁が挟まれる三角形/抉部1か所/縦線摩耗顕著/無文	にふいぬ/砂粒中量、角閃石少量	縄文中期	1465 D

第41表 遺構外出土縄文時代土製品一覧

探検番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	形製 型式	出土遺構 出土位置
第53図113 図版25-113	甕	口縁部 破片	厚0.5	口脣部に形みなし/ 口縁部は外反する	内外面:口縁部は横ナデ、以 下はハケ目調整	淡茶褐色/黄褐色粒子 ・褐色粒子・茶褐色 粒子や中多量、砂粒 少量	弥生後期～ 古墳前期	遺構外 (A-3)G
第53図114 図版25-114	甕	口縁部 破片	厚0.5	口脣部にハケ状工具 による刻みあり/口 縁部は外反する	内外面:ハケ目調整	淡茶褐色/黄褐色粒子 多量、砂粒を少量	弥生後期～ 古墳前期	340H 野蔵穴
図版25-115	須恵器 坏	底部 破片	高 1.2	高台付	ロクロ成形/底面は全面へう 削り	灰白/砂粒・礫粒少量	平安時代	1452D
図版25-116	須恵器 甕	口縁部 破片	厚0.6	複合口縁/外反する	ロクロ成形/口脣部の内外面 に自然釉/東金子窯産か	灰/砂粒少量	平安時代	40P
図版25-117	須恵器 甕	胴部 破片	厚0.7	内溝	ロクロ成形/外面に自然釉/ 東金子窯産か	灰/砂粒中量	平安時代	340H
図版25-118	須恵器 甕	胴部 破片	厚0.7	外積	外面:平行叩き目/東金子窯 産か	灰/砂粒少量	平安時代	1453D

第42表 遺構外出土弥生時代後期～平安時代土器一覽

探検番号 図版番号	種別	器種	法量 (cm)	製作の特徴等	推定産地	時期	出土位置
図版25-119	磁器	碗	厚0.4	染付/外面:草花文/口縁部～体部小破片	肥前系	近世 (18c)	遺構外 (B-3)G
図版25-120	磁器	碗	厚0.5	染付/外面:草花文/体部小破片	肥前系	近世 (18c)	遺構外
図版25-121	陶器	皿	厚0.6	三島手/内外面に透明釉/胎土:色調はにじみ赤褐色 ・砂粒を含む/口縁部小破片	唐津	近世 (18c)	遺構外
図版25-122	陶器	摺鉢	厚0.9	内外面に鉄釉/器目6本以上一単位/胎土:淡黄色、 砂粒、石英を含む/体部小破片	瀬戸・美濃系	中世 (16c)	遺構外 (A-4)G

第43表 遺構外出土陶磁器一覽

探検番号 図版番号	種別	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第53図123 図版25-123	土製品	箱庭道具か	2.8	2.6	1.2	8.0	ボタン状で裏面には剥離面が吸着/キ/ニコを乗った ものであれば、笠の部分は残存し、柄・石突き部分 は欠損する/表面は白い釉にへう書き調整/色 調は明赤褐色/砂粒・角閃石を少量含む	340H
第53図124 図版25-124	銅製品	煙管吸口	2.5	1.0	0.8	2.4	吸口径0.6cm/羅字径0.9cm/完形品	遺構外
第53図125 図版25-125	鉄製品	釘	4.6	0.5	0.5	2.1	頭部の幅は0.8cm/断面形は長方形/上下両端部を 欠損	遺構外 (A-4)G
第53図126 図版25-126	鉄製品	釘	2.6	0.4	0.6	2.2	頭部の幅は0.6cm/断面形は長方形/先端部を欠損	遺構外 (C-4)G
第53図127 図版25-127	鉄製品	釘	3.2	0.6	0.6	3.1	頭部の幅は0.7cm/断面形は長方形/先端部を欠損	遺構外

第44表 遺構外出土土製品・金属製品一覽

探検番号 図版番号	銭貨名	外径 (cm)	方孔一辺 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	初鋳年	遺存状態	備考	出土位置
第53図128 図版25-128	不明	2.5	0.6	0.1	2.0	—	ほぼ完形	全体に擦り減り、遺存状態は不良	遺構外

第45表 遺構外出土銭貨一覽

第4章 自然科学分析

第1節 城山遺跡第102地点の炭化材の樹種同定

1. はじめに

志木市の城山遺跡第102地点から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、同一試料において放射性炭素年代測定も行われている（第4章第2節参照）。

2. 試料と方法

試料は339号住居跡カマドから出土した炭化材1点（炭1）である。調査所見による遺構の推定時期は、奈良時代（8世紀後葉）である。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VHX-D510）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3. 結果

樹種同定の結果、広葉樹のクワ属であった。結果を第46表に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

遺 構	No.	位 置	樹 種	木取り	残存径	年輪数	時 期
339号住居跡	炭1	カマド内	クワ属	みかん割り状	半径1.5cm	3	奈良時代（8世紀後葉）

第46表 樹種同定結果

・クワ属 *Morus* クワ科 図版26-1 1a-1c（炭1）

大型で丸い道管が年輪のはじめに配列し、晩材では徐々に径を減じた小道管が単独もしくは数個複合して斜線方向に配列する半環孔材である。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織は周囲状から翼状となる。放射組織は3～5列幅で、上下端の1～2細胞が直立もしくは方形細胞である異性である。

クワ属は亜熱帯から温帯に分布する落葉高木で、ケグワとマグワ、ヤマグワなどがある。材は堅硬で、韌性に富む。

4. 考察

339号住居跡カマドから出土した炭化材（炭1）は、クワ属であった。カマドから出土しており、燃料材と推測される。クワ属は日当たりの良い環境に生育する陽樹であり、遺跡周辺に生育していた樹木が、燃料材として利用されたと推測される。

【参考・引用文献】

平井信二 1996『木の百科』394p 朝倉書店

伊東隆夫・山田昌久編 2012『木の考古学—出土木製品用材データベース—』449p 海青社

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 2011『日本有用樹木誌』238p 海青社

第2節 城山遺跡第102地点出土炭化材の放射性炭素年代測定

1. はじめに

城山遺跡第102地点より出土した炭化材の年代を明らかにするために、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料において樹種同定も行われている（第4章第1節参照）。

2. 試料と方法

測定試料は、339号住居跡カマドから出土した炭化材1点である。測定試料の情報、調製データを第47表に示す。調査所見による遺構の推定時期は、奈良時代（8世紀後葉）である。この炭化材は最終形成年輪が残存しておらず、部位不明であった。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-51765	城山遺跡第102地点 遺構：339号住居跡 試料No.炭1	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム： 1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）

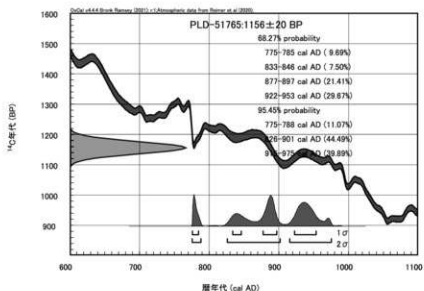
第47表 測定試料および処理

3. 結果

第48表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、第54図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-51765 試料No.炭1	-28.78 ± 0.20	1156 ± 20	1155 ± 20	775-785 cal AD (9.69%) 833-846 cal AD (7.50%) 877-897 cal AD (21.41%) 922-953 cal AD (29.67%)	775-788 cal AD (11.07%) 826-901 cal AD (44.49%) 915-975 cal AD (39.89%)

第48表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果



第54図 暦年較正結果

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期5730 \pm 40年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.4 (較正曲線データ: IntCal20) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

暦年較正結果のうち、 2σ 暦年代範囲 (確率95.45%) に注目すると、775-788 cal AD (11.07%)、826-901 cal AD (44.49%)、915-975 cal AD (39.89%) の暦年代範囲を示した。これは奈良時代～平安時代中期に相当し、試料の推定時期である奈良時代 (8世紀後葉) を含んでいる。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。今回の試料は、最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

【参考文献】

- Bronk Ramsey, C. 2009『Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon』51(1) 337-360
- 中村俊夫 2000『放射性炭素年代測定法の基礎』『日本先史時代の¹⁴C年代』日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編3-20 日本第四紀学会
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. 2020『The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP)』『Radiocarbon』62(4) 725-757 doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

第3節 城山遺跡第102地点から出土した炭化種実

1. はじめに

埼玉県志木市柏町3丁目に所在する城山遺跡は、旧石器時代から近世の複合遺跡である。ここでは、第102地点の古墳時代後期（6世紀末葉）と奈良時代（8世紀後葉）の住居跡から出土した炭化種実の同定を行い、当時利用された種実について検討した。

2. 試料と方法

試料は、水洗済みの4試料で、第102地点の古墳時代後期（6世紀末葉）の340号住居跡から出土した土師器甕形土器（340H-4）内の土壌2試料と土師器甕形土器（340H-2）内の土壌1試料、奈良時代（8世紀後葉）の339号住居跡から出土した土師器甕形土器（339H-8）内の土壌1試料である。土壌の採取から水洗までの作業は、志木市教育委員会によって行われた。試料の水洗は、ウォーターセパレーション法で行われた。各試料の水洗量は表を参照されたい。

種実の同定・計数は肉眼および実体顕微鏡下で行い、写真撮影は実体顕微鏡で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。イネの籾殻は、小穂軸が残っている場合に1個体とした。小穂軸以外の籾殻は、おおよその数を記号(+)で示した。

3. 結果

同定した結果、草本植物のイネ炭化籾殻とキビ炭化種子（穎果）、アワ炭化種子（穎果）、オオムギ炭化種子（穎果）、イネ科炭化種子（穎果）、マメ科炭化種子、ヤナギタデ炭化果実、サナエタデーオオイヌタデ炭化果実の8分類群が見いだされた。このほかに、状態が悪く、科以上の細分に必要な識別点が残存していない一群を、同定不能炭化種実とした。また、未炭化の種実（クワクサ種子とアカザ属種子、ザクロソウ種子）も得られたが、遺跡の立地を考慮すると古墳時代や奈良時代当時の生の種実とは違

存しないと判断されるため、後世の混入物と判断した(第49表)。

以下に、炭化種実の産出傾向を時期ごとに、遺構および試料No.別に記載する。

[古墳時代後期(6世紀末葉)]

340号住居跡(340H-4):イネとキビ、アワ、イネ科、マメ科、ヤナギタデ、サナエタデーオオイヌタデがわずかに得られた。

340号住居跡(340H-2):イネとアワ、オオムギ、マメ科、サナエタデーオオイヌタデがわずかに得られた。

[奈良時代(8世紀後葉)]

339号住居跡(339H-8):同定可能な炭化種実は得られなかった。

次に、得られた主要な分類群の記載を行い、図版26-2に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田(2003)に準拠し、APG IIIリストの順とした。

(1) イネ *Oryza sativa* L. 炭化粳穀 イネ科

完形ならば上面観は楕円形、側面観は長楕円形。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。残存長1.3mm、残存幅1.1mm。

(2) キビ *Panicum miliaceum* L. 炭化種子(穎果) イネ科

側面観は円形~卵形で、先端がやや窄まる。断面は片凸レンズ形で、厚みがある。胚の長さは全長の1/2程度と短く、幅が広いうちわ型。長さ1.6mm、幅1.6mm。

(3) アワ *Setaria italica* (L.) P.Beauv. 炭化種子(穎果) イネ科

上面観は楕円形で、側面観は円形に近い。腹面下端中央の窪んだ位置に、細長い楕円形の胚がある。胚の長さは全長の2/3程度。種子は、長さ1.1mm、幅1.2mm。

(4) オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化種子(穎果) イネ科

上面観は長楕円形、側面観は楕円形。腹面中央部には上下に走る1本の溝がある。側面観で最も幅の広い部分が中央付近にある。背面の中央部下端には三角形の胚がある。残存長3.6mm、幅1.9mm。

		(括弧内は破片数)			
		339号住居跡		340号住居跡	
		339H-8	340H-4 No.1	340H-4 No.2	340H-2
		奈良時代 (8世紀後葉)		古墳時代後期 (6世紀末葉)	
分類群	部位/水流量(g)	333.5	1813.5	1583.5	1973.5
イネ	炭化粳穀			1	3 (*)
キビ	炭化種子(穎果)			1	
アワ	炭化種子(穎果)			3	2
オオムギ	炭化種子(穎果)				1
イネ科	炭化種子(穎果)		1	1	
マメ科	炭化種子			3	2
ヤナギタデ	炭化果実			1	
サナエタデーオオイヌタデ	炭化果実		1		2
同定不能	炭化種実		(9)	(3)	(9)
未炭化					
タワクサ	種子	14	1		
アカザ属	種子	10	3	4 (1)	2
ザクロソウ	種子	1	1	3	12 (1)

*1-9

第49表 城山遺跡第102地点から出土した炭化種実

(5) イネ科 Poaceae spp. 炭化種子 (穎果) イネ科

扁平な楕円体で、両端がやや尖る。下端に全長の1/2未満の長さの胚がある。種子は、長さ0.8mm、幅0.5mm。

(6) マメ科 Fabaceae spp. 炭化種子 マメ科

変形しており、完形ならば上面観は楕円形、側面観はいびつな楕円形。ほぼ中央に楕円形の臍の痕跡がある。表面は粗く、木質。長さ2.2mm、残存幅2.0mm (図版26-2-6)、長さ1.9mm、残存幅1.8mm (図版26-2-7)。

(7) ヤナギタデ *Panicum hydropiper* (L.) Delarbre 炭化果実 タデ科

変形しており、完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は広卵形。表面には細かい網目状隆線がある。長さ1.5mm、残存幅1.1mm。

(8) サナエタデーオオイヌタデ *Panicum scabra* (Moench) Mold.-Plapathifolia (L.) S.F.Gray 炭化果実 タデ科

上面観は扁平で両凸レンズ形、側面観は広卵形で先端が尖る。表面は平滑。残存長1.6mm、幅1.2mm。

4. 考察

340号住居跡の土器(340H-4、340H-2)内の土壌からは、栽培植物のイネやキビ、アワ、オオムギが得られた。埋没前から土器に入っていた可能性もあるが、土器に入り込んだ堆積物に、何らかの要因で燃えた後のイネやキビ、アワ、オオムギが含まれていた可能性も考えられる。また、野生植物のイネ科とマメ科、ヤナギタデ、サナエタデーオオイヌタデも得られているが、これらは偶発的に炭化し、堆積物に混ざったと考えられる。

339号住居跡の土器(339H-8)内の土壌からは、同定可能な炭化種実は得られなかった。

【引用文献】

米倉浩司・榎田 忠 2003『BG Plants 和名-学名インデックス (YList)』<http://ylist.info>

第5章 調査のまとめ

第1節 中野遺跡第85地点の調査成果

本地点からは、縄文時代後期の住居跡1軒（4J）・弥生時代後期の住居跡1軒（3Y）、中世以降の土坑3基（114～116D）などが検出された。

ここでは、縄文時代後期の遺構・遺物、弥生時代後期の遺物について、若干のまとめを行うこととする。

（1）縄文時代後期初頭の4号住居跡について

①出土土器について（第10図）

4Jについては称名寺式土器が主体的に出土したことから後期初頭とした。ここでは4Jの時期をより詳細に考察するため、3大別7細分の段階編年（石井 1992、鈴木 2007、小澤 2016）を参照し、出土土器の編年の位置付けを考えてみたい（註1）。

1は床面直上から出土し、復元個体となった土器である。胴部下半を欠損するが、口縁部から胴部上半で帯縄文による渦巻文が施され、そのまま胴部上半から下半に文様帯が連結している。石井 寛氏の言う「縦位構成2段階J字文類型」（石井 1992）に分類される。文様の下端は不明であるが、称名寺式中段階の第5段階の特徴とする文様部分の複雑化や全体構成の乱れ（石井 1992、小澤 2016）は見られないと思われる。よって、1は称名寺式中段階の第4段階に位置付けられよう。

2は埋壘である。2の文様構成は特異なもので、横位区画内に縄文を充填施文後、縦位沈線が施されており、また、胴部上部から縦位沈線が横位区画と連結している。このような土器は、管見の限り、称名寺式土器、加曾利E式土器においても現時点では類例を確認できていない。よって、本報告では2を後期初頭とするのみで留めた。住居の時期を示すものとしては埋壘が重要となるため、今後、類例をもって編年の位置付けを検討していく必要がある。

17は垂下降帯文が施される土器であり、垂下降帯文類型は古段階では事例が少なく、第4段階に至って急増するとされている（石井 2016）。9は口唇部内面が肥厚し、波状把手の波頂部に「O」字状の降帯が施され、帯縄文が弧状に連結するものであり、石井氏による「闊沢類型」（石井 1992）と考えられ（註2）、称名寺式期においては安定的に存在する類型とされる。なお、第5段階から認められる列点文は、今回の出土土器の中にはなかった。

以上の土器様相から、4J出土の称名寺式土器は第4段階で捉えられそうである。

また、覆土中には加曾利E4式とした土器（第10図3～8）が一定の割合で出土している。これらは称名寺式土器と共存するのであれば、いわゆる「加曾利EV式」（石井 1992）と呼称されるものである。しかし、破片資料のため詳細については不明であるが、周辺地域における中期末葉から後期初頭における土器様相を捉えるにあたり、これらの位置付けは今後の課題となるだろう。

②柄鏡形敷石住居の礫について

4 Jは住居形態および大小の礫が壁際の周縁に帯状にまとまって検出された状況から柄鏡形敷石住居と考えられる。また、礫の接合関係（接合個体1～4）があり、特に炉石と住居内の分割礫との接合（接合個体2）が認められたことは大きな成果である。

都築恵美子氏は、柄鏡形住居の敷石の検出状況を4つに分類している（都築 2013）。Ⅰ類：全面あるいはほぼ全面に石が敷かれているもの、Ⅱ類：炉周辺や柄部に限られているもの、Ⅲ類：柱穴に沿って小礫が巡るもの、Ⅳ類：敷石や配石がないもの。4 Jは都築氏の分類のⅢ類に該当する。同様な検出状況としては、近隣では、称名寺式期の埼玉県富士見市氷川前遺跡第18地点（早坂・堀 2001）の第7号住居跡（7 J）が挙げられる（第55図上段中央）。また、加曾利E4式期ではあるが、埼玉県ふじみ野市東台遺跡第11地点20号住居址（坪田 1987）も挙げられよう（第55図上段右）。

4 Jは都築氏の分類のⅢ類としたが、敷石住居の形成過程を踏まえた場合、今回の礫の検出状況はどのように捉えられるであろうか。氷川前遺跡第18地点7 Jでは、礫が覆土中に浮いていることから、床面に敷いたものではなく、周堤を構成する要素であったものが住居廃絶後に流れ込んだと推定している（早坂・堀 2001）。一方で、東京都府中市武蔵台東遺跡（坂東・坂詰・早川ほか 1999）では、超大形の礫で全面的に敷石がなされる住居跡（J10・17・56号住居跡）と、住居主体部に礫が散在する住居跡（J8・35・71号住居跡）、住居主体部の周縁に大小の礫が配置される住居跡（J63・80号住居跡）があり（第55図中・下段）、都築氏はいずれも敷石住居として機能していたと想定し、超大形の礫が面的に敷かれていない住居（J8・35・63・71・80号住居跡）の廃棄後、これらの住居の超大形の礫の敷石を抜き取り、J10・17・56号住居跡を構築時に再利用したと考えている（都築 2013）。

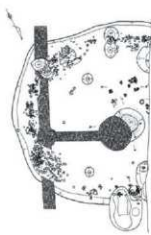
4 Jの礫の分布状況を見ると、多くの礫は主体部壁際の周縁に分布し、覆土中～上層からの出土が多いが、400 gを超える拳大～人頭大の礫は床面直上、あるいは覆土下層から出土している。また、奥壁部に位置する大形礫は床面直上に南北方向に一列に並んでおり、その大形礫の周囲や上面には小形の礫が積み重なっていた。このような礫の出土状況は武蔵台東遺跡J63・80号住居跡の状況に近い（第55図中段）。

また、今回認められた礫の接合関係からは接合個体2が炉石の礫と覆土中の礫が接合しており、大形礫の分割した後、分割礫を炉石として炉に設置、東・西・北側の壁付近に設置したものと考えられる。接合個体3も同様に大形礫の分割後、東・北側の壁付近に分割礫を設置している。東台遺跡20号住居址でも、住居主体部から2点、張出部から1点出土した石皿の分割礫が接合しており、分割礫を各所に配置させていると考えられる（坪田 1987）。

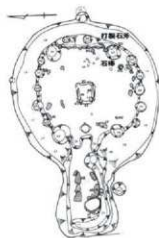
上記から4 Jの礫は住居廃絶後の流れ込みと想定するよりも、設置されたもの、つまり敷石・配石として捉えることにしたい。しかし、実際に礫が床面状に敷き詰められていたかは、判断が難しい。武蔵台東遺跡のように、敷石の礫が抜き取られ、新しい別の住居に転用された可能性もある。また、柄鏡形敷石住居の構築については周辺の石材環境に左右される（都築 2013）ため、その点を念頭と考えていく必要がある。4 Jの礫は砂岩、頁岩、チャート、ホルンフェルス・閃緑岩であり、圧倒的に砂岩が多かった。サイズは大きい礫でも人頭大程度である。閃緑岩以外の礫は遺跡の北西に流れる柳瀬川で採取可能なものであろう。採取できる礫サイズによっては、壁付近に配石するのみの住居の可能性も考えられる。今後、柳瀬川の石材調査と4 J出土の礫との比較分析が必要となろう。



志木市中野遺跡
第85地点4号住居跡



富士見市水川前遺跡
第18地点7号住居跡



ふじみ野市東台遺跡
第11地点20号住居址



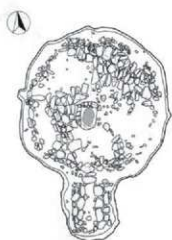
J8号住居跡



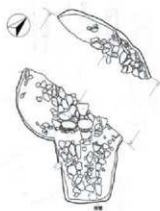
J63号住居跡



J80号住居跡



J10号住居跡



J17号住居跡



J56号住居跡

府中市武蔵台東遺跡



第55図 柄鏡形敷石住居の事例 (1/100)

③住居内の剥片・碎片の集中部について

今回の4Jの調査では剥片・碎片の集中部を確認することができた。集中部は張出部側から見た場合、炉の左側、P5周辺に位置する。垂直分布では、覆土下層から上層にかけて出土しているが、特に覆土下層から中層にかけての出土が多いようである。剥片・碎片は黒曜石が主体であり、集中部の周辺から黒曜石製の石鏃未製品(第11図18)が出土していることから、住居内で石鏃製作が行われていたと考えられる。

次に、柄鏡形住居内で剥片・碎片の集中部が検出されている事例を挙げる。埼玉県さいたま市会ノ谷遺跡第34号住居跡では、黒曜石、チャートの剥片・碎片および黒曜石製の石鏃未製品が出土しており、石器の分布状況としては、特に張出部から連結部付近にかけて集中している(青木・小倉・柳田1996)。埼玉県入間市坂東山遺跡第3号敷石住居跡では、連結部の敷石下面、対ピットの上面から多量の黒曜石・チャートの碎片が小範囲に集中し、石鏃も出土している(谷井1973)。東京都小金井市前原遺跡4号住居跡では、炉の付近で多量の黒曜石の剥片・碎片が出土している(小田・伊藤・Kelly1976)。

上記の事例より、剥片・碎片の集中部が主体部と張出部との間の連結部付近や炉の付近で検出されていることから、住居内において、その場で石器製作が行われていたと考えられる。会ノ谷遺跡第34号住居跡では主体部奥壁部は調査区外であり不明であるが、主体部奥壁部では剥片・碎片の石器集中部は検出されていない。多くの事例を集成する必要があるが、このことは住居の空間利用に関わる問題と考えられる。また、礫との関係については、坂東山遺跡第3号敷石住居跡の例があり、敷石前に石器製作が行われたのかどうか、非常に興味深い。

4Jを含めこれらの事例は、住居内での行動や空間利用を示すものとして貴重な事例と言える。

(2) 弥生時代後期の3号住居跡について(第17図、図版10-2)

3号住居跡については、隣接する第9地点において、すでに住居西半部の調査が終了し、報告されている(尾形1990)。今回は、その東半部が検出されたことから、本報告では、第9地点の調査分と統合し報告するものである。ここでは、遺物の内容についても再確認し修正を加えた上で、考察を加えることとする。

また、今回の調査では、新たに出土したものはなく、第9地点の出土遺物と全く同じ資料を掲載した。器種構成として、2~4は壘形土器、1・5~7は壘形土器である。今回の報告にあたっては、すべての資料を見直し、1は再実測、2~7は再拓本を行い再掲載したものである。

特に第9地点において、1の台付壘の内容に大きな間違いがあったため、修正点をまとめ、さらに3号住居跡の時期については、「弥生時代末葉~古墳時代初頭」として、細かな設定がされていなかったため、3号住居跡の詳細時期の設定を試みることにした。

まず、1の台付壘の脚台部の内容であるが、第9地点においては、調整の記述で、「内面はヘラナデ、外面は摩耗しているが、ハケ目痕がみられる」とし、実測図に僅かにハケ目痕を記入したにすぎなかった。しかし、これについては、再確認した結果、外面のハケ目痕が不明瞭な要因は、摩耗しているためではなく、脚台部の外面全体にハケ目調整後、指頭による押捺が加えられることにより、不明瞭なものとして認識されたものであった。そのため、今回の実測図では外面に指頭押捺を加え修正し、内面にはヘラナデが表現されていなかったため、加えることにした。

次に3号住居跡出土土器についての特徴と時期について考えることとしたい。

壺形土器については、2が口縁部破片で、幅広複合口縁で、外面複合部には4本の棒状貼付文が付されるものである。3は口縁部破片で、単純口縁で口唇上端部にR Lの単節斜縄文が施文されるものである。4は胴部上半から中位にかけての破片で、胴部文様帯には単節斜縄文を上下羽状に4段構成させ、最下段には端末結節文を伴うものである。

甕形土器については、1が前述したとおりに脚台部の外面全体に指頭押捺が施され、そのためにハケ目調整はほとんど消去されているものと考えられる。脚台部の外面全体に指頭による成形痕が残る土器としてはS字甕があるが、S字甕の指頭押捺については、成形痕であり、この土器はハケ目調整後に施されているため、S字甕の仕様とは異なるものとしての認識である。ハケ目調整の仕上げの痕跡を敢えて指頭により広い範囲を消去することは、土器作りの製作過程で偶然に付いた指頭の痕跡とは考えにくいものがある（尾形 2024）。5～6はすべてハケ甕の破片である。特徴として、7の頸部には横ナデが施されている。

以上の内容について、西原大塚遺跡第70・72点における土器変遷（尾形 2023・2024）を参考にすることにすると、壺形土器は2のような幅広複合口縁をもつ土器を伴い、4のような胴部文様帯には単節斜縄文を上下羽状に4段構成させ、最下段には端末結節文を伴うような無文化が見られない特徴であること、甕形土器は7のような頸部が屈曲しないタイプが存在し、ナデ甕が見られないことから、全体的に未だ弥生時代在来の特徴を強く残している様相と言えるであろう。

以上のことから、3号住居跡出土土器については、西原大塚遺跡第70・72地点の2期（弥生時代後期末葉）に相当するものである。

第2節 城山遺跡第102地点の調査成果

本地点からは、縄文時代後期の掘立柱建築遺構（13T）、古墳時代後期の住居跡（340H）、奈良時代の住居跡1軒（339H）、平安時代の住居跡1軒（338H）、中世以降の土坑27基（1437～1443・1445～1448・1451～1468D）・溝跡1本（M）などが検出された。

ここでは、良好な資料と考えられる古墳・奈良時代の遺物について、若干のまとめを行うこととする。

（1）古墳時代後期の出土遺物について

340号住居跡出土遺物（第31図、図版20～4）

本住居跡から出土した遺物は、土師器環・甕・甔形土器、鉄製品（釘）、石製品であり、その他としては穿孔貝果穴痕跡泥岩がある。ここでは、土師器について時期を考えることとしたい。

まず、環形土器については、1点のみで、1はいわゆる比企型環（以下、比企型環）（水口 1989、尾形 1999）である。胎土は淡黄橙色を呈しており、赤褐色を呈する胎土の入間系土師器（尾形 2008）とは異なる。推定口径は12.2cm、器形は塊状であるが扁平化し、口縁部内面に沈線が施されていないことが特徴である。志木市の土師器編年（尾形 2000）では、10期（6世紀末葉）に「扁平なものに変化したものの、口径値はそのままでも体部にも稜が出現していないという塊状の基本形」（尾形

1999)の比企型環が存在する。1は口径値がやや小さいが、器形の特徴、口縁部内面に沈線がないことから、10期(6世紀末葉)に位置付けられよう。

土師器壘形土器は、2・3で、口縁部から底部まで観察できる2を基準とする。2は口縁部が外反し弓状の形態で、胴部が長く緩やかに膨らみ、最大幅が胴部中位に位置する土器である。また、内外面にヘラ磨き調整が施され、特に外面には顕著である。これらの特徴は、尾形氏の分類のF1a類(尾形2001)に対応できよう。志木市の土師器編年(尾形2001)では、F1a類は5期(5世紀末葉)には確認され、9・10期(6世紀後葉・末葉)に主体的となる。2は胴部の長胴化や口縁部の弓状の形態から、新しい段階の9・10期(6世紀後葉・末葉)に位置付けることが妥当であろう。

土師器壘形土器の4は、筒抜け式の底部で、単純口縁を呈し、胴部は膨らみがなく底部に向かって窄まる形態である。土器の内外面には、ヘラ磨き調整が顕著に施される。志木市の土師器編年(尾形2001)に照らし合わせると、上記の土器の形態的特徴からB1c類に分類され、10・11期(6世紀末葉・7世紀初頭)に位置付けられる。

以上から、本住居跡出土土器は、各器種の時期が一致する6世紀末葉に位置付けられる。

(2) 奈良・平安時代の住居跡出土土器について

339号住居跡出土遺物(第37図、図版-21-2、図版22-1)

本住居跡から出土した遺物をまとめると、1は須恵器環形土器、2・3は土師器環形土器、4～9は土師器壘形土器、10は土製支脚、11・12は鉄製品で、11は刀子、12は鎌である。

ここでは、1～9の須恵器と土師器について、時期と考える事項をまとめることとする。

まず、1の須恵器環形土器については、胎土中に白色針状物質を含むことから、南北比企窯跡である鳩山製品(渡辺1990a・1990b・2007)と考えられる。器高4.5cm・口径13.2cm・底径8.8cmであり、底部には全面回転ヘラ削りが施されている。時期については、鳩山Ⅲ期中葉の基準となる口径13.5cm前後よりやや小型であることから、鳩山Ⅲ期後半の8世紀後葉と考えるのが妥当であろう。

次に、土師器については、2・3が環形土器、4～9は壘形土器である。

2・3の土師器環形土器は赤色系土師器で、いわゆる比企型環(以下、比企型環)(水口1989・尾形1999)である。2点ともに胎土の色調が赤褐色であることから、入間系土師器(尾形2008)と考えられる。2の特徴としては、口径11cm前後で内外面に赤彩が施され、内面口唇部直下に沈線がまわる特徴から、定型化した比企型環の小型化が見られるタイプである。3の有段環タイプは、口縁部と底部との境に段をもつことから、水口由紀子氏の「B系列」(水口1989)、埼玉県蓮田市荒川附遺跡おける富田和夫氏の「続比企型模倣環」(富田2007)と呼ばれるもので、入間系土師器の分類では、A6類(尾形2008)に該当する。比企型環の消滅時期については、水口編年(水口1989)では、Ⅳ期(7世紀中頃)以降の7世紀後半以降は不明であり、志木市の土師器編年(尾形2000)では、14期(7世紀後葉)を比企型環の最終段階とし、以降は不明な状況である。また、荒川附遺跡では、Ⅵ期(8世紀初頭～前半)で続比企型環の「出土数は減少傾向にあるが、まだ、定量で出土する」とあるが、次段階Ⅶ期(8世紀後半～9世紀初頭頃)には消滅している状況にあると理解できる。そのため、通常であれば、比企型環は8世紀以降に消滅する方向で認識されるところであるため、7世紀後半～8世紀初頭の範疇に位置付けられるものである。

次に土師器壘形土器については、4・5は壘形土器でも胴部が球状と呈することから丸壘に区分され

るもので、これらは在地系土師器（尾形 2005・2006）と考えられる。一方、6～9はいわゆる武蔵型甕（以下、武蔵型甕）（福田 1981、桜岡 2003）である。前者の在地系土師器については、前述した比企型環と同様に現在、志木市の土師器編年（尾形 2001）においては15期（7世紀末葉～8世紀初頭）までは把握できそうであるが、後者の武蔵型甕との共伴例は皆無であることから、今までの認識では、武蔵型甕の出現は、8世紀中葉以降と考えられていたものである。

武蔵型甕の特徴としては、まだ口縁部が「コ」の字口縁ではなく、胴部上半の張りがやや強く、口縁部が「く」の字状を呈し、胴部が倒卵形である。この特徴は、埼玉県所沢市東の上遺跡におけるIV期（8世紀後半）に比定され（根本 1999）、この段階において、古墳時代後期的な甕形土器は共伴していることも確認できた。

つまり、前述した、古墳時代後期的な土師器環・甕形土器については、8世紀初頭を最新の時期に位置付けたいところであるが、これでは、8世紀後葉と考えられる1の須恵器環形土器と6～9の武蔵型甕の年代観が矛盾することになってしまう。そのため、土師器環・甕形土器の時期を設定するためには、従来の志木市の土師器編年等を使用することは難しいと考えられるため、ここで埼玉県坂戸市金井遺跡（昼間 1989）における土師器編年を対比させ考えたい。

これによると、比企型環（環A）は、第VI期（8世紀第3四半期～第4四半期）をもって消滅するものとまとめられていることから、本住居跡から出土した比企型環は8世紀全般にわたり存続することで、ひとまず存続幅を理解できるものである。

ここで、武蔵型甕の年代観と前述した1の須恵器環形土器の時期の一致、さらに比企型環、在地系土師器の存続幅に大きく矛盾しないことがわかったことになる。

今回の339Hの出土土器を通して重要なことは、古墳時代後期的な土師器環形土器（2・3）、土師器甕形土器（4・5）と奈良時代的な須恵器環形土器（1）、武蔵型甕（6～9）の共伴例は、志木市では今までないことであり、特筆すべきことと考える。

本住居跡出土土器を理解する上では、古墳時代後期的な考えで言えば、前者の土器は志木市の土師器編年の15期（8世紀初頭）を最新としたものであるが、奈良時代的な考えで言えば、後者の土師器甕形土器は、武蔵型甕であることから、最古段階の8世紀中葉以降としたものである。しかし、ここで重要視しなければならないのが、やはり1の須恵器環形土器と武蔵型甕の年代観が8世紀後葉で一致したことである。

以上から、本住居跡出土土器は、従来の志木市の土師器編年で把握できない例であり、時期の設定には苦慮する所であるが、1の須恵器環形土器と6～9の武蔵型甕の年代観から、8世紀後葉に位置付けることとしたい。

338号住居跡出土遺物（第34図、図版21-1）

本住居跡から出土した遺物は、すべて土器で、器種構成は、須恵器環・高盤・壺形土器である。

まず、須恵器環形土器については、1・2・4が回転糸切り未調整の土器であり、9世紀以降の特徴を示している。これらを古代の人間を考える会で編年指標の基準とされる口径と内底径の比率（口径比率）を参考してみると、1は口径11.9cm・底径6.0cm・内底径4.8cm・口径比率40%、2は推定口径12.4cm・推定底径5.8cm・内底径5.8cm・口径比率47%、4は推定口径11.4cm・推定底径5.2cm・内底径4.8cm・口径比率42%である。その結果、2の値は、VIII期の内底径6.0cm～5.4cm、口径比率50～45%

に含まれるが、1・4は内底径ではX期の5.2～4.1cm、口径比率ではIX期の45～40%に該当し、やや食い違うが、法量の縮小化を考えるとIX期として比定することが妥当と考えられるため、時期については9世紀後葉に位置付けることとした（古代の入間を考える会 2015）。

須恵器蓋形土器については、東金子製品と考えられる。特徴として、口縁部が非口縁蓋であることから、古代の入間を考える会のIX期であることから、須恵器環形土器とほぼ同時期でよいであろう。

以上から、本住居跡出土土器は、おおよそ9世紀後葉に位置付けられるものと考えられる。

（3）339号住居跡出土の刀子・鎌について

続いて、339Hから出土した鉄製品の刀子と鎌について所見を述べる。

比較資料として、報告されている市内出土の古墳時代から平安時代にかけての刀子・鎌を集成した（第56・57図、第50・51表）。挿図については集成資料の中で遺存状況が良い資料を掲載した。

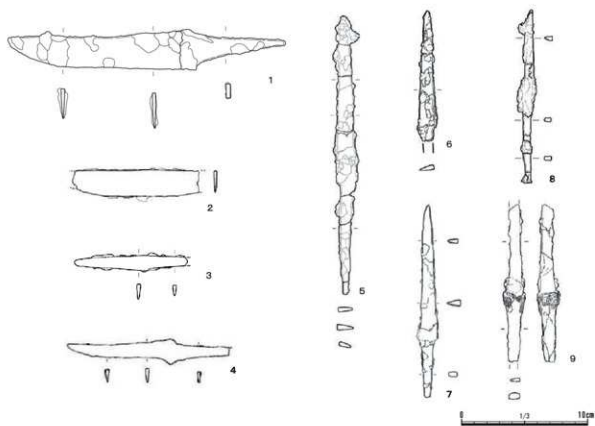
まず、刀子の出土点数は計33点であった。時代別には古墳時代後期8点、奈良時代4点、平安時代21点である。遺跡別では城山遺跡で11点（古墳時代後期6点、奈良時代1点、平安時代4点）、田子山遺跡で17点（古墳時代後期1点、平安時代16点）、中道遺跡で2点（古墳時代後期1点、平安時代1点）、西原大塚遺跡で奈良時代3点であった。

鎌の出土点数は計12点であった。時代別には古墳時代後期が6点、奈良時代が2点、平安時代が4点である。遺跡別では城山遺跡で9点（古墳時代後期4点、奈良時代2点、平安時代3点）、田子山遺跡で平安時代が1点、中道遺跡で古墳時代後期が2点であった。

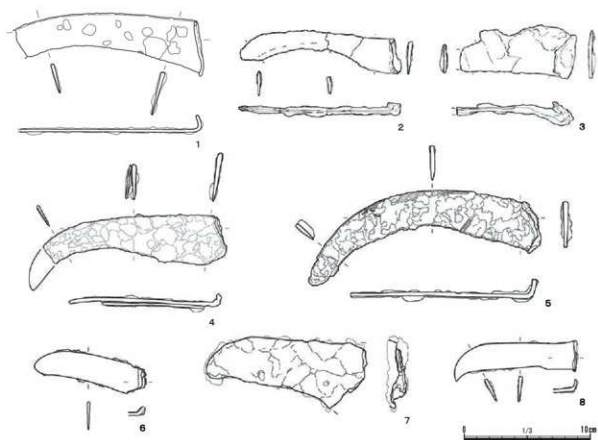
時代ごとで見れば、刀子は平安時代に急増している。それは特に田子山遺跡で顕著に確認される。南関東の6世紀から10世紀の鉄製品を集成し分析した古庄浩明氏は、奈良・平安時代以降、刀子の出土率が高くなる傾向を指摘している（古庄 1994）。鎌と比較し刀子の出土数が多いことは、埼玉県本庄市將軍塚・古井戸遺跡の事例で明らかにされ、刀子は鉄製品の中では最も普及度が高い器種と評価されている（富田 1988）。なお、市内において奈良時代に刀子・鎌の出土点数が少ない理由は、奈良時代の遺跡数・遺構数が少ないことに起因するものと考えられる。

今回出土した刀子は、他の資料よりも非常に幅広で大形であることは一目瞭然である。集成した刀子はどれも細身で、第56図2以外は、幅2cmを下回っている。刃部の研ぎ減りのため刃幅が狭まることは想定されるが、研ぎ減りの影響のない茎部幅を比較しても、本地点出土の第56図1が幅広であることが分かる。將軍塚・古井戸遺跡のH-103号住居跡（9世紀後葉）から、切先部のみであるが、幅3.2cmの包丁状の鉄製品が1点のみ出土している（赤熊・井上・岩瀬・富田 1988）が、管見の限り、類例は少ない。

通常、よく出土する細身の刀子と、類例の少ない幅広の大形刀子とでは、何が違うのであろうか。刀子の機能・用途については、工具や調理具、役人の文房具、装身具とも言われ（箱田 2013）、いわば万能利器である。よって、形態差から機能的差異を推測することは難しい（北見 2003）。しかし、幅広の刀子は、將軍塚・古井戸遺跡の例のように包丁（状）にも見える。ここで339Hの刀子の出土状況を見ると、カマド前面の床面直上からの出土であり、周辺には壘形土器や土製支脚が共に出土している。炊事の調理具としての用途を想起させるような出土状況である。ただし、日常の炊事に必要であれば、その類例の少なさは看過できない。今後、刀子の機能・用途を考察していくためには、類例の増加とともに、住居内の出土位置や他の遺物との位置関係といった出土状況の分析も必要となろう。



第56図 市内出土の古墳時代から平安時代の刀子 (1/3)



第57図 市内出土の古墳時代から平安時代の鎌 (1/3)

遺跡名	地点名	遺構名	長さ	幅	厚さ	重さ	主な特徴	時代	探検番号	掲載報告書
城山遺跡	第1地点	43号住居跡	10.0	2.1	0.4	—	先端部と基部を欠損する	平安 (9c後葉)	第5682	佐々木・尾形 1988
	第7地点	68号住居跡	15.0	1.6	0.6	18.3	完形/刃身部:長さ10.8cm/基部:長さ4.6cm	平安 (9c後葉)	第5687	佐々木・尾形 1991
	第60地点	196号住居跡	(4.0)	1.3	0.4	6.1	小破片/刀子ではない可能性あり	古墳後期(7c中葉)	—	尾形・徳留・鈴木他 2008
	第62地点	235号住居跡	22.0	1.8	0.5	30.4	完形/刃身部:長さ13.5cm/基部:長さ5.5cm	平安 (9c後葉)	第5685	尾形・徳留他 2012
		247号住居跡	(10.3)	1.6	0.5	11.4	基部を欠損/刃身部:長さ9.3cm	平安 (9c後葉)	第5686	—
	第91①地点	297号住居跡	(6.7)	1.1	0.2	4.1	先端部と基部を僅かに欠損する	古墳後期(7c中葉)	—	尾形・大久保他 2018
	第96地点	315号住居跡	(9.0)	1.2	0.3	8.1	基部端を欠損/刃身部:長さ5.9m	古墳後期(7c中葉)	第5683	尾形・徳留・大久保・遠竹他 2021
		(14.4)	1.3	0.2	3.4	両端部を欠損	—	—	—	
		321号住居跡	(3.2)	1.1	0.3	2.3	両端部を欠損	古墳後期(7c後葉)	—	—
	第99地点	164号住居跡	(7.1)	1.0	0.3	8.0	両端部を欠損	古墳後期(7c中葉)	—	尾形・大久保 2022
第102地点	339号住居跡	22.5	3.2	0.4	60.1	完形/刃身部:長さ14.9cm/基部:長さ7.6cm	奈良 (8c後葉)	第5681	本報告	
田子山遺跡	第4地点	3号住居跡	(3.7)	0.9	0.2	—	刃身部の一部を残す	平安	—	—
		(5.7)	0.6	0.5	—	基部の一部を残す/鉄鏝か	平安 (9c後葉)	—	—	
	第5地点	8号住居跡	(4.8)	0.6	0.4	—	基部の一部を残す/鉄鏝か	平安 (9後葉か)	—	—
		12号住居跡	(12.8)	1.3	0.3	—	基部端を僅かに欠損する/刃身部:長さ7.4cm	平安 (9後葉か)	第5684	佐々木・尾形 1992
	第6地点	13号住居跡	(6.3)	0.7	0.4	—	基部の一部を残す/鉄鏝か	—	—	—
			(4.6)	1.2	0.3	—	刃身-基部を若干残す/基部に木貫部が付着	平安 (9後葉か)	—	—
		15号住居跡	(13.1)	1.3	0.4	—	刃身部先端を欠損/基部:長さ7.0cm	—	—	—
	第19地点	18号住居跡	(6.8)	1.2	0.4	—	刃身部と基部の先端部を欠損する	平安 (9c中葉か)	—	佐々木・尾形 1992
			(7.2)	1.1	0.4	—	刃身部先端を欠損/基部:長さ3.5cm	—	—	—
		(7.2)	1.0	0.3	—	刃身部先端を欠損/基部:長さ3.6cm	—	—	—	
		(4.8)	0.9	0.3	—	両端部を欠損	平安 (9c中葉か)	—	尾形・深井 2000	
		(3.3)	0.9	0.5	—	刃身部を欠損	—	—	—	
		(9.3)	1.0	0.3	—	刃身部先端を欠損/基部:長さ3.3cm	平安 (9c後葉か)	—	尾形・深井 1999	
	第47地点	52号住居跡	(11.8)	1.2	0.5	—	刃身部と基部の先端部を欠損する	古墳後期(7c末葉)	—	尾形・深井 2003
第78地点	64号住居跡	(8.8)	1.6	0.4	12.4	刃身部先端を欠損/基部:長さ3.3cm	平安 (9c前~中葉)	—	尾形・深井 2016	
第132①地点	110 P	(5.2)	1.5	0.5	12.0	両端部を欠損	平安	—	尾形・徳留・深井 2016	
第160地点	82号住居跡	13.8	1.4	0.6	12.2	完形品	平安 (9c前葉)	第5688	尾形・大久保・石川他 2020	
中道遺跡	第33地点	17号住居跡	(12.9)	1.6	0.3	—	両端部を欠損/基部に木貫部が付着	古墳後期(7c中葉)	第5689	尾形・佐々木・深井 1996
	第87地点	28号住居跡	(6.5)	0.7	0.9	3.9	刃身部を欠損	平安 (9c中葉)	—	尾形・大久保・林 2020
西原大塚遺跡	区画V7地点	8号住居跡	(11.8)	1.6	0.2	—	両端部を欠損	奈良 (8c後葉)	—	佐々木・内野・宮川 2009
	第223地点	26号住居跡	(4.2)	0.6	0.4	4.6	基部の一部を残す/遺構外報告	奈良 (8c後葉)	—	尾形・徳留・大久保・松下他 2021
		(3.3)	0.7	0.4	3.3	基部の一部を残す/遺構外報告	奈良 (8c後葉)	—	—	

(単位: cm)

第50表 志木市出土の古墳時代から平安時代の刀子一覧(報告済)

遺跡名	地点名	遺構名	長さ	幅	厚さ	重さ	主な特徴	時代	探検番号	掲載報告書
城山遺跡	第1地点	24号住居跡	(3.5)	2.4	0.3	—	刃部の一部を残す	古墳後期(6c中葉)	—	佐々木・尾形 1988
		37号住居跡	(7.2)	3.6	0.3	—	刃部の一部を残す	奈良 (8c後葉)	—	—
	第62地点	235号住居跡	(22.0)	1.8	0.5	30.4	先端部を欠損	平安 (9c後葉)	第5784	尾形・徳留他 2012
		241号住居跡	18.6	3.5	0.4	65.0	完形	平安 (9c後葉)	第5785	尾形・徳留・中山他 2013
	第71地点	282号住居跡	(7.8)	3.6	0.4	25.3	基部を欠損	平安 (9c代)	第5787	尾形・徳留・村上他 2021
	第72地点	277号住居跡	(10.2)	3.1	0.3	23.6	基部を欠損	古墳後期(6c中葉)	—	尾形・徳留・大久保・遠竹他 2021
	第96地点	315号住居跡	8.8	2.2	0.2	18.6	完形	古墳後期(7c中葉)	第5786	尾形・徳留・大久保・遠竹他 2021
	第101地点	335号住居跡	10.0	2.0	0.3	20.6	完形	古墳後期(6c前葉)	第5788	徳留・大久保・尾形・木村・遠竹他 2023
	第102地点	339号住居跡	14.9	4.0	0.3	61.8	先端部を欠損	奈良 (8c後葉)	第5781	本報告
	田子山遺跡	第4地点	2号住居跡	(7.0)	2.0	0.3	—	両端部を欠損	平安 (9c後葉か)	—
(12.8)			2.7	0.3	—	概ね完形	—	—	—	
中道遺跡	第21地点	13号住居跡	(9.0)	3.7	0.3	—	先端部を欠損	古墳後期(7c中葉)	第5782 第5783	佐々木・尾形 1996

(単位: cm)

第51表 志木市出土の古墳時代から平安時代の鎌一覧(報告済)

鎌については、城山遺跡に出土例が多く、一方、刀子が多かった田子山遺跡では出土例が非常に少ない。古庄氏は、鎌・鋤といった農具と刀子の出土状況をまとめ、8世紀には刀子は一住居である世帯単位で所有され、収穫具である鎌は複数の住居で構成される世帯共同体単位での所有であったと考察した(古庄 1994)。そうであれば、世帯共同体内の特定の住居での所有・管理が考えられ、339Hはその住居に該当するであろうか。今後、城山遺跡を事例として、時期ごとの住居数・分布、鉄製品の出土状況を分析することで、世帯共同体単位が捉えられる可能性がある。

【註】

- 註1 3大別7細分については、3大別を古・中・新段階とし、7細別ではさらに古段階を第1～3段階に、中段階を第4・5段階に、新段階を第6・7段階に細分されている。なお、石井寛氏は第3段階を古段階から中段階の過渡的な時期として捉えており、厳密には古段階に含めていない(石井 1992)。
- 註2 小澤政彦氏によれば、関沢類型は第2段階に成立するとされている(小澤 2016)。

【引用・参考文献】

- 青木義裕・小倉 均・柳田博之 1996『会ノ谷遺跡発掘調査報告書(第7次)』浦和市遺跡調査会報告書第203集 浦和市遺跡調査会
- 赤熊浩一・井上尚明・岩瀬 穰・富田和夫 1988『將軍塚・古井戸 歴史時代編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第71集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 石井 寛 1992「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第9冊 財団法人横浜市ふるさと財団
2016「関東西部の称名寺式土器」『称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市歴史博物館
- 尾形則敏 1990「第6章 中野遺跡第9地点調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集 埼玉県志木市教育委員会
1999「いわゆる「比企型環」の編年基準の要点—小地域を対象とした編年の確立に向けて—」『あらかわ』第2号 あらかわ考古談話会
2000「志木市における古墳時代の土器編年(1)—5世紀から8世紀の環形土器の変遷—」『あらかわ』第3号 あらかわ考古談話会
2001「志木市における古墳時代の土器編年(2)—5世紀から8世紀の甗・甗形土器の変遷—」『あらかわ』第4号 あらかわ考古談話会
2005「第4章 まとめ」『城山遺跡第42地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告書第10集
2006「7世紀における「在地系土師器」の出現と歴史的意義—武蔵野台地北西部の無彩色・黒色系土師器の一事例—」『埼玉の考古学Ⅱ—埼玉考古第41号—』埼玉考古学会
2008「古墳時代後期の土師器研究の再認識—(仮称)「入間系土師器」の実態と生産地推定を例にして—」『埼玉考古』第43号 埼玉考古学会
2023「第4章 調査のまとめ」『埋蔵文化財調査報告書9』志木市の文化財第91集 埼玉県志木市教育委員会
2024「第4章 調査のまとめ」『埋蔵文化財調査報告書10』志木市の文化財第95集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・佐々木保俊 1990「志木市遺跡群Ⅱ」志木市の文化財第14集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・大久保聡他 2018「中道遺跡第76地点 城山遺跡第91①地点 西原大塚遺跡第211地点 埋蔵文化財発掘調査報告書」志木市の文化財第69集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・大久保聡 2022「城山遺跡第99地点 中野遺跡第114地点 中道遺跡第92地点 埋蔵文化財発掘調査報告書」志木市の文化財第84集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・大久保聡・石川安司他 2020「田子山遺跡第160地点 埋蔵文化財発掘調査報告書」志木市の文化財第77集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・大久保聡・中山哲也他 2013「城山遺跡第71地点 埋蔵文化財発掘調査報告書」志木市の文化財第54集 埼玉県志木市教育委員会

- 尾形剛敏・大久保聡・林 邦雄 2020『中道遺跡第87地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第73集 埼玉県志木教育委員会
- 尾形剛敏・大久保聡・深井恵子 2024『埋蔵文化財調査報告書10』志木市の文化財第95集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏・徳留彰紀他 2012『城山遺跡第62地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第48集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏・徳留彰紀・大久保聡・遠竹陽一郎他 2021『城山遺跡第96地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第78集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏・徳留彰紀・大久保聡・深井恵子 2023『埋蔵文化財調査報告書9』志木市の文化財第91集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏・徳留彰紀・深井恵子 2016『田子山遺跡第132①地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第65集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏・徳留彰紀・村上孝司他 2012『城山遺跡第72地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第49集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏・深井恵子 2000『埋蔵文化財調査報告書1』志木市の文化財第29集 埼玉県志木市教育委員会
1999『志木市遺跡群9』志木市の文化財第27集 埼玉県志木市教育委員会
2003『志木市遺跡群13』志木市の文化財第35集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏・藤波啓容・鈴木徹他 2008『城山遺跡第58・60地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第17集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 小澤政彦 2016『武蔵野・多摩地域周辺の土器系統：称名寺式』『シンポジウム 縄文研究の地平2016—新地平編年の再構築— 発表要旨』縄文研究の地平グループ
- 小田静夫・伊藤富治夫・C.T.Kealy 1976『前原遺跡』前原遺跡調査会
- 北見一弘 2003『刀子小考1』『市原市文化財センター研究紀要』Ⅳ 財団法人市原市文化財センター
- 佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳 2009『西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第13集 埼玉県志木市西原特定土地区画整理組合 埼玉県志木市遺跡調査会
- 佐々木保俊・尾形剛敏 1988『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第4集 埼玉県志木市遺跡調査会
1991『志木市遺跡群Ⅲ』志木市の文化財第16集 埼玉県志木市教育委員会
1992『中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点 発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第18集 埼玉県志木市遺跡調査会
1992『志木市遺跡群Ⅳ』志木市の文化財第17集 埼玉県志木市教育委員会
1996『城山遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点 発掘調査報告書』志木市の文化財第24集 埼玉県志木市教育委員会
- 桜岡正信 2003『武蔵型甕について—上野地域の生産と流通—』『高崎市史研究』第17号 高崎市史編さん専門委員会
- 鈴木徳雄 2007『称名寺式土器研究の諸問題—南関東地域の資料を中心として—』『第20回縄文セミナー—中期末から後期初頭の再検討』縄文セミナーの会
- 谷井 彪 1973『坂東山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第2集 埼玉県教育委員会
- 都築恵美子 2013『敷石住居址における居住空間の検討』『東国の考古学』群馬県考古学研究会
- 坪田幹男 1987『東部遺跡群Ⅴ』文化財調査報告第16集 埼玉県大井町教育委員会
- 徳留彰紀・大久保聡・尾形剛敏・木村結香・遠竹陽一郎他 2023『城山遺跡第101地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第93集 埼玉県志木市教育委員会
- 富田和夫 1988『Ⅳ 調査のまとめ 5. 鉄製品の様相』『狩塚塚・古井戸 歴史時代編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第71集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 富田和夫 2007『荒川附遺跡』埼玉県埋蔵文化財等調査事業団報告書第338集 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

第5章 調査のまとめ

- 根本 靖 1999「所沢市東の上遺跡の基礎研究Ⅱ—土師器煮滷具の変遷について—」『あらかわ』第2号 あらかわ考古談話会
- 箱田昌平 2013「包丁のイノベーションと日本料理の進化」『追手門経済論集』第47巻第2号 追手門学院大学経済学会
- 早坂廣人・堀 善之 2001『富士見市内遺跡Ⅹ』富士見市文化財報告第53集 富士見市教育委員会
- 板東雅樹・坂詰秀一・早川 泉他 1999『武蔵国分寺跡西方地区 武蔵台東遺跡Ⅱ 縄文時代』都宮川越道住宅遺跡調査会
- 昼間孝志 1989『金井遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第86集 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 古庄浩明 1994「古代における鉄製農工具の所有形態—6世紀から10世紀の南関東を中心として—」『考古学雑誌』第79巻第3号 日本考古学会
- 水口由紀子 1989「いわゆる“比企型坏”の再検討」『東京考古』第7号 東京考古学会
- 渡辺 一 1990a『鳩山窯跡群Ⅱ』鳩山窯跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会
- 1990b『南比企窯跡群の須恵器の年代～鳩山窯跡の年代を中心に～』『埼玉考古』第27号 埼玉考古学会
- 2007「須恵器の生産」『鳩山の遺跡・古代窯業』鳩山町史編さん調査報告書第10集 鳩山町教育委員会

图 版



1. 調査前風景



2. 表土剥ぎ風景



3. 4号住居跡遺物出土状態



4. 4号住居跡遺物出土状態



5. 5号住居跡遺物出土状態



6. 4号住居跡遺物出土状態



7. 4号住居跡遺物出土状態



1. 4号住居跡大形礫出土状態



2. 2号住居跡大形礫出土状態



3. 4号住居跡



4. 4号住居跡炉



5. 4号住居跡埋裏



6. 4号住居跡P1・10



7. 4号住居跡P2



1. 4号住居跡P 3



2. 4号住居跡P 4



3. 4号住居跡P 5



4. 4号住居跡P 6



5. 4号住居跡遺物P 7・8



6. 4号住居跡P11



7. 117号土坑



8. 118号土坑



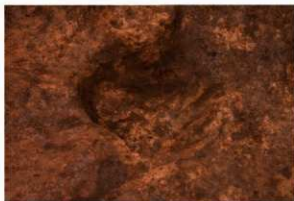
1. 119号土坑



2. 120号土坑



3. 2号ピット



4. 3号ピット



5. 5号ピット



6. 6号ピット



7. 3号住居跡



8. 3号住居跡



1. 3号住居跡凸堤付近



2. 3号住居跡掘り方



3. 114～116号土坑



4. 1号ピット



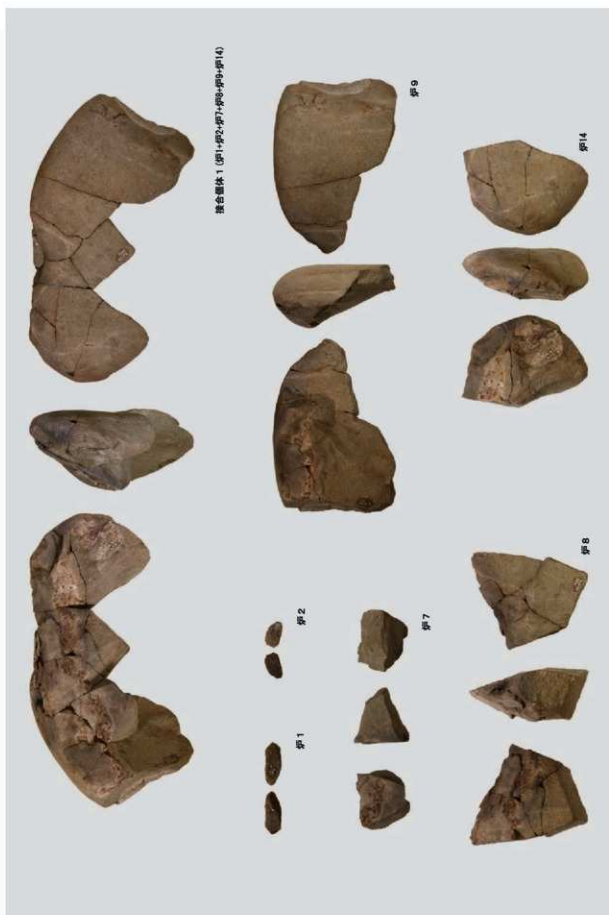
5. 4号ピット



6. 7号ピット



7. 調査風景



4号住居跡出土接合礫 1



4号住居跡出土接合礫 2



4号住居跡出土遺物 1



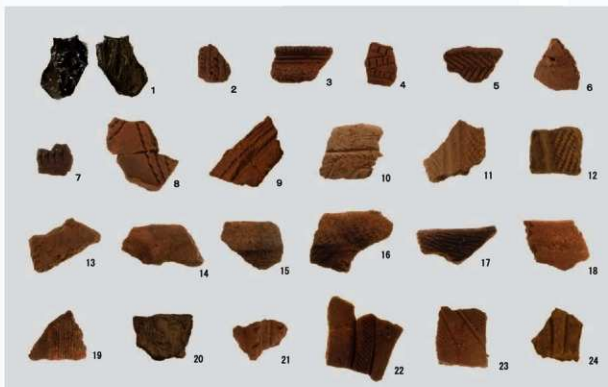
4号住居跡出土遺物2



1. 117号土坑出土遺物



2. 3号住居跡出土遺物



3. 遺構外出土遺物



1. 調査前風景



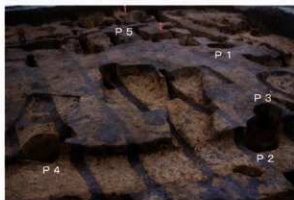
2. 確認調査風景



3. 表土剥ぎ風景



4. 遺構確認状況



5. 13号掘立柱建築遺構(南から)



6. 13号掘立柱建築遺構(東から)



7. 13号掘立柱建築遺構 P 1



8. 13号掘立柱建築遺構 P 2・3



1. 13号掘立柱建築遺構 P 4



2. 13号掘立柱建築遺構 P 5



3. 1444号土坑遺物出土状態



4. 1444号土坑



5. 56号ピット



6. 64号ピット



7. 76号ピット



8. 倒木痕



1. 340号住居跡遺物出土状態



2. 340号住居跡遺物出土状態



3. 340号住居跡(東から)



4. 340号住居跡(西から)



5. 340号住居跡カマド



6. 340号住居跡貯蔵穴



7. 340号住居跡P 1



8. 340号住居跡掘り方



1. 338号住居跡遺物出土状態(南から)



2. 338号住居跡遺物出土状態



3. 338号住居跡(西から)



4. 338号住居跡カマド



5. 338号住居跡カマド掘り方



6. 339号住居跡遺物出土状態



7. 339号住居跡遺物出土状態



8. 339号住居跡遺物出土状態



1. 339号住居跡刀子出土状態



2. 339号住居跡(南から)



3. 339号住居跡(西から)



4. 339号住居跡カマド



5. 339号住居跡 P 1



6. 339号住居跡 P 2



7. 339号住居跡 P 3



8. 339号住居跡掘り方



1. 1149・1150号土坑遺物出土状態



2. 1149・1150号土坑



3. 33・34号ピット



4. 1437号土坑



5. 1438号土坑



6. 1439号土坑



7. 1440号土坑



8. 1445号土坑



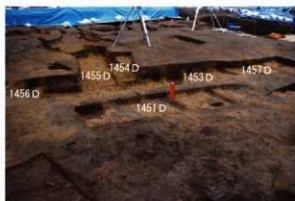
1. 1446号土坑



2. 1448号土坑



3. 1451～1457号土坑(東から)



4. 1451～1457号土坑(南から)



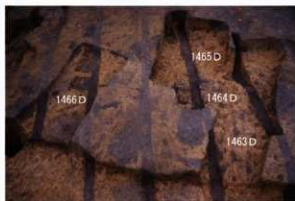
5. 1460号土坑



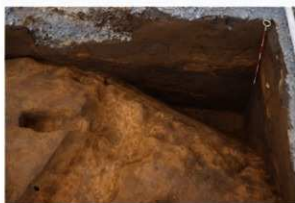
6. 1461号土坑



7. 1462号土坑



8. 1463～1466号土坑



1. 76号溝跡(東から)



2. 76号溝跡(南から)



3. 1号ピット



4. 11号ピット



5. 38号ピット



6. 61号ピット



7. 63号ピット



8. 77号ピット



1. 調査区全景(東から)



2. 調査区全景(南東から)



3. 調査区全景(北東から)



4. 調査風景



5. 埋戻し風景



1. 13号掘立柱建築遺構出土遺物



2. 1444号土坑出土遺物



3. 倒木痕出土遺物



4. 340号住居跡出土遺物



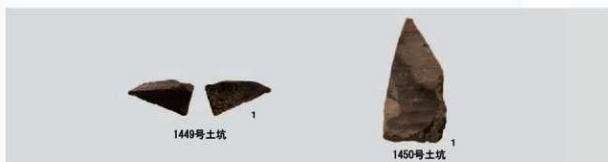
1. 338号住居跡出土遺物



2. 339号住居跡出土遺物 1



1. 339号住居跡出土遺物 2



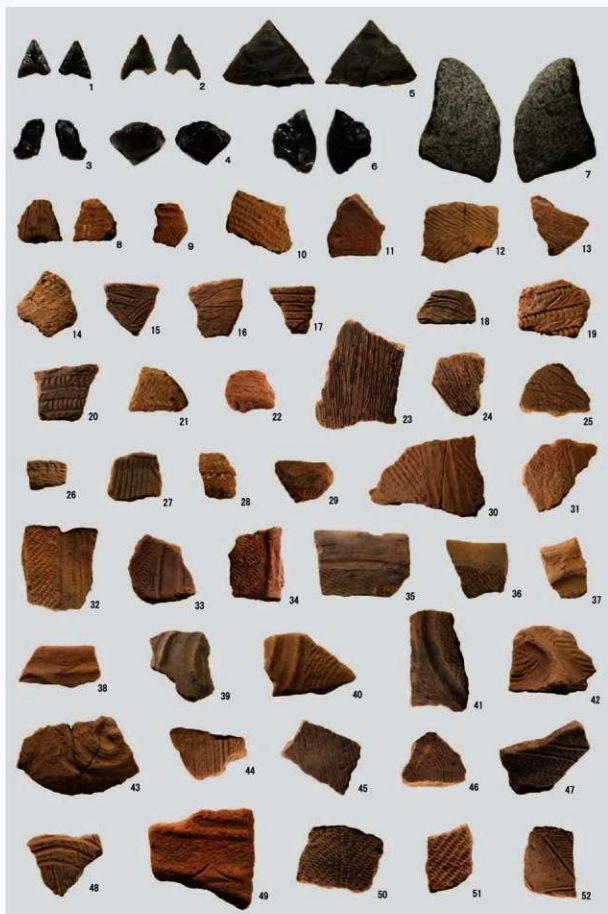
2. 平安時代の土坑出土遺物



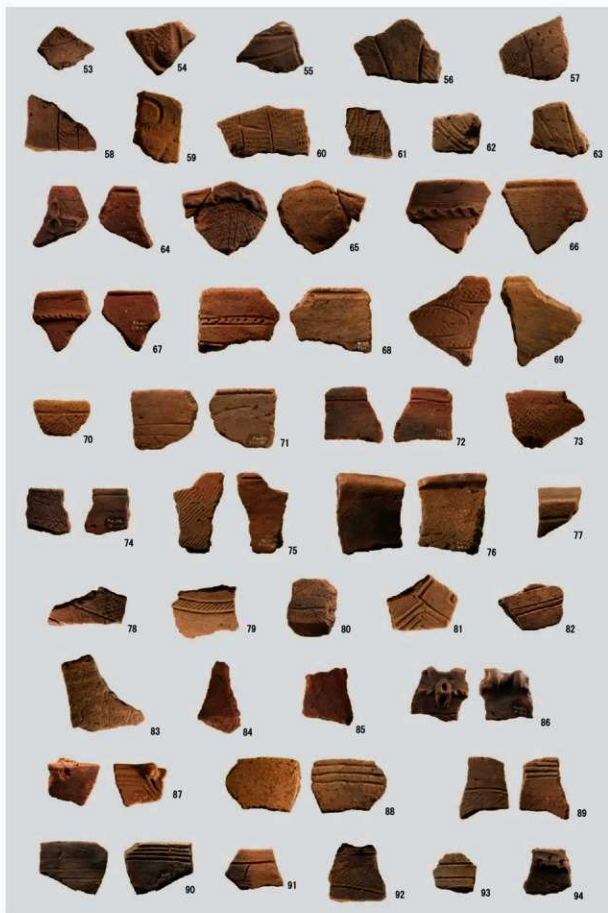
3. 中世以降の土坑・溝跡出土遺物



4. 中世以降のピット出土遺物



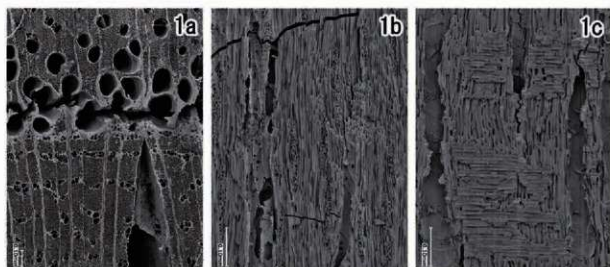
遺構外出土遺物 1



遺構外出土遺物 2



遺構外出土遺物3



1a-1c. クワ属 (330H-炭1)

a: 横断面, b: 接線断面, c: 放射断面

1. 城山遺跡第102地点339号住居跡出土の炭化材走査型電子顕微鏡写真



スケール 1-4, 6-9: 1mm, 5: 0.5mm

1. イネ炭化初殻 (340H-4, No. 2)、2. キビ炭化種子 (340H-4, No. 2)、3. アワ炭化種子 (340H-4, No. 2)、
4. オオムギ炭化種子 (340H-2)、5. イネ科炭化種子 (340号住居跡, 340H-4, No. 1)、
- 6・7. マメ科炭化種子 (340H-4, No. 2)、8. ヤナギタデ炭化果実 (340H-4, No. 2)、
9. サナエタデ-オオイヌタデ炭化果実 (340H-2)

2. 城山遺跡第102地点から出土した炭化種実

報告書抄録

ふりがな	しきしいせきぐん 27							
書名	志木市遺跡群 27							
シリーズ名	志木市の文化財							
シリーズ番号	第98集							
編著者氏名	大久保聡 尾形剛敏							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗園1丁目1番1号 TEL.048 (473) 1111							
発行年月日	令和6 (2024) 年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査期間	調査面積 (㎡) (全体面積)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中野遺跡 (第85地点)	志木市柏町 1丁目1515-17	11228	09-002	35° 49' 57"	139° 34' 24"	20131017 ～ 20131116	138.28 (161.53)	個人住宅建設
城山遺跡 (第102地点)	志木市柏町 3丁目2616-1	11228	09-003	35° 49' 57"	139° 34' 14"	20231031 ～ 20231227	109.31 (394.84)	個人住宅兼 事務所建築
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
中野遺跡 (第85地点)	集落跡・ 墓跡	縄文時代		住居跡 土坑 ピット	1軒 4基 3本	土器・石器・礫 土器	縄文時代後期初頭 (称名寺1式)の住居跡 (4J)は市内初の 検出となる柄鏡形敷石 住居である。	
		弥生時代後期 中世以降		住居跡 土坑 ピット	1軒 3基 4本	土器		
城山遺跡 (第102地点)	貝塚・ 城館跡・ 集落跡・ 墓跡	縄文時代		掘立柱建築遺構 土坑 ピット 倒木痕 住居跡	1基 1基 3本 1か所	土器・石器 土器 土器	縄文時代後期前 葉(堀之内式1式期) の掘立柱建築遺構 (13T)は市内では初 めての検出である。 奈良時代の住居跡 (339H)から出土した 刀子は長さ22.5cm と市内最大の大きさ である。 中世以降の溝跡 (76M)は柏の城関連 の堀跡と考えられる。	
		古墳時代後期		住居跡	1軒	土師器・鉄製品(釘)・そ の他(穿孔貝果穴痕跡軟質 泥岩)		
		奈良時代		住居跡	1軒	須恵器・土師器・土製品(支 脚)・鉄製品(刀子・鎌)		
		平安時代		住居跡 土坑	1軒 2基	須恵器 陶磁器		
		中世以降		土坑	28基	陶磁器・土器・鉄製品(釘)・ 石製品(おほじき)・銭貨(熊 尊元寶)		
			地下式坑 溝跡 ピット	1基 1本 72本	陶器・土器・鉄製品(釘) 陶器 銭貨(元豊通寶・祥符元 寶)・鉄滓			
要約								
<p>中野遺跡は、旧石器時代から近世までの複合遺跡である。今回の第85地点では、縄文時代後期初頭の住居跡1軒、弥生時代後期の住居跡1軒などが検出された。縄文時代後期初頭の住居跡(4J)は柄鏡形敷石住居である。</p> <p>城山遺跡は、旧石器時代から近世までの複合遺跡である。今回の第102地点からは、縄文時代の掘立柱建築遺構、古墳時代後期・奈良時代・平安時代の住居跡、中世以降の土坑、地下式坑、溝跡など、多数の遺構・遺物が検出された。特に奈良時代の住居跡(339H)から出土した鉄製品(刀子・鎌)のうち、刀子は完形品で、長さ22.5cmで、大形のものである。</p>								

志木市の文化財 第98集

志木市遺跡群 27

発行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発行日 令和6(2024)年3月29日
印刷 株式会社 白峰社